

56p
14

特



始



特266
464



岩波文庫

744-745

枕草子

(抄曙春)

卷中

池田龜鑑校訂



岩波書店



569-14

目次

卷五

七七	めでたきもの……………七
七八	なまめかしきもの……………二
七九	宮の五節……………一五
八〇	無名といふ琵琶……………二三
八一	上の御局の……………二六
八二	御めのとの太夫の……………二七
八三	ねたきもの……………二八
八四	かたはらいたきもの……………三三
八五	あさましきもの……………三五
八六	くちをしきもの……………三六
八七	五月の御精進のほど……………三八
八八	御かたがた、君達……………三九
八九	中納言殿まゐらせ給ひて……………四三

九〇	雨のうちには降るころ……………五四
九一	はやおほほささいの宮に……………五五

卷六

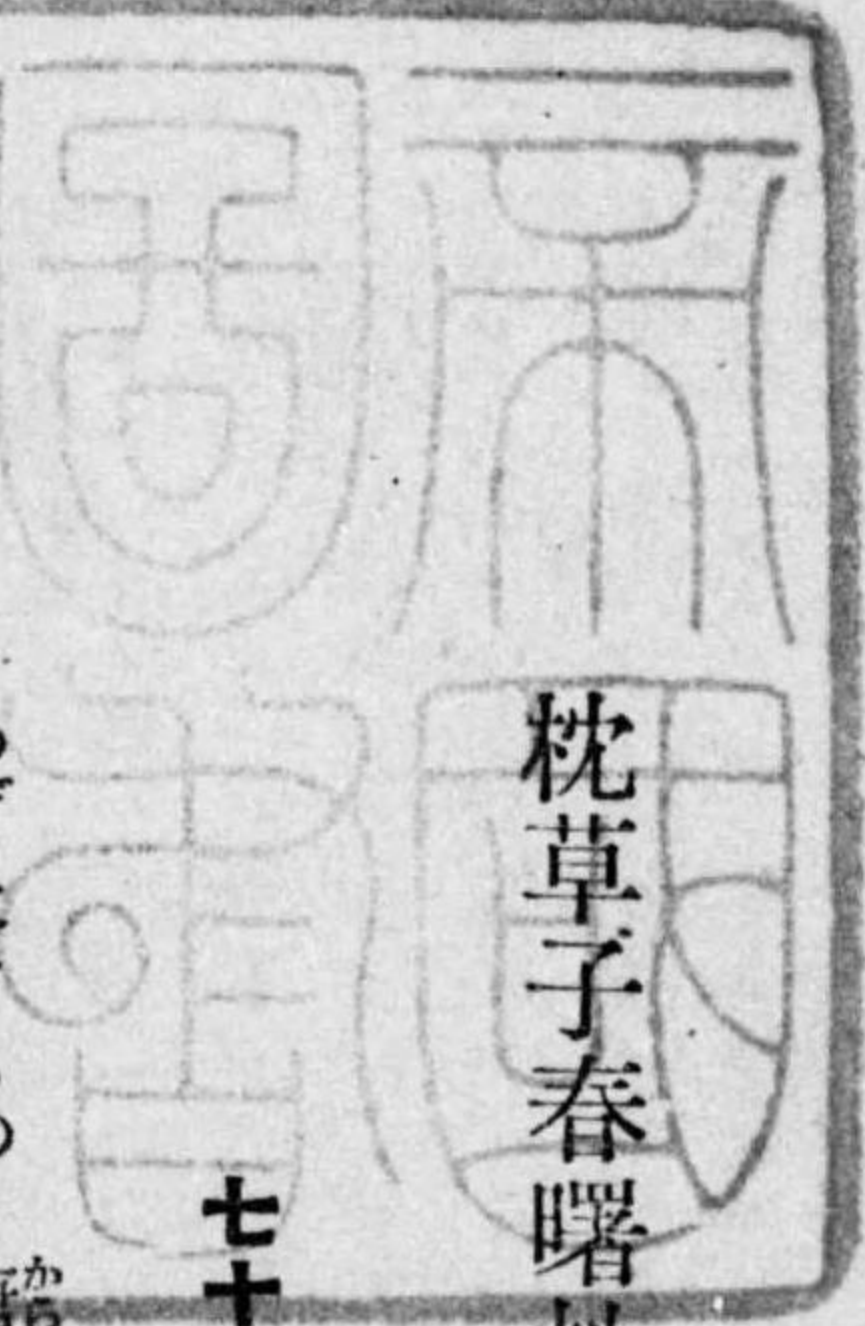
九二	作物所に別當する比……………五七
九三	淑景舎東宮に参り給ふ……………五八
九四	殿上より梅の花の……………六九
九五	二月つごもり……………六九
九六	はるかなる物……………七一
九七	方弘は……………七三
九八	關は……………七五
九九	森は……………七六
一〇〇	卯月の晦日に……………七七
一〇一	湯は……………七八
一〇二	常よりもことに聞ゆる物……………七八

一〇三	繪に書きて劣る物	七六
一〇四	書きまきりするもの	七九
一〇五	あはれなる物	七九
一〇六	正月に寺に	八三
一〇七	心づきなき物	九二
一〇八	わびしげに見ゆる物	九二
一〇九	暑げなるもの	九三
一一〇	恥しきもの	九四
卷七		
一一一	むとくなる物	九六
一一二	修法は	九六
一一三	はしたなきもの	九九
一一四	關白殿の	一〇三
一一五	九月ばかり	一〇四
一一六	七日の若菜を	一〇五
一一七	二月官のつかさに	一〇六
一一八	頭の辨の御許より	一〇八
一一九	などてつかさ得はじめたる	一一二
一二〇	故殿の御ために	一一三
一二一	頭の辨の	一一五
一二二	五月ばかりに	一一九
一二三	圓融院の	一二三
一二四	つれづれなるもの	一二六
一二五	つれづれ慰むる物	一二六
一二六	取り所なきもの	一二七
一二七	なほ世にめでたき物	一二八
一二八	故殿など	一二九
一二九	正月十日	一三二
一三〇	清げなる男の	一三三
一三一	おそろしきもの	一三五
一三二	清しと見ゆる物	一四五
一三三	汚げなる物	一四五
卷八		
一三四	いやしげなる物	一四七
一三五	胸つぶるる物	一四八
一三六	うつくしき物	一四九

一三七	人ばへする物	一五二
一三八	名おそろしき物	一五三
一三九	見るに異なる事なき物の文字に 書きて事々しき物	一五三
一四〇	むつかしげなる物	一五四
一四一	えせものの所得る折の事	一五四
一四二	苦しげなる物	一五九
一四三	羨しきもの	一六〇
一四四	疾くゆかしき物	一六三
一四五	心もとなき物	一六三
一四六	故殿の御服の頃	一六六
一四七	宰相中將齊信	一六九
一四八	此三月三十日	一七〇
一四九	弘徽殿とは	一七六
一五〇	昔覚えて不用なる物	一七八
一五一	頼もしげなき物	一七九
一五二	近くて遠き物	一八〇
一五三	遠くて近き物	一八〇
一五四	井は	一八一
一五五	受領は	一八二
一五六	やどりのつかさの權の守は	一八二
一五七	大夫は	一八三
一五八	女の獨り住む家などは	一八四
一五九	宮仕へ人の	一八五
一六〇	雪のいと高くは	一八八
一六一	村上の御時	一八九
一六二	御形の宣旨	一九一
卷九		
一六三	宮に初めて	一九三
一六四	したり顔なる物	一九三
一六五	風は	一九五
一六六	野分の又の日こそ	一九六
一六七	心憎き物	一九八
一六八	鳥は	一九九
一六九	濱は	二〇〇
一七〇	浦は	二〇一
一七一	寺は	二〇二

一七二	經は	二二三	一九一	おほきにてよき物	二二三
一七三	文は	二二四	一九二	短くてありぬべき物	二三四
一七四	佛は	二二五	一九三	人の家につきくしき物	二三四
一七五	物語は	二二七	一九四	物へ行く道に	二三五
一七六	野は	二二八	一九五	行幸はめでたき物	二三六
一七七	陀羅尼は	二二九	一九六	萬の事よりも	二三六
一七八	讀經は	二三〇	一九七	細殿に便なき人	二三八
一七九	遊びは	二三〇	一九八	三條の宮に	二四〇
一八〇	遊び事は	二三〇	一九九	十月十餘日の月	二四一
一八一	舞は	二三〇	二〇〇	成信の中將こそ	二四二
一八二	引ものは	二三三	二〇一	大藏卿ばかり	二四三
一八三	調は	二三三	二〇二	硯きたなげに	二四三
一八四	笛は	二三三	二〇三	珍しと言ふべき	二四五
一八五	見る物は	二三五			
一八六	五月ばかり	二三〇			
一八七	いみじう暑き比	二三二			
一八八	五日の菖蒲の	二三二			
一八九	よくだきしめたる薫物の	二三三			
一九〇	月のいとあかき	二三三			

一梅檀沈香等の
木像の木目也
二麴座の袍號青
色文桐竹鳳凰
三桃華葉に有り
三藏人所衆也
前註
四藏人ならぬ
問は是らの官位
の人の下座に居
て物の數も見
えざりしも藏人
になれはめでた
き也
五あまりにめで
たきをいはんこ
て也
六甘栗使禁中よ
りたつ也



枕草子春曙抄

卷五

七十七

めでたきもの 唐錦、飴太刀、造佛のもく、色合よく花房長く咲きたる藤の松にか
かりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき君達なれどもえしも着給はぬ
綾織物を心にまかせてきたる。青色姿などいとめでたきなり。所の衆、雑色、たゞ
の人の子どもなどにて、殿ばらの四位五位六位もつかさあるが下にうちあて、何と
見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずあさましくめでたきや。宣旨もて
まゐり、大饗の甘栗の使などにまゐりたるを、もてなし饗應し給ふさま、いづこな
りし天下り人ならんとこそおぼゆれ。御むすめの女御后におはします。まだ姫君な
ど聞ゆるも、御使にてまゐりたるに、御文取り入るよりうちはじめ、しとねさし
出づる袖ぐちなど、あけくれ見し物とおぼえず。下襲のしりひきちらして衛府な
るはいま少しをかしろ見ゆ。自ら盃さしなどし給ふを我心にもおぼゆらん。いみ
じうかしこまり、べちにゐし家の君達をもけしきばかりこそかしこまりたれ。おな
じやうにうちつれありく。うへのちかくつかはせ給ふさまなど見るは、ねたくさへ

七 舞應也、主人藏人にあひて祿給ふ事あり。江次第委六天人にやま也。六位藏人事也。九攝家大臣家の事也。二人内なきほご也。二御使にまぬれる六位藏人への會釋也。三裾也。三衛府藏人にて衛門兵衛など兼ねたる也。四攝家などにて一五六位藏人が心にも也。三句。三日比地下にてありし間一所にも居ず、畏まりたる人々にも藏人に成りては同

こそおぼゆれ。御文書かせ給へば、御硯の墨すり、御團扇などまゐり給へば、我づからまつるに、三年四年ばかりの程を、なりあしく、物の色よろしうてまじろはんはいふかひなきものなり。かうぶりえておりん事近くならんだに、命よりはまさりてをしかるべき事を其御賜りなど申してまどひけるこそ口惜しけれ。昔の藏人は今年今の春よりこそなきたちけれ。今の世にははしりくらべをなんする。

- めでたき物——見事なる也。
- からにしき——唐錦、蜀錦などなり。
- かざりだち——延喜式彈正云凡畫、太刀五位以上聽之。桃華葉云、飭劍三節會、内宴、御禊行幸等王卿用之云云。昔は二宮の大饗にも公卿以下飭劍を用ゐる。近代樋螺劍を着すと江次第にあり。
- 六位藏人——官位不審問答六位の時地下の者も藏人に補し候へば昇殿禁色をゆるされ候云云。
- ざふしき——藏人所雜色也。禁祕抄云本員八人。代々皆轉藏人、仍公卿子孫又可然諸大夫多補之。職原抄云良家子補之云云。
- せんじもてまゐり——内侍宣とて藏人奉勅の宣旨を六位藏人の持參する也。宣旨とはの給ふむねとよむ也。天子の仰せを藏人頭承りて其旨を直に宣下するを内侍宣とはいふ也。河海にあり。

じやうにつれありくも也。六句。元天子の藏人をめしつかはせ給ふ也。三帝御書か、三藏人也。三署比、侍臣など帝をあふき申さるれば藏人御團扇給はりてあふぐ也。三六位藏人にて侍るほご也。三六かたなる心也、六位藏人にてある程は衣裳などまじらへかしく也。三地下になりては御前へ參る事もなくなれは也。古今に命にもまさりてをしくある物はまよめる詞也。三イイ口。三藏人おりん事をなほく也。三今はむかしのやうにはなき心也。一博士の才智ある也、花鳥云博

- 大饗のあまぐりのつかひ——大臣の大饗に蘇甘栗の使とてあるに、六位藏人參る事也。大臣大饗とは大臣に任せられたる人。大納言以下、辨、少納言、官外記史などまで饗應せらるゝ事也。江次第第二日、大臣家大饗正月四日、左大臣、饗藤氏、大臣用、朱器臺盤。以二其日、可レ行由以二職事、達二天、聽。是非二式日、時依レ可レ遣二蘇甘栗、使並饗祿樂部等事、一歟。藏人到二中門、以二家司、令レ奉二蘇甘栗等。盛二折櫃二合、一合、蘇大、一合、甘栗大、各居二土高、坏二入、二外居、一荷、小舍人、二人衣冠相具。仕丁二人着二荒染、持レ之、藏人着二青色、袍二於對底、可レ進歟。
 - 御使にて——藏人のまゐる也。禁祕抄云、御使事、依レ人依レ事有二差別。藏人頭、近衛將、五位藏人、六位藏人等也下略。
 - 御文とりいるゝより——女御后まだ姫君の方へ取りいるゝ也。禁祕抄云、御書事、后女御以下於二女房、無二定子、細二勿論歟、料紙女房許多薄様、後々檀紙也上下略。
 - かうぶりえておりん事近く——六位藏人巡爵とて五位に叙して、藏人をさりて、地下におるゝ事也前註。
 - 其御たまはりなど申して——御給也。巡爵ののち受領など申す事也。
- 博士のざえあるはいとめてたしといふもおろかなり。顔もいとにくげにげらふなれども、世にやんごとなき物に思はれ、かしこき御前に近づきまゐり、さるべき事な

士は博達之士といふ事也
 二才智ゆゑに世にたふさまる也
 三禁裏春宮などを書していふ也
 四詩序など也
 五至りてめでたき心也
 六晨朝日中などに經よむ事也
 七讀經也
 八才ある法師は猶也
 九たれなごいふ心也
 一〇灯明おそしきの心也
 一一行啓
 一二是も中宮の御産也
 一三作法がましき心也
 一四御膳を据ゑる物也、桐壺卷に大床子のおものあり
 一五徳、御膳御飯のため也

ど問はせ給ふ御文の師にてさぶらふはめでたくこそ覺ゆれ。願文もさるべきもの
 序つくり出して賞めらるゝいとめでたし。法師のさえあるすべていふべきにあらず。
 持經者の獨りして讀むよりも、あまたが中にて、時など定まりたる御讀經などに、
 猶いとめでたき也。暗うなりて「いづら御讀經油遅し」などといひて讀み止みたる
 ほど忍びやかにつゞけるたるよ。后のひるの行啓。御産屋。みやはじめの作法しく。
 狛犬。大しやうじなどもてまゐりて、御帳の前にしつらひ据ゑ、内膳、御籠わたし
 奉りなどしたる。姫君など聞えしたゞ人とこそ露見えさせ給はね。一の人の御あ
 りき。春日詣。葡萄染の織物。すべて紫なるはなにもくめてたくこそあれ。花も
 糸も紙も。紫の花の中には杜若ぞすこしにきき。色はめでたし。六位の宿直姿のを
 かしきにも紫のゆゑなめり。廣き庭に雪の降り敷きたる。今上一の宮まだ童にて
 おはしますか御をぢに上達部などの若やかに清げなるに抱かれさせ給ひて、殿上人
 など召しつかひ、御馬ひかせて御覽しあそばせ給へる、思ふ事おはせじと覺ゆる。
 ○はかせのさえある——儒家に紀傳明經などあり。環萃云、明經道は十三經
 を以て家業とす。紀傳道は三史史記漢書後漢書文選等を家業とす。
 ○下らふなれども——官位ひきき事也。文章博士は從五位下。大學博士は正六
 位下の相當也。官位令にあり。

六句
 七人内以前の其人とも見えず嚴重なる也
 八攝政關白を申す也
 九藤原の祖神なれば必ず一人の參詣ある事也
 一〇補苜染は紫なるにつけて也
 一一花、糸、紙何も紫よし也
 一二三句
 一三花の形を云ふ也
 一四是も色は憎からぬ也
 一五六位藏人の宿直姿也
 一六禁色をゆるゆゑに也

○御ふみの師にて——帝の御師範也。御侍讀として候する也。禁秘抄云、紀傳御侍讀能々可有清撰二世之所許明書也。
 ○願文——御祈禱追善等にかく文也。本朝文粹菅家文章などに願文數多有り。
 ○いづら御どきやらあぶらおそし——くらくて人はよみやみたるに才ある法師はそらに覺えて一人讀誦する也。
 ○后のひるのぎやうけい——晝行啓春宮后宮の御ありきを行啓といふ也。
 ○みやはじめのさほうしく——立后の作法禁中のごとく、狛犬、大床子などしつらふ事也。こゝは定子の皇后宮に立給ひしはじめの作法しき事にや。正曆元年六月一日なるべし。榮花物語かやく藤壺の卷に、上東門院立后の所云、此たびは藤壺の御しつらひ大床子たて、御帳の前のこま犬なども常の事ながらめとゞまりたり云云。
 ○内膳御へついわたし奉り——百寮訓要云、内膳司天子の供御を奉行する所也。たとへば膳部所など申す所と同事也。昔は内膳の御飯ならでは主上はきこしめさぬ事也。およそもろくの御膳の具は、此所におかる云云。立后有りては禁中の儀式をうつすさまなるべし。
 ○今上一の宮——キンジャウイチノ一條院の第一の皇子敦康親王の御事にや。御母は后宮定子なれば、御叔父に内大臣伊周、中納言隆家卿など上達部あり。

一直衣着たる姿也
 二句
 三汗衫、前に註す
 四イラづちくすたまなご
 五高欄也、らんかんなり
 六顔にさしかざしたる也
 七若き女房也
 八か女房の着たる物也
 九薄様にて書きし草紙也
 二村濃
 三イもえ出たる
 四三重
 五厚也
 六檜扇の手もこ也
 七檜破籠也

なまめかしきもの、ほそやかにきよげなる公達の直衣姿、をかしげなる童女の表の袴などわざとにはあらで。綻びがちなる汗衫ばかり着て、薬玉など長くつけて、かうらんのもとに扇さしかくしてゐたる。若き人のかしげなる、夏の几帳のしたうちかけて、白き綾、二藍引襲ねて、手習ひしたる。薄様の草紙、村濃の糸してをかしくとぢたる。柳の萌えたるに、青き薄様に書きたる文附けたる。髻籠のかしう染めたる、五葉の枝につけたる。三重襲の扇。五重はあまり厚くなりて、もとなどにくげ也。よくしたる檜破籠。白き組の細き。あたらしくもなくていたくふりてもなき檜皮屋に菖蒲うるはしくふきわたしたる。青やかなる御簾の下より朽木形のあざやかに紐いとつやゝかにてかゝりたる。紐の吹き靡かされたるもをか。夏の帽額のあざやかなる簾の外のかうらんのわたりに、いとをかしげなる猫のありき、首綱に白き札つきて碇の緒食ひつきて引きありくもなまめいたり。五月の節のあやめの藏人。菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬを領巾裙帯などして、薬玉を、みこ達上達部などの立並み給へるに奉るもいみじうなまめかし。とりて腰にひきつけて舞踏し拜し給ふもいとをか。ひとりの童、小忌の君達もいとなまめかし。六位の青色の宿直姿。臨時の祭の舞人。五節の童なまめかし。

七十八

六組糸のほそき也
 一九檜皮屋也
 二菖蒲
 三イ几帳のくちきかたのトアリ可用
 三簾の外也
 三首綱也、猫の引つな也
 三猫の名なご書きて札付けしにや
 二五領巾裙帯
 二立並也、たちならび也
 三毛玉卿薬玉をさりて也
 三舞踏也、前注
 三五拜也
 三六位藏人也、前注

○なまめかしき物——優美なる心也。
 ○きんたち——公達とは攝家の子息、清華などを申す也。
 ○うへのはかま——表袴。
 ○夏のきちやう——几帳の帷、夏は生絹を用ゐる。したうちかけてとは、几帳のかたびらのすそを帳臺にうちかけたる也。
 ○ひげこのをかしうそめたる——髻籠の竹を繪の具などにてそめて五葉の松にゆひつけし也。
 ○みへがさねのあふぎ——河海抄云、檜扇の兩方の上三重づゝ薄様にてつゝみて、色々の糸にてとぢて、あはひむすびにしておきたる也。五重もおなじ風情なり。
 ○くちぎがたの——冬の几帳の繪也。禁秘抄清涼殿の所にいはく、四面有二几帳一帷夏生以二胡粉一畫一葦雀一冬朽木形云云。
 ○いかりのを——猫の綱に碇をつけて物にかけて猫を引とゞめんためにしたる也。其緒を猫の食ひたれたるさま也。
 ○五月のせちのあやめの藏人——五月五日の節に内侍女藏人續命縷を群臣に給ふと花鳥餘情にあり。前注。是をあやめの藏人といふにや。
 ○あかひもの色にはあらぬ——赤紐は五節などの時、紗をたゞみてあふひむす

びをして泥繪など書きて、右の肩に二筋つくる事あり。菖蒲のかづらは其赤紐の色ならであをきをいふ也。

○ひれくたいなどして——領巾、裙帶也。順和名云、領巾、日本紀私記云、比禮婦人項上飾也。裙帶。和名云、白氏文集云青羅裙帶裙帶此間云如字。

○ひとりわらはは——五節の舞姫まるる時、薰爐をもつ童女也。江次第十云、舞姫等次第參入。先童女一人持火取二次童女一人持茵五節調臺試并御前試の所にもあり。

○をみの君達——是豊明の節會に小忌衣着したる君達也。江次第に小忌王卿。小忌大夫などいへるこれ也。幻の卷五せちの比の所に、頭中將藏人少將などをみにあをずりのすがたきよげにめやすくてとあり。河海云、小忌青摺山藍摺也。花鳥云、十一月中卯日新嘗會辰日豊明節會には、山あるにてする小忌といふ物を着する也。一代一度の大嘗會にもかくのごとし云云。

○りんじのまつりの舞人——賀茂八幡などの臨時の祭に舞人あり。前註。江次第等委シ。

○五せちのわらはは——五節の舞妓の童也。善相公異見曰、五節舞妓者大嘗會時五人、皆預二叙位、其後年々新嘗會時四人。又曰擇良家女未嫁者二置爲五節妓云云。

七十九

- 一句、ニイ女御みやす所の
- 三女院の御方の
- 人淑景舎の御
- 方の人兄弟也
- 四舞妓かしづき
- なごの也
- 五赤紐、前二注
- ス
- 六様子したる也
- 七小忌のさま也
- 八櫻木也
- 九唐衣のうへに
- かの小忌を着た
- るなるべし
- 一〇イニからきぬ
- うへに
- 二舞妓也
- 三傳シモヅカハ
- 江次第によめり
- 十二人のかしづ
- きにや
- 三隠してし給へ

宮の五節出させ給ふに、かしづき十二人。こと所には御息所の人出すをば、わろき事にぞするときくに、いかにおぼすか、宮の女房を十人出させ給ふ。今ふたりは女院淑景舎の人やがてはらからなりけり。辰の日の青摺の唐衣汗衫を着せ給へり。女房にだにかねてさしも知らせず、殿上人にはましていみじうかくして、皆装束したちて、暗うなりたる程にもてきて着す。赤紐いみじう結び下げて、いみじくやうしたる白き衣にかた木のかた、繪に書きたる。織物の唐衣の上に着たるは誠にめづらしき中に、わらはははいま少しなまめきたり。下仕へまでつゞきたちするたる。上達部殿上人おどろき興じて、をみの女房とつけたり。をみの君達は外にゐて、ものいひなどす。五節の局をみなこぼちすかして、いとあやしくてあらする、いと異様なり。其夜まではなほうるはしくこそあらめと宣はせて、さもまどはさず、几帳どもの綻結ひつゝ、こぼれ出てたり。小兵衛といふが、赤紐の解けたるを、これを結ばばやといへば、實方の中將よりてつくるふにたゞならず。

あし引の山ゐの水はこほれるをいかなる紐の解くるなるらん。

○宮の五せち出させ給ふに——后宮定子の御方より也。常は公卿受領より出すといひかく。

ほ也
 西小忌の君達と
 いふになぞらへ
 て名付けたるな
 るべし
 一五外也
 一六舞妓もを也
 七つくろふさま
 也
 八袖口なごなる
 べし
 九イ少辨もあり
 然れども千載集
 にも此本のごと
 し
 三心けさうし給
 へるに也
 三實方の歌也

事なれども、又かやらの御方よりも取持ち給ふ事にや。少女卷に源氏の五節を
 出し給ひし事あり。

○かしづき十二人。少女卷にもかしづきなどとあり。抄かいしやくの人をいふ
 べし云々。江次第十五節の所に、童女傳といへる是也。

○みやす所の人を——源氏に桐壺更衣光君をうみ給うて後、御息所といへり。
 細流云、御子を生み奉りて後、御息所と號するやうに此物語にはいづくにもい
 へり。一條禪閣御説云、又東宮の正室は必ず御息所といふ。是后がね也云云。然
 らば、此草紙のみやす所は御子うみ給ふ説によらば、定子の御事にや。又東宮
 の正室とならば、淑景舎なるべけれど、此草紙の趣は定子の御事可然也。

○女院——東三條院詮子也。一條院の母后。法興院攝政兼家公の御女、河海云、
 東三條院正暦二年七月一日院號依レ爲三國母也。定子の伯母也。

○しげいさ——三條院の女御。中關白道隆公の御むすめ。母高内侍。清少納言
 も後は此御かたに候するよし榮花物語に見ゆ。定子の御妹也。淑景舎は桐壺の
 事也。五間四面の御殿也。

○たつの日の青ずりのからぎぬかざみ——花鳥餘情云、舞妓の裝束丑日は赤色
 の唐衣、寅日は青色唐衣、辰日青摺唐衣、赤紐、日蔭鬘等也。あをずりは小忌
 の事也云云。雲圖抄云、十一月五節事丑日帳臺試、寅日淵醉并御前試、卯日

童御覽。辰日節會云云。公事根源にも粗しるさる。

○しろききぬにかた木のかた——一條禪閣宗祇に御傳授の大嘗會の説云、小忌
 といふは神事の衣服也。白き布を張りて、山あるといふ草にて椶木を摺れる物
 也。大かた狩衣のごとし云云。こゝには白き絹とあり。女房の服には絹を用ゐ
 るにや。

○五せちのつぼねをみなこぼちすかして——辰日の儀式事はてての事なるべ
 し。

○其夜まではなほうるはしくこそあらめとのたまはせて——此儀式を猶あかず
 おぼす故に、局などこぼちても、猶夜迄は舞妓のさまやつきでうるはしくてあ
 れとて、さもいたくしなさせ給はぬと也。后宮の御はからひなるべし。

○小兵衛といふが——是后宮の女房也。前に常陸介が事を右近内侍にまねばせ
 し人也。かしづき十人の内にや。

○さねかたの中將——勘物云、實方正暦二年九月右中將元右馬頭五年九月八日左
 中將。

○あし引の山井の歌——足引は山の枕詞也。我思ひのむすぼほれたるを山井の
 氷にそへたり。下句は彼赤紐のとけしを、氷をひもといふによせてよめり。此歌
 後拾遺集、雜五に實方の歌也。彼集にては雜のうたなれど、此草紙にはたゞなら

一 小兵衛が事也
 二 顯證、あらはに晴れがましき所なれば恥しきにやとの心也
 三 おさなき女はうたち也
 四 此歌の返しにさりあへぬ也
 五 中宮大夫以下の宮司也
 六 返歌なくて笑止さに人の見ぬかたより入りて清少なごに返歌を宮司のそのかす也
 七 宮司の詞也、いかでかく返歌し給はぬぞ也
 八 是より清少の心也
 九 實方をさして也
 一〇 大かたならぬうたにはさ也
 一一 にはさいふ心

ずとあれば戀にや。
 年わかき人のさる顯證の程なれば、いひにくきにやあらん、返しもせず、そのかたはらなるおきな人たちもうちすてつゝともかくもいはぬを、宮司などは耳止めて聞きけるに、久しくなりにけるかたはらいたきに、ことかたより入りて、女房のもとによりて、「などかうはおはする」などぞさゝめくなるに、四人ばかりを隔ててゐたれば、よく思ひ得たらんにもいひにくし。まして歌よむと知りたらん人の、おぼろげならざらんは、いかでかかつましましきこそはわろけれ。よむ人はさやはある。いとめでたからねど、ねたふとこそはいへ」と爪はじきをしてありくも、いとをかしかれば、
 薄氷泡に結べる紐なればかざす日かげにゆるぶばかりを

と辨のおとどといふにつたへさすれば、消え入りつゝ得もいひやらず。「などかく」と耳を傾けて問ふに、すこしことどもりする人のいみじうつくろひ、めでたしと聞かせんと思ひければ、得も云ひつゞけずなりぬるこそ、なか／＼はちかくす心地してよかりしか。おりのほるおくりなどに惱ましといひいれぬる人も、の給はせしかば、有る限むれたちて、ことにも似ず、あまりこそうるさげなめれ。舞姫はすけまさのむまのかみの女、染殿の式部卿の宮の御おとうとの四の君の御はら十二にていとをかしげなり。果ての夜もおひかづきいくもさわかず。やがて仁壽殿より通りて、

也
 三 宮司の清少なごには伊ましいへる詞也
 三 清少返歌、千載集にはうはごほりあはにさあり
 一四 くるる心也
 一五 千載にはぞトアリ
 一六 是も后宮の女房也
 一七 辨恥ぢたるさま也
 一八 宮司えきかぬ也、又實方の聞きさり給はぬにてもあらんにや
 一九 辨のおさなきもる人さ也
 二〇 心ををつくるふ也
 二一 かの返歌をよくいひきかせざりしは清少のほぢをかくすなりしと卑下の詞也

清涼殿の前の東のすのこより、舞姫をさきにて、上の御局へ参りし程をかしかりき。

○ 四人ばかりをへだててゐたれば——清少は小兵衛とのあはひ四人ほど隔てたれば、たとひよき返歌を思ひえたりとても人をさしこえては返歌いひにくしと也。

○ 歌よむとしりたらん人の——歌よみと知りたる實方の、大かたならぬ此歌には、いかでか卒爾に返歌すべきと清少もつゝましく憶せしこそ折節わるかれと也。

○ よむ人はさやはある——歌よむ人はさやうに返歌せずやあらんとはげますことば也。

○ いとめでたからねど——たとひめでたからぬ歌にも返歌せぬは妬くあるとこそいふ習ひなれ、まして是程の歌に返し給はぬはいかゞとはぢしめはげます也。

○ つまはじきをして——人を拒み恥ぢしむるさま也。帚木巻に、むくつけき事とつまはじきをしてとあり。空蟬巻にもあり。

○ うす氷あわに歌——彼實方の山井は氷るに、いかでとくる紐ぞとがめしをうけて泡に結べるはかなき氷なれば日影にゆるびとくるぞと理りたる也。是も紐に氷をそへ、日蔭のかづらを日の影にそへたり。此歌千載集にはうは氷とあ

三后宮の仰せつけられしかほも也
 三三三所の五節に似ず也
 三后宮の五節也
 三三三未勅
 三是后宮の五節助正のむすめの母也
 三助正の女也
 三容貌儀なごほむる也
 三元仁壽殿也
 三此五節の道筋、雲圖抄に圖有り
 三后宮の上局也
 三是も清涼殿の事なるべし
 一紫紙の文なるべし
 二封也
 三是より又五節の事を立ちかへりいふ也
 四細工せし物にや

り尤可然也。とまりも斗ぞとあり。畢竟同心なるべし。
 ○ことどもりする人——瘧コトドモリ法華經譬喻品云若得^レ爲^レ二人聾盲瘡癩一誘^レ二斯經^レ一故獲^レ罪如^レ是^レ中略。
 ○おりのぼるおくりなどに——五節の帳臺の試、御前の試などに下り上る其送り、或は所勞など申し入りし女房をも、后宮の懇にの給ひしかば、各のこらず群立ちて女房おほくあまりうるさきまで有りしと也。
 ○そめどのの式部卿——紹運錄村上天皇の皇子爲平親王を染殿式部卿と號す云云。

○はての夜もおひかづきいくにもさわがず——助正のむすめの十二歳なるを負ひかづき打ちつれ行くにも、うちしづまりておとなしくをかきき人と也。はての夜とは辰日節會の時にや。但し卯日童御覽の事にや。公事根源に卯日は童御覽ず。清涼殿に召して御覽す云云。
 細劍の平緒つけて、清げなるをこのもてわたるもいとなまめかし。紫の紙をつみみて封じて、房長き藤につけたるもいとをかし。内裏は五節の程こそすゝろに只ならで見る人もかしう覺ゆれ。主殿司などの、色々の細工を物忌のやうにて、彩色つけたるなども珍しく見ゆ。清涼殿のそりはしにもとゆひの村濃いとけざやかにていでるたるも、さまざまにつけてをかしののみ、上灘仕、童ども、いみじき色ふし

五物思つけたるやうにせしにや
 六彩色付けたるにや
 七鬘河邊、女孺なごのさまなるべし
 八柳宮
 九冠
 一〇あふぎ拍子笏ひやうしなごして也
 二うたひ物なるべし
 三重波也
 三三三節にそひたるかしづき也
 四心さきめきする也
 五助字也
 六颯也
 七あまたのこゑなれば也
 八掻練重さうぞく也
 九萬物よりこなる也
 一〇藏人が褒貶する也

と思ひたるいと理也。山藍、日蔭など柳宮に入れて、冠したる男もてありく、いとをかしの見ゆ。殿上人の直衣ぬぎたれて、扇や何やと拍子にして、つかさまされどしきなみぞたつといふ歌をうたひて、局どものまへわたる程はいみじく、そひたちたらん人の心騒ぎぬべしかし。まして、さと、一度に笑ひなどしたるいと恐し。行事の藏人の掻練重、物よりことに清らに見ゆ。褥など敷きたれど、なか／＼えものぼりゐず。女房の出でたるさま譽めそしり、此頃はこと事はなか／＼めり。帳臺の夜、行事の藏人いとさびしうもてなして、いかいつくろひ二人、童より外は入るまじしとおさへて、おもにくきまでいへば、殿上人など、猶これひとりばかりはなどの給ふ。うらやみあり。いかでか／＼などかた／＼いふに、宮の御かたの女房二十人ばかりしこりて、こと／＼しういひたる藏人なにともせず、戸を押し明けて、さきめきれば、呆れて、いとこはすぢなき世かなとてたてるもをかし。それにつきてぞ、かしづきどももみないけるけしきいとねたげなり。上もおはしまして、いとをかしと御覽しおはしますらんかし。童舞の夜はいとをかし。燈臺に向ひたる顔どもいとらうたげにをかしかりき。

○はそだちのひらを——細劍平緒、此一節と次の段も五節の事に連続せず。只なまめかしき物をいふなるべし。
 ○とのもりづかさなどのいろ／＼のさいくを——雲圖抄裏書に御前の試みの

三五節の沙汰は
 かり也
 三帳臺試
 三是江次第にい
 へる童女なるべ
 し、薰爐菌など
 持つもの也
 三西あまりきびし
 くてつらにくき
 也
 三藏人が詞也、
 一人をいれるは
 他のうらやみあ
 れは、いかで一
 人もゆるさんさ
 也
 三后宮也
 三押凝りてさ、
 めきいれはさつ
 づけて見るべし
 三后宮の御威光
 をおそる、也
 三藏人がさま也
 三是は也
 三主上一條院也
 三耶日堂御覽の
 夜の事にや
 三三五節の童のか
 ば也

夜、主殿の官人庭中に列立ちて、炬火を擧ぐる事あり。又辰日の節會に、舞姫
 參上シテ於第三間一列舞。主殿女嬀四人乗燭照舞云云。此時主殿の女嬀のい
 でたちに、さやうの事あるなるべし。未レ及二管見一追而可レ考。
 ○うへぎふしわらはべ——上雜仕童にや。
 ○いみじき色ふしと——五節の比の事を面白き事に思ふさま也。
 ○山あゝ日かげなと——山藍にてすれる物や、日蔭の糸など、五節の用意に柳
 筥にいれありくにや。
 ○やないばこ——柳筥、公家衆の冠沓短冊など萬の物をすゑる物也。今僧家の
 送り經をのする物也。
 ○なほしぬぎたれ——脱垂、脱亂、兩義也。
 ○行事の藏人——雲圖抄十一月五節事云、一藏人爲二行事。有二故障一之時、二三
 藏勉レ事。いま案ずるに行事の藏人とは舞の間亂入を禁ずる奉行也。江次第有り。
 ○しとねなどしきたれど——女中より行事の藏人のために茵をさし出せど憚り
 たるさま也。
 ○ちやうだいの夜——公事根源云中丑日をば五節の帳臺試と云ふ。常寧殿に
 て主上御覽あり。五節の舞姫は五人也。まゐりの儀式あり。内に參るをば曉
 座といふ、皆まゐり調りて帳臺に出御なる。殿上人ども脂燭に侍ふ。主上御直

一無名といふ琵琶
 無名といふ琵琶の御ことを、上のもてわたらせ給へるを見などして掻き鳴らしなど
 すといへば、引くにはあらず、緒などを手まさぐりにして、これが名よ、いかにとか
 やしなど聞えさするに、たゞいとはかなく名もなしとのたまはせたるは猶いとめ
 猶也

衣に指貫にて御沓を召さる。主上御指貫をめさるゝ事此時の外はなし。但御鞞
 の時は帳臺試に准じて召さるゝ也。帳臺におはしますほど龍舞あり。びんたゝ
 らなどうたふ。大歌小歌などいふにあり下略猶江次第委し。圖は雲圖抄にあり。
 ○行事の藏人いときびしうもてなして——物見る人などの亂入を禁ずるさま
 也。江次第帳臺試云藏人頭行事藏人立二舞殿東戸下二開闔舞間禁二亂入一理髮童女
 陪從下仕之外不可レ入。頭若行事藏人外不可レ能レ伺二戸外一上下略。
 ○かいつくろひ二人——五節のかしづきのたぐひ也。後拾遺の詞書に一條院御
 時、皇后宮五節奉り給ひけるに、かいつくろひつかうまつりける人の、つけて
 侍りけるあか紐のとけて云云。これ江次第に理髮一人とある物なるべし。
 ○猶これひとりなどはどの給ふ——殿上人の物見る人を具しきたりて一人はい
 れよと佗ぶるさまなり
 ○ことごとくしくいひつる藏人——殿上人などにはきびしくいひし藏人の、后宮
 の御かたの人々には何ともえいはざりしと也。

八十

一無名といふ琵琶
 無名といふ琵琶の御ことを、上のもてわたらせ給へるを見などして掻き鳴らしなど
 すといへば、引くにはあらず、緒などを手まさぐりにして、これが名よ、いかにとか
 やしなど聞えさするに、たゞいとはかなく名もなしとのたまはせたるは猶いとめ
 猶也

三后宮の御かたへ也
 四しけいさの詞也
 五笙也
 六僧都の詞也
 七我にたべよ也
 八琴也
 九しけいさ同心ならぬさま也
 一〇いひまぎらはす也
 一一僧都のしひて望む心ほへ也
 一二しけいさの猶同心ならぬさま也
 一三后宮のしけいさの心を察しての詞也
 一四笙の事也、管の類を皆ふえこ云ふ也
 一五禁中の御事也、是いなかへじの事を釋する詞也

てたくこそ覺えしか。淑景舎などわたり給ひて御物語のついでに「まるがもとにいとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させ給へり」との給ふを、僧都のきみの「それは隆圓にたうべ。おのれがもとにめてたき琴侍り。それにかへさせ給へと申給ふを、聞きも入れ給はで、猶こと事をの給ふに、いらへさせ奉らんとあまたたび聞え給ふに、猶物のたまはねば、宮の御まへのいなかへじとおぼいたる物をとの給はせけるが、いみじうをかしき事ぞ限りなき。此御笛の名を僧都の君も得知り給はざりければ、たどうらめしとぞおぼしためる。これは職の御曹司におはしましよときのことなり。上の御前にいな替へじといふ御笛の候ふなり。御前に候ふものどもは、琴も笛もみなめづらしき名つきてこそあれ。琵琶は玄象、牧馬、あゝへ、渭橋、無名など、又和琴なども、朽目、鹽竈、二貫などぞ聞ゆ。水龍、小水龍、宇多の法師、銚打、葉二つ、何くれとおほく聞えしかど忘れにけり、「宜陽殿の一の棚に」といふことぐさは、頭中將こそし給ひしか。

○むみやうといふびはの——無名、拾芥云上東門院名物也、或說蟬丸琵琶、上東門院令坐三濟時亭之時爲三回祿一燒失畢。愚案せみ丸のといふ説もあれば、むかしより禁中に有りしゆゑ、定子の御方へももてわたらせ給へるなるべし。

○しけいさ——淑景舎女御也。后宮の御いもうと也。

一六玄上、又玄象
 一七牧馬
 一八いニゐて
 一九渭橋
 二〇無名、前二注ス
 二一和琴
 二二朽目
 二三鹽竈
 二四是よりさまざまの樂器をいふ也
 二五字多法師
 二六釘打
 二七葉二
 二八何やかやも也
 二九宜陽殿也
 三〇齊信卿にや

○ことのゝえさせ給へり——故殿とはかくれ給へる父君の御事也。中關白のしげいさへまゐらさせ給ふ也。

○僧都のきみ——勘物云、隆圓、隆家兄弟正曆四年權少僧都五不經律師。寛弘八年四月權大僧都二長和四年二月卒七。

○いなかへじとおぼい——其笙を琴にはかへまじきとしげいしやのおぼしたる物をと也。江談云、不替、是笙名也。唐人賣之、千石ニ買ハント云フ。イナカヘジト云ヒケレバ、以レ之爲レ名云云拾芥名物部にもあり。

○此御ふゑの名を——此不替といふ笙の名を隆圓知り給はねば、此后宮の御詞の秀句をしらで、只御あいさつなきと恨み給ふ也。

○びははげんじやう——古今著聞云、玄象が撥面の繪はきえて久しく成りにたればしれる人なし。二條殿教通公、仰せられけるは、玄象が撥面の繪やうは、馬上にてたまをうつ物、腰にたまをさして舞ひたる姿也下略。禁秘抄云、或曰玄象吞三青鉢之水二所謂號二玄象一。又玄上宰相獻三延喜帝一仍號二玄上一。但妙音院入道付二玄上説一歟。

○ぼくば——拾芥云牧馬與二玄上一雙名物也下略。

○あゝへ——井上は拾芥に和琴の名也。耆及翁の勘物に井手とあり。拾芥に在二宇治寶藏一云云琵琶也。

○るきやう——拾芥云、渭橋、三條式部卿琵琶、一名爲堯。
 ○くちめ——拾芥、和琴部云朽目或朽部。
 ○しほがま——耄及勘物云、鹽竈和琴云。但拾芥名物部ニハ箏の名也。和琴にも此名あるか。可尋之。

○二貫——勘物、和琴云云。

○すゐろうこすゐろう——水龍、拾芥名物笛部云大水龍、江記云天曆御宇寶物小水龍同。

○うたのほうし——拾芥和琴部云、宇多法師寛平法皇貴重餘有ニ此名。河海云宇多法師和琴名物也。以レ繪作レ之。一條院御時内裏焼亡之時焼失云云。

○くぎうち——拾芥笛部釘打。

○はふたつ——拾芥笛部葉二、江談曰號ニ朱雀門、鬼笛ニ又號ニ青葉ニ歟。江談委。

○ぎやうでんの一のたな——よき樂器をほむる詞に頭中將のいへるなるべし。

源氏若菜上云、此御琴宜陽殿の御物にて、代々に第一の名ありし御琴云云。細流云、宜陽殿昔は樂器、書籍等をおかるゝ所也。河海云、西宮抄云納殿累代御物在ニ宜陽殿、恒例御物納ニ藏人所。

八十一

一是より別の物
 二退也
 三格子也、かう
 四みじかき燈臺
 五イさりいれ
 六后宮の琵琶
 七火影あはせしが
 八は弾きやみはなれ
 九にもたせ給ふ也
 十后宮の御装束
 十一句
 十二紅の御衣に往
 十三また張りたる物
 十四なごめしたる也
 十五琵琶を也
 十六傍也
 十七あざやかなる
 十八也
 十九かたはらより
 二十ほのかに見え給
 二十一清少のほさり
 二十二ちかき女房に也
 二十三清少のいふ詞
 二十四也、琵琶行の詞
 二十五也、かしら書に
 二十六有
 二十七僧家のむすめ
 二十八なれば也、これ
 二十九は后宮なればい
 三十也

上の御局のみすの前にて、殿上人、日一日、琴笛ふきあそびくらしてまかして別る程、まだ格子を參らぬに、大殿油をさし出でたれば、外のあきたるがあらはなれば、琵琶の御ことを、たゞさまにもたせ給へり。紅の御衣のいふも世の常なる。桂、又はりたるもあまた奉りて、いと黒くつややかなる御琵琶に、御衣の袖をうちかけてとらへさせ給へるめでたきに、そばより御額のほど白くけざやかにて、わづかに見えさせ給へるは、譬ふべきかたなくめでたし。近く居給へる人にさしよりに「なかば隠したりけんも得かうはあらざりけんかし。それは唯人にこそありけめ」といふを聞きて心地もなきを、わりなく分け入りて啓すれば、笑はせ給ひて、「我は知りたりや」となん仰せらるゝと傳ふるもをかし。

○なかばかくしたりけんも——琵琶行云、千呼萬喚始出來。猶抱ニ琵琶ニ半遮レ面云云。是かの僧家のむすめのありさま也。それをおもひよせていへるなるべし。

八十二

御めのとの太夫の今日日向へ下るに給はする扇ともの中に、片つ方は、日いと花やかにさし出でて旅人のある所、井手の中將の館などいふさまいとをかしう書きて、いま片つ方には京の方、雨いみじうふりたるに、眺めたる人など書きたるに

一 宅彼女房は琵琶行をき、しらする也
 二 中宮に直に申すにはあらず人して申せしなるべし
 三 元彼の取次の人の也、清少に傳ふる也
 四 一是より別のものがたり也
 五 二日向
 六 三誰しらさず
 七 四館也
 八 五后宮の御うた也
 九 六歌のやうにもあらず、后宮の自筆にあらはせし也
 十 七さやうの君を也
 十一 八此乳母の日向へゆくをあやしみがめたる詞也
 十二 一歌の事也
 十三 二てにをはなご也

茜さす日向ひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらんと
 詞に御手づから書かせ給ひし、あはれなりき。さる君をおき奉りて、遠くこそ得行くまじけれ。

○御めのとの大輔——后宮の御乳母なるべし。道隆公隠れ給ひ、伊周公左遷などの比、心みじかきめのとにて見捨てまゐらするにや。
 ○たまはする扇ども——むかしは餞別に扇をつかはせしにや。うちの隆家つくしへ下向の餞に扇をつかはして枇杷の皇太后宮

「涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風な忘れそ」
 新古今にあり。源氏夕顔巻にも、空蟬が伊豫へ下るに源氏君より扇をつかはされし事あり。

○あかねさす日に歌——赤根さすとは、日出づるに、赤き光さすをいふ也。日向に向うてもといふに、日向をよみ給へり。ながめは長雨をそへて也。日向に行きても、我が都にて思ひ晴らすかたなく詠むる事を思ひ出でよと也。詞花集ニ入ル。

八十三

ねたきもの 一これより遣るも、人のいひたる返しも、書きて遣りつるのち、文字一

一 是よりかへさまにぬひたる物がたり也
 二 西對也
 三 三みちたか公也
 四 四定子也
 五 五后宮よりのおほせ也、急に御用の衣裳ぞこ也
 六 六平縦ヒラヌキにや
 七 七片身
 八 八弓長の方也、左のかたをいふ也
 九 九ぬひたがへたる也
 十 一〇はやくさしおきし也
 十一 一二命婦のめご陳していへる詞也

つ二つなど思ひなほしたる。とみの物縫ふに、縫ひ果てつと思ひて、針を引き抜きたれば、はやう尻を結ばざりけり。又かへさまに縫ひたるもいとねたし。

○人のいひたる返しも——人の歌いひおこせしに返歌する事也。
 ○おもひなほしたる——かやうによむべきものをと思ひ出でたる也。

南の院におはします比、西の對に殿のおはしますかたに宮もおはしますせば、寢殿に集りて、さうくしければ、ふれあそびをし、渡殿に集りゐなどしてあるに、「これ只今、とみの物なり。誰も誰も集りて、時かはさず縫ひて参らせよ」とて、平ぬきの御衣を給はせたらば、南表に集りて、御衣片身づゝ、誰かとか縫ひ出づるといどみつゝ、近くも向はず縫ふさまもいと物ぐるほし。命婦の乳母、いとと縫ひ果ててうち置きつる、ゆだけのかたの御身を縫ひつるが、そむきざまなるを見つげず、とぢめもしあへずまどひ置きて立ちぬるに、御せあはせんとすれば、はやう違ひにけり。笑ひ罵りて、「これ縫ひなほせ」といふを「誰が、あしう縫ひたりと知りてかなほさん。綾などならばこそ、裏を見ざらん。縫ひたがへの人の、げになほさめ。無紋の御衣なり。なにをしるしにてか、なほす人誰かあらん。たゞまだ縫ひ給はざらん人になほさせよ」とて、聞きも入れねば、「さいひてあらんや」とて、源少納言、新中納言などいひなほし給ひし顔、見やりてゐたりしこそをかしかりしか。これ夜ざりのぼらせ給はんとて、「とく縫ひたらん人を思ふと知らん」と仰せられし

三平縦ごあり
 三命婦まけず口にいふ詞也
 一四命婦がさま也
 一五命婦があやま
 りをさまん、い
 ひなほしあいさ
 つし給ふ也
 一六今夜参内ある
 べき其御料のぬ
 ひ物也

か。

○みなみのゐんに——南院は四條の北壬生の西に有り。是忠親王の家なりし、又六條の北、烏丸の西にもあり。小一條院の御領と拾芥にあり。此草紙にいへるは、中關白道隆公の家ときこゆ。奥に道隆公の積善寺にて一切經供養の所にも出づ。

○ふれあそびをし——女房達立ちそひあそぶことなり。

○時かはさず——不^ス時替^{トキカハサ}、時をかへず也。時をうつさずのことろ也。

○ちかくもむかはさず——女房めんくにはなれりて縫ふさま也。人に見合させまじきのため也。

○命婦のめのと——后宮の御かたの人なるべし。

○御せあはせん——衣の背を合はせんとするなり。

○あやなどならばこそ、うらを見ざらん。ぬひたがへの人のげになほさめ——綾は紋あり、うらおもても見分けやすき物なれば、ぬひたがへたる人のあやまりにて、ぬひなほすべき事と也。

○ききもいれねば——ぬひなほせといふをききもいれぬ命婦のめとのさま也

○源少納言、新中納言——此兩人系圖等考へがたし。

○かほ見やりて——兩人のいひなほさるる顔を清少の見やる也。下心命婦をあ

一是より又ねた
 きもの也
 二はしり出でて
 たきたき也
 三鋤
 四提也
 五制すべき男な
 らぬ折はさ
 やうにほりて
 えいなぬ也
 六受領、國司の
 事也
 七外よりきたる
 文をはひりて
 也
 八立也
 九句

ざわらふ心あり。

見すまじき人に、ほかへ遣りたる文とりたがへてもて行きたるねたし。「げにあやま
 ちてけり」とはいはで、口かたうあらがひたる、人目をだに思はずは、走りもうち
 つべし。おもしろき萩、薄などを植ゑて見るほどに、長櫃もたる者、鋤などひきさ
 げて、たゞ掘りに掘りていぬるこそ、わびしうねたかりけれ。よろしき人などのあ
 る折はさもせぬものを、いみじう制すれど、「たゞ少し」などいひていぬる、いふか
 ひなくねたし。受領などのきて、なめげに物いひ、さりとて我をばいかゞと思ひたる
 けはひにいひ出でたるいとねたげ也。見すまじき人の、文をひき取りて、庭におりて
 見たてる、いとわびしうねたく、追ひて行けど。すのもとにとまりて見るこそ、飛
 びもいでぬべき心地すれ。

○げにあやまちてけりとはいはで——使のあやまりて、こと所へもてゆきて、我
 あやまりたるとはいはで、清少のそこへもてゆけといひ付け給ひしと口かたく
 あらがふさま也。

○ながびつもたる者——萩などほりうゑんとてなるべし。爲仲朝臣、陸奥の任
 果てて、上洛の時、宮城野の萩を長櫃十二合に入れて入京の事。長明無名抄に
 有り。

○いみじくせいすれど——清少などやらの女どち有りて、いみじくせいしいへ

一 させる事なき
事を女のほらだ
ちて也
二 女のさま也
三 身じろき出づ
る也
四 イしめて最可
用
五 女の同心せぬ
也
六 怨也
七 ふうすまなご身
にまごひたる也
八 女のさま也、
漸くさむくなり

ども、おちざるさま也。
○なめげに物いひ——受領の身のいきほひにおごりて無禮なる心也。
○さりて我をばいかゞと——さやうに無禮にいふとも我を何とせんとおごり
たるけしき也。清少は后宮の御方の人にて、受領をいやしむる事勿論也。され
ども受領はいきほひあれば也。
○おもひてゆけど——句、文をとりかへさまほしくて、追ひて行けども簾の外
まではえ出でねば、すのもとに立ちどまりて飛びも出でまほしくて見わたるさ
ま也。

すどろなる事腹立ちて、同じ所にも寝ず、身じくり出づるを、忍びて引き寄せられど、
わりなく心ことなれば、あまりになりて、人も「さはよかなり」と怨じて、か
くみて臥しぬるのち、いと寒き折などに、只一重ぎぬばかりにて、あやにくがり
て。大かた皆人も寝たるに、さすがに起きるらんあやしくて。夜の更くるまゝにね
たく起きてぞいぬべかりけるなど思ひ臥したるに、奥にも外にも物うち鳴りなどし
て恐ろしければ、やをらまろびよりて、衣引きあぐるに、空寝したるこそいとねた
けれ。「なほこそはがり給はめ」などうちいひたるよ。
○しのびて引きよすれど——イしひて引よすれど、最可然也。夫の女を引きよ
すれど也。

しさまなるべし
九句
一〇 下々なごはね
たる也
二句
一 三女のかたより
忍びきたる人な
るべし
二 三外也
一 四物の音してお
そろしき也
一 五女のさま也
一 六をまごのふす
まなご引きあけ
よる也
一 七男のさま也
一 八男の詞
一 九ねたき心をふ
くめたり

一 くりごをい
ふ也
二 何ほごのは
かりもあるまじ
き心なり

○人もさはよかなりとえじて——あまり女の心こはければ、男もはらだちて、
さあらば、よし〜と怨じうらみて衾など引きかづきて臥したる也。
○あやにくがりて——同所ながらに別々にそむきみて、あやにくに寒くなりた
れば也。
○さすがにおきみらんあやしくて——人は皆ねたるに女一人おきみたらんもさ
すがにあやしければ、其まゝふしたるさま也。みらんは居たらん也。「春たてば
花とや見らん」も見たるらん心也。其詞と同じ。
○やをらまろびより——寒く物おそろしさに念じ侘びてやがてそろりと男の方
へころびよりて也。
○なほこそはがり給はめなど——此上にも猶心こはくし給はんよと女をこら
しめいふ也。

八十四

かたはらいたきもの 客人などにあひて、物いふに、奥の方のうち解けごと人のい
ふを、制せて聞く心地、思ふ人のいたく酔ひて、同じ事したる。聞きわたるをもし
らで人のうへいひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、傍いたし。旅たち
たる所、近き所などにて下衆どものざれかはしたる。にくげなるちごを、おのれが

三其兒のこゑを
にせて也
四其子のいひし
事也
五才智ある也
六古人の名也
七起也
八琴の調子よく
知りたる人也
九いささう、
最も早く也
二〇句
二むすめのもと
にかよはぬむこ
也

心地にかなしと思ふまゝに、うつくしみ遊ばし、これが聲のまねにて、いひける事
などかたりたる。才ある人の前にて、才なき人の、物おぼえ顔に人の名などいひた
る。殊によしとも覺えぬ我が歌を人に語りきかせて、人の譽めし事などいふも、傍
いたし。人の起きて物語などする傍に、あさましううちとけて寝たる人、まだね
も弾きとゝのへぬ琴を、心一つやりてさやうのかた知りつる人の前にて弾く、いと
どしう。住まぬ婿の、さるべき所にて鼻に逢ひたる。

○かたはらいたき——はづかしくをかしく氣味あしき心也。
○せいせでできく——客あるにないひそともいはで也。客の前にてはしかられね
ば也。

○きゝるたるをもしらで——其ぬしのききるるをしらでうはさを陰ごとする
也。

○旅だちたる所ちかき所——旅宿又は我がきく近所にて、下人のおのが同志男
女ざれかはす也。

○おのれが心にかなしとおもふ——いとほしく思ふ心なり。伊勢物語に、ひと
つごにさへありければ、いとかなしうし給ひけり云云。

○ことによしともおぼえぬわがうた——きく人はよしともおぼえぬおのが歌を
也。又の義さのみよしともおぼえぬ清少のうたを、友達のあいさつに、人のほめ



一さはりて也
二くつがへりた
る也
三八雲抄云ゆた
かにしづかなり
さいふ心也
四つゝしみもな
く也
五兒にてもおこ
なにても也
六イわすられて
七双六也、前註
八重目うちて人
に筒をさられし
也

しなど人にかたる也。但し初の義可然なり。
○まだねもひきととのへぬ琴——よくしらべとゝのへぬこと也。
○心ひとつをやりて——人もゆるさぬ不堪の所作を、おのが心ひとつにまんじ
て弾ずる也。
○いとどしう——前々のかたはらいたき物の品々をうけて、是らさへあるに、
ましてなどいふこゝろ也。

八十五

あさましきもの さし櫛みがくほどに、物にさへて折れたる。車のうちかへされた
る。さるおほのかなる物は、ところせく久しくなどやあらんとこそ思ひしか。只夢の
心ちして淺ましうあやなし。人のために恥づかしき事、つゝみもなく、ちごも大人も
いひたる、かならず來なんと思ふ人を待ちあかして、曉方にたゞいさゝか忘れて
寝入りたるに、鳥のいと近くかうと鳴くに、うち見上げたれば、晝になりたる、い
とあさまし。てらばみに、どう取られたる。無下に知らず見ず聞かぬ事を人のさし
向ひて、あらがはずべくもなく言ひたる。物うちこぼしたるもあさまし。賭弓にわ
ななく久しうありて、外したる矢の、もて離れてことかたへ行きたる。
○さしぐしみながくほど——白氏文集樂府云、石上磨二玉簪一玉欲成中

九 無實をしひて
 いひおほする也
 一〇 賭弓、正月十
 八日也
 二 ふるひく射
 たる也
 三 しほしたもち
 てはなつ也

央折

○ところせく久しくなどや——車などのゆたかなる物はくつがへるも、所狭く物につかへなどして、しづかにほどへてこそたふれめと思ひしに急にたふれて夢のやうにあさましと也。

○からすのいとちかくかうと鳴く——讀詞花集二十戲咲部

大僧正覺忠

「逢ふことはかたおとりする山がらす今はかうとぞねはなかれける」

○のり弓——河海抄云、賭射、清和天皇の貞觀二年正月十八日始之。賭弓は天子弓場殿に幸して弓を御覽する也。仲春の月弓を見る事禮記より出でたり。四府左右近衛の舍人射之、左右の大將射手の奏をとる。事果てて、饗を給ふ也。近衛の管領なる故也。猶江次第ニ委シ。雲圖抄に圖あり。

八十六

一 其他可然儀式
 の折也
 二 かねて經營し
 ていつか其時な
 らんさまちまう
 くる心也

くちをしきもの 節會、佛名に雪降らで雨のかき暮らし降りたる。節會、さるべき折の御物忌にあたりたる。いとなみいつしかと思ひたる事の、さはること出てきて俄にとまりたる。いみじうする人の子生まで年頃具したる。遊をもし、見すべき事もあるに、必ずきなんと思ひて呼びにやりつる人の、「さはる事有りて」などいひて

三 寵愛する女也
 四 相そふ也
 五 音楽也
 六 衣なごの好ま
 しい車よりこほ
 れ出でし也
 七 用意ありさま
 長閑に優なる也
 八 よき人也
 九 此方の優なる
 さまを見せまほ
 しきに見ぬが口
 をしこ也
 一〇 人にもかたら
 ん物にもがな見
 せまほしき也

こぬ、くちをし。男も女も宮仕へ所などに、同じやうなる人もろともに寺へ詣て、物へも行くに、このもしうこぼれ出でて、用意はげしからず、あまり見苦しとも見つべくはあらぬに、さるべき人の馬にても車にても行きあひ、見ずなりぬるいと口をし。わびてはすきくしからん下衆などにも、人にかたりつべからんにてもがなと思ふも、けしからぬなめりかし。

○せちゑ——正月の三節會、十一月豊明の節會など也。

○佛名——前ニ註ス。

○御物いみにあたりたる——御物忌には四方拜などの外は、主上出御なければ也。禁秘抄云、御物忌之時物不出御他殿舎中。諸事於二簾中一有之。或出御廣廂一不固之時例也。凡如四方拜一者雖御物忌一或出御東庭一於二小朝拜一不出御。是匡房卿申。依レ敬ニ神明天道一也。然者如御禊一多出御廣廂一也。同記云元三御物忌如二女官後取等一參籠。他人外宿候ニ殿上。不レ參ニ御前一也。下略。

○みやづかへ所などにおなじやうなる人——宮仕する所などにて位おとらぬ人なり。

○わびては——あまり見せまほしきにうち佗びてはの心也。

○すきくしからんげすなどにも——物ずきなる下種などにも見せまほしきと也。下種に見せんは本意ならねど、さるべき人の見ざりしが口をしきにう

一是より清少の郭公聞きに行きし物語也
 二后宮職也
 三塗籠
 四細流云、二間本尊など安置する所なるべし。猶禁秘抄に委し五例のやうならでめづらしき也
 六五月朔日也、さみだれなるべし
 七昔都に郭公大切なりしにやハ清少に催され也
 九何ぞやらん也
 一〇郭公なくも也
 二郭公にはあらで朝にこそあれさこたふる人も

ち佗びていふ詞也。

八十七

五月の御精進のほど、職におはしますに塗籠のまへ、二間なる所をことにしつらひしたれば、例ざまならぬもをかし。朔日より雨がちにて曇り暮らす。つれづれなるを、郭公の聲尋ねありかばやといふを聞き、我もくんと出でたつ。賀茂の奥に某とかや、七夕のわたる橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし、そのわたりになん、日毎に鳴く」と人のいへば、「それは日ぐらしなり」といふる人もあり。そこへとて五日のあした、宮づかさ車のこといひて、北の陣より、五月雨はとがめなき物ぞとて、さしよせて四人ばかりぞのりて行く。羨しがりて、「いま一つして同じくは」などいへば、「いな」と仰せらるれば、聞きも入れず、情なきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人多く騒ぐ。「何事するぞ」と問へば、「つがひにて眞弓射るなり。しばし御覽しておはしませ」とて車とよめたり。右近の中將みなつき給へるといへど、さる人も見えぬ。六位などの立ちさまよへば、「ゆかしからぬことぞ。はやくすぎよ」とて、行きもて行けば、道も祭の頃思ひ出でられてをかし。

○五月の御さうじのほど——年三として正五九月には精進などする事也。河海云、長齋經云若有二善男女等一修二年三之齋戒一忽脱一諸難等一獲一殊勝福利一又曰天帝

有りしと也
 三后宮職の太夫以下車を仰せ付くる也
 三大内裏の朔平門也
 四女房の乗車五月雨にはさかめなしと也
 五車今一つして也
 六我らもゆかまほしきと也
 七后宮の御ゆるしなきにや
 八清少のさま也
 九馬場
 一〇車副などのことへし詞也
 二左近にや不審三皆也
 三乙殿屋に中少將着座の事にや
 四中將めきし人もなしと也

以三正月五月九月一巡二向南列一註三記衆生作業一云云。

○ぬりごめの——稱名院云、塗籠は帳臺のやうにしておく所也。文庫などのやうなる體也。神卷にあり。

○にくき名ぞきこえし——かささぎの橋などやさしき名にもあらで聞きにくき名の橋ありしと也。

○北のぢん——拾芥云、縫殿陣朔平門云北陣。

○さみだれはとがめなき物ぞ——よのつねは乗車の法度あれども、五月の雨中にはとがめなしと也。延喜式云、凡乗車出入宮城門一者妃以下大臣嫡妻已上限り宮外一四位已下及内侍者聽レ出入一土門一但不レ得レ至ニ一陣下一云云。この式を見れば北の陣より乗車つねはゆるさざるなるべし。

○むまばといふ所——河海云、左近馬場は一條西洞院、右近馬場一條大宮也。

○てつがひにてま弓いる也——花鳥餘情云、手結は左近の直手結也。五月五日にあたり。又云、てつがひは馬弓の時二人づゝつがひて射る事歟。但未レ考

レ之云云。猶伊勢物語ひをりの註諸抄に委し。袖中抄云、俊頼朝臣法性寺入道殿にて、五月五日の心を詠みけるに「長き根も花の袂にかほる也けふや眞弓のひをりなるらん」。

○右近の中將みなつき給へり——花鳥云、乙殿屋とて左右近の馬場にあり。五

一明順にや、高階成忠の男、后宮定子の御母、高内侍の兄也
 二田舎めきたる也
 三省略したる也
 四實九里、藤にや、其製可尋之五わざとめきたる也
 六家也
 七はかなくそさうなる心也
 八イニらうめきてはしちかなれ也
 九后宮にきかせまゐらせぬ事ご彼のうらやましがりし人々にもきかせぬをおもふ也
 一〇田舎めきし所にしたがひては也

月の騎射の時、中少將着座す云云。
 かういふ所にはあきのぶの朝臣家あり。そこもやがて見んと云ひて、車よせて降りぬ。田舎たち、事そぎて、馬のかた書きたる障子、網代屏風、みくりのすだれなど、ことさらに昔の事をうつし出でたり。屋のさまもはかなだちて、端近くあさはかなれど、をかしきに、げにぞかしがましと思ふばかりに鳴き合ひたるほととぎすの聲を、口をしう御前に聞き召さず、さばかり慕ひつる人々にもなど思ふ。「所につけては、かゝる事をなん見るべき」とて、稻といふもの多く取り出でて、若き女どものきたなげならぬ、其わたりの家のむすめ女など率て来て、五六人してこかせ、見も知らぬ繰るべきもの二人してひかせて、歌うたはせなどするを、めづらしくて笑ふに郭公の歌よまんなどしつる忘れぬべし。唐繪にあるやうなる懸盤などして、物食はせたるを、見入るゝ人なければ、家あるじ、「いとわろく鄙びたり、かゝる所にきぬる人は、ようせずは、あるもなど責めいたしてこそまゐるべけれ。むげにかくては其人ならず」などいひて、とりはやし、「此下蔵は手づから摘みつるなどいへば、いかで、女官などのやうにつき並みてはあらん」などいへば、取り下して「例の這臥にならばせ給へる御前達なれば」とて、とりおろしまかなひ騒ぐほどに「雨ふりぬべし」といへば、急ぎて車に乗るに「さてこの歌はこゝにてこそよまめ」といへば、「さばれみちにても」などいひて、卯花いみじく咲きたるを折りつゝ、車の簾

二將の字也、誘引する也
 三綿糸なご繰引かせて見するなるべし
 四誰くはざる也
 五あきのぶの詞也
 六あしくしては也、若は也
 七イなを最可然か
 八無下にかやうにおくしては也
 九人とは見えぬ心也
 一〇清少の詞也
 一一着並也
 一二蔵を取りおろしまかなふさま也
 一三這臥也、身を自由によりならふ心也
 一四車ぞひなごのおごろかす詞也
 一五前に備しし郭公のうた也

そばなどに長き枝を背きさしたれば、たゞ卯の花がさねを、こゝにかけたるやうにぞ見えける。供なるをのこどももいみじう笑ひつゝ、網代をさへ突きうがちつゝ、こまだし／＼と挿し集むなり。「人も逢はん」と思ふに、更にあやしき法師、あやしみのいふかひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いと口をし。
 〇馬のかたかきたるさうし——禁中の下侍、臺盤所などに馬形の障子あり。禁秘抄に馬形號二波瀾馬一也とある是也。かやうの事をなぞらへたる障子なるべし。
 〇あじろ屏風——椎本巻に、山里びたるあじろ屏風と有り。河海云、普通の網代にて張りたる屏風也。昔は山莊などの古めかしき調度には定る事也。漆骨片面を張りて、細組にて閉合せたる物也。選屏風といふ也。
 〇はしちかくあさはかなれど——端近く浅くはかなき住居なるべし。イ本ニらうめきてはしちかなれどとは廊などのやうにて、奥ふかからねど面白き家居と也。
 〇いねといふ物——清少などへ馳走に去年の稻取出しこかせて見する也。源氏の須磨の巻に、三月ばかりに、馬に稻を飼ひし事あり。古は秋の稻を其まゝ置きしとみゆ。
 〇からゑにあるやうなる——唐繪などに書きたるごとくうるはしき懸盤なるべし。

○此所にてよみてこそ規模ならめ也
 ○五かたはら也
 ○三草指也
 ○毛車の網代なり
 ○元此うの花車を
 見せたき心也
 ○三心もなけなる者ども也、藏人には行き逢はざる也
 ○三行きあふ心也

一職の御曹司近く也
 ○此けふのありさまを人にしられずしてはやまじ也
 ○恒徳公の家也
 ○清少の詞也、

○ひなびたり——田舎ものめきたる心也。憶してくはざるをいさむる詞也。
 ○あるもなどせめ出して——ある物を何にても出せとせめ出でてこそくひ給はめと也。イナをもとは猶も出せと也。可然か。
 ○とりはやし——とりもてはやす也。馳走するさまなるべし。
 ○つきなみではあらん——着竝也。女官などの臺盤につきならびてくふやうにはいかでかあらんと也。行儀うるはしくはえくふまじきと也。恥ぢたる心にや。
 ○さばれみちにても——さもあらばあれ、歸る道すがらもよむべしと也。
 ○うのはながさね——卯花重。おもて白くうら青き夏の衣也。
 ○こゝまだし〜とさしあつむ——こゝにまだ挿したらず〜と卯花をひしとさしたる也。
 ○たまさかに見ゆるいと口をし——前にさるべき人の馬にてもくるまにても行きあひ見ずなりぬるいとくちをしと、此段の題の下にていひし首尾なるべし。
 近う來ぬれば、さりともいとかうてやまんやは、此車のさまをだに人に語らせてこそやまめとて、一條殿のもとにとどめて、「侍從殿やおはします。郭公の聲聞きて、今なんかへり侍る」といはせたる。使、「只今まゐる。あが君〜」となんの給へる。さぶらひにまひろげて、指貫奉りつ〜といふに、待つべきにもあらずとて、走らせて土御門さまへやらするに、いつのまにか装束しつらん。帯は道のまゝに結び

五公信也
 六清少の使が侍從のの返事を云ふ也
 七我君〜、まぢ給へまの心也
 八殿上なごたるべし
 九問擴
 ○侍從のの指貫をきせ申す也
 二侍從殿の事也
 三屢也、急々に追ひ來る也
 三供也
 四雜色
 五清少の車を也
 六侍從のの也
 七卯花さしたるゆゑ也
 八侍從の詞也、物くるほしきさまの心也
 九侍從の供の人々也
 〇侍從のこひ給ふ也、うたは

て「しば〜」と追ひ來る。供に、侍、雜色、物はかて走るめる。とくやれどいとどいそがしくて、土御門にきつきぬるにぞ、喘ぎ惑ひておはして、まづ此車のさまをいみじく笑ひ給ふ。「うつゝの人の乗りたるとなんさらに見えぬ。猶おりて見よ」など笑ひ給へば、供なりつる人どもも興じ笑ふ。「歌はいかにか。それ聞かん」との給へば「今御前に御覽せさせてこそは」などいふ程に、雨まことに降りぬ。「なごか、こと御門のやうにあらで、此土御門しも、うへもなく造りそめけん、今日こそいとにくけれ」などいひて「いかで歸らんずらん。こなたさまは、たゞ後れじと思ひつるに、人目も知らず走られつるを、あういかんこそいとすさまじけれ」との給へば「いざ給へかし。内へ」などいふ。「それも烏帽子にてはいかでか。」「取りにやり給へ」などいふにまめやかに降れば、笠なきをのこども、只ひきに引きいれつ。一條よりかさをもてきたるをさゝせて、うち見返りうち見返り、此度はゆる〜と物うげにて、卯花ばかりを取りおはするもをかし。

○此車のさまをだに人に——歌よみて人に語り傳へさせむと思ひしに、よまざれば、此車の卯花の風流をだにと也。前に人にかたりつべからんにてもがなと思ふも、けしからぬなめりといひし首尾なるべし。
 ○一條院のもと——拾芥云、一條院、一條南大宮、東二町、爲法住寺、大臣爲光家。この爲光を恒徳公と云ふ。

かよみ給へる
 ぞと也
 三清少のこたへ
 也
 三侍従の詞也
 三助字也
 三是も侍従の詞
 三清少の詞、い
 三おはせよかし
 三六参内あれと也
 三侍従の詞也
 三六句
 三清少の詞也、
 冠袍なごりに
 也
 三まこに雨い
 たくふる也
 三侍従の家より
 也
 三侍従のさま也
 三清少に別れが
 たけなるさま也

○侍従殿——勘物云、公信恒徳公六男、母謙徳公女、長徳元年九月十九日侍従。
 ○つちみかどさまへ——土御門の方へ也。正親町の南。鷹司の北にて、東西の
 小路也。四位以下内侍など乗車して出入する門也。延喜式前ニ注ス。
 ○あへぎまどひて——喘息迷也。いきもつぎあへず急ぎ來給ふ也。
 ○猶おりて見よ——我かく笑ふゆゑを、清少も下りて見よと也。
 ○いまおまへに御覽せさせて——清少の歌はよまざりし事をかくしあざむきて
 いへる也。先いま后宮に見せ申してこそ、侍従殿にも見すべけれと也。
 ○こと御門のやうにあらで——他の御門には屋根有るに、此土御門にしも屋根
 もなく作りけんと也。けふ雨宿りすべきやうもなくてにくきとなるべし。
 ○こなたざまはた、おくれじ——こゝへ追ひ來るは、追ひつかんと思ふばかり
 にて、人目も思はず走りきたると也。
 ○あういかんこそいとすさまじけれ——あうは噫と嘆じたる詞也。すごくと
 歸りいなむこそ無興ならめと也。
 ○ゑぼうしにてはいかゞ——侍臣の参内は、衣冠か、儀式の折は東帯なるべし。
 今侍従どのは直衣烏帽子なり、下は指貫也。
 ○かさなきをのこどもは——清少の供なる笠もたぬ男ども、雨をいとひて車を
 急ぎて土御門を引きいれし也。

一后宮の御前へ
 清少のかへりま
 ゐりし也
 二怨也
 三歌は何とした
 ると后宮の間ひ
 給ふ也
 四后宮の御詞也
 五殿上人なごも
 きかんにおもし
 ろき歌なくては
 無興と也
 六清少の心也
 七歌の談合也、
 かの諸共にゆき
 し人々なるべ
 し
 ハおもてしらく
 うら青き紙に
 や、又卵の花を
 ゑがきし也
 九侍従歌
 二使の返歌をま
 たんこ也
 二后宮の御詞な
 り
 三清少の詞也、
 是も賀茂へ行き

さて参りたれば、有様など問はせ給ふ。恨みつる人々怨じ心うがりながら、藤侍従、
 一條の大路走りつるほど語るにぞ、皆笑ひぬる。「さていづら、歌は」と問はせ給ふ。
 かうくと啓すれば、「口惜しの事や。うへ人などの聞かんに、いかでかをかしきな
 くてあらん。其聞きつらん所にてふとこそ詠まましか。あまり儀式事さめつらんぞ
 あやしきや。こゝにても詠め。いふかひなし」などの給はすれば、げにと思ふに、い
 とわびしきを、いひ合はせなどする程に、藤侍従の、ありつる卵の花につけて、卵
 花の薄様に、
 「ほととぎす鳴く音たづねに君行くと聞かばこゝろをそへもしてまし」
 返し待つらんなど、局へ硯取りにやれば「只これしてとくいへ」とて御硯の蓋に、
 紙など入れて賜はせられたれば、「宰相の君書き給へ」といふを、「なほそこに」などいふ
 ほどに、掻きくらし雨降りて、かみもおどろくしう鳴りたれば、物も覺えず、た
 いおろしにおろす。職の御曹司は、しとみをぞ御格子にまゐり渡し惑ひしほどに、
 歌の返事も忘れぬ。いと久しく鳴りて、少し止む程は暗くなりぬ。唯今なほ其御
 返事奉らんとて、取りかゝるほどに、人々上達部などかみの事申しにまゐり給ひつれ
 ば、西表に出て、物など聞ゆるほどにまぎれぬ。人はた、さして得たらん人こそ
 知らめとて止みぬ。大方此事に宿世なき日なり、どうじて「今はいかでさなんいき
 たりしとだに人に聞かせじ」などぞ笑ふを、「今もなど、それいきたりし人どもの云
 三

し人なれば也
 三宰相こそは也
 一四驚々しく也、
 おそろしき也
 一五御格子をおろ
 すなるべし
 一六神鳴のやむこ
 也
 一七清少も人々あ
 へしらふ也
 一八返事のこそ也
 一九將也
 二〇歌に縁なき日
 也、賀茂にて
 もよまざれば也
 二一后宮の御心な
 るべし
 二二歌よむまじこ
 思ふにこそ也
 二三后宮の無興に
 思し召す也
 二四清少の詞也
 二五時過ぎたる心
 也、當座にこそ
 よまはよみてめ
 ここの心也
 二六后宮御詞也、
 さやうに時過す

はざらん。されどもさせじと思ふにこそあらめ」と物しげに思召したるもいとをか
 し。「されど今はすさまじくなりにて侍るなり」と申す。「すさまじかるべき事かは」
 などの給はせしかば、やみにき。

- うらみつる人々——前にいま一つしておなじくはなどうらやみたる女房達也。
- えじこゝろうがりがりながら——清少の引具しゆかざりしを怨じながら也。
- かうく〜とけいすれば——かやうく〜の首尾にて歌はよみ侍らずと申しあぐ
 る也。
- 其き〜つらん所にてふとこそ——歌よまば當座こそよかるべけれと也。其郭
 公き〜たる所にてこそよむべけれと也。
- あまりぎしき事さめつらん——儀式也。あまり儀式めきてよまんとするによ
 りて歌のおそれれば興さめつらんと也。
- ありつるうの花に——前に卯花ばかりをとりおはするとありし首尾也。
- ほととぎすなくね歌——清少の郭公尋ねゆくとく聞きたらば、我心をそへ
 事つけてやるべき物をと也。
- 宰相のきみ——后宮の女房也。おくに北野の三位のむすめとあり。輔正卿の
 女にや。
- そこに——足下なり。猶清少に返し書き給へとなり。

べき事ならじこ
 也

一賀茂へゆきし
 事也
 二賀茂の家ある
 じの云ひたる事
 也
 三后宮の御詞也
 四后宮

- しとみをぞみかうしにまゐりわたし——格子のうへにしとみをおろしたる也
 和名云、節、周禮注云、節、音部字亦作節、覆、暖障、光者也。
- 神の事申しにまゐり——雷の御見まひに参り給へると也。
- 人はた、さしてえたらん人こそしらめとて——清少ならぬ人は又、其歌を得
 たる清少などこそ返歌のことはしるべけれ。こなたはしらずとて返歌もせざり
 し也。
- どうじて——動也。動轉しての心也。
- いまはいかでさなんいきたりしとだに人にきかせじ——今はさやうに郭公き
 きにゆきしといふ事をだに沙汰せじと也
- などそれいきたりし人どものいはざらん——今とてもいかでか賀茂へ行きし
 人々の歌よまであらん。詠むべき事と也。
- すさまじかるべき事かは——かやうに時過すべき事かは、當座によまで無念
 の由をの給へば、いまおくれよむべきにもあらでやみたと也。
- 二日ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相の君「いかぞ、手づから
 折りたるといひし下敷は。」との給ふを聞かせ給うて、「おもひ出づることのさまよ」
 と笑はせ給ひて、紙の散りたるに、
 下敷こそ戀しかりけれ

五上句を申せし也
 六清少納言
 七后宮の御詞也
 八是ほご郭公を思ひすてし事よ
 九清少の詞也
 一〇其座には侍らじとおもふ也
 一一此人の歌こそよけれ也
 一二末々さはいへご元輔が女なれば也
 一三としてひいでたる事もなくて也、清少の卑下也
 一四最初也、人よりさきにさし出でたる心也
 一五元輔のためおもてぶせ也
 一六后宮也
 一七后宮の御ことば也、さやうならは、心次第也

と書かせ給ひて、「本いへ」と仰らるゝもをかし。

郭公尋ねて聞きし聲よりも

と書きてまゐらせられたれば、「いみじううけたりや。かうまでだにいかで郭公のこ
 とをかけつらん」と笑はせ給ふも恥しながら、「何か。この歌すべてよみ侍らじと
 なん思ひ侍る物を。物の折など人のよみ侍るにも、『詠め』など仰せらるれば、得さ
 ぶらふまじき心地なんし侍る。いかでかは、文字の數知らず、春は冬の歌を詠み、
 秋は春のを詠み、梅の折は菊などを詠む事は侍らん。されど歌よむといはれ侍りし
 未々はすこし人にまさりて、『其折の歌はこれこそありけれ。さはいへど、それが子
 なれば』などいはれたらんこそ、かひある心地し侍らめ。露取り分きたる方もなく
 て、さすがに歌がましく我はと思へるさまに、最初に詠み出て侍らんなん、なき
 人のためいとほしく侍る」などまめやかに啓すれば、笑はせ給ひて、「さらば、たゞ
 心にまかす。我はよめともいはじ」との給はすれば、「いと心やすく成り侍りぬ。今
 は歌の事思ひかけ侍らじ」などいひてある比、

○おもひ出づることのさまよ——郭公歌などの事はおもひも出でずして、只く
 ひとりし物を思ひ出でしよと也。

○したわらびこそ——清少や宰相などの心ををしはかりて后宮の御たはぶれ也
 ○うけぱりたりや——孟津抄に諾、承諾。はゞかる事もなきをいふ也云云。清

歌よみそ也
 一六清少の詞也

一庚申也
 二伊周公康申の御用意也
 三女房達歌よまんけしきに色めく也
 四清少也
 五清少のうたよまんともせぬ也

少のあまりはゞかりなく歳をしたふ事をたはぶれての給ふ也。
 ○かけつらん——いひつらんといふとおなじ詞也。大和物語に「見きとないひ
 そ人のきくに」とある歌を、源氏帚木卷には、見きとなかけそとかけり、同じ心
 なればなるべし。
 ○わらはせ給ふもはづかしながら何か——イ本もはづかしながら何かといふ詞
 なくて、わらはせ給ふ此うたすべてと有り。
 ○いかでもじのかずしらず——卅一字のかずもしらず、時節たがふ事もしらぬ
 やうに一向に此道しらぬにはあらねどもとの心也。
 ○うたよむといはれしすゑ——清少は彼深養父が曾孫元輔がむすめなれば
 也。

○なき人のためいとほしく——元輔さしもの歌仙なりしに、其むすめとして、
 ことなる事なくは父のおもてぶせなれば也。

康申させ給ひて、内大臣殿いみじう心まうけさせ給へり。夜うち更くるほど
 に、題出して、女房に歌よませ給へば、みなけしきだちゆるがし出すに、宮の御前
 に近く候ひて、物啓しなど、こと事をのみいふを、大臣御覽じて、「などか歌は詠ま
 ず離れるたる。題とれ」との給ふを、「さる事承りて、歌よむまじく成り侍れば、
 思ひかけ侍らず。」とことやうなる事、まことにさる事やは侍る。などかは許させ給

六内大臣伊周也
七詞也
八清少の詞也
九伊周公の詞也、格別なる事也
一〇實に御ゆるしにやと后宮へ問ひ給ふ詞也
一一是より清少に伊周の詞也
一二清少のありさま也
一三后宮より清少に御文也
一四后宮の御うた
一五伊周公の間ひ給ふ也
一六清少御返し也
一七つゝしむ心也、元輔の名をしむ心なるべし
一八よみ出しまるり來ん也
一九后宮へ申上ぐる也

ふ。いとあるまじき事也。」よしこと時は知らず、今宵は詠めなど責めさせ給へど、けぎよう聞きも入れてさぶらふに、こと人ども詠み出して、よしあしなど定めらるゝほどに、いさゝかなる御文を書きて賜はせたり。あけて見れば、
元輔が後といはるゝ君しもや今宵の歌に外れては居る
とあるを見るに、をかしき事ぞ類なきや。いみじく笑へば「何事ぞく」と大臣も
の給ふ。

「その人の後といはれぬ身なりせば、今宵の歌はまづぞよままし
つゝむ事さふらはずは、千歌なりとも、是よりぞ出でまうて來まし」と啓しつ。
○かうしんせさせ給ひて——庚申を守る事也。庚申の夜ねれば三尸とて悪しき
蟲、人の身中に入りて、癆瘵の病をなす也。其故に今宵ねざる事、古今醫統に
もあり。拾芥云、庚申夜誦、彭侯子彭常子命兒子、悉入幽冥之中、去離我身。
袋双紙云、庚申せで寢ル誦文「しや蟲はいねや去りねや我床をねたれどねぬぞ
ねゝどねたるぞ」
○さる事うけ給はりて——前に后宮のさらば心にまかす。我はよめともいはじ
とのたまひし事也。さやうの御詞承りてと也。
○けぎようきゝもいれで——氣清也。いさゝかもらうたよむべきけしきなく、潔
白にとりあはざりし也。

○もとすけがのちと——清少は元輔がむすめとして今夜うたよまであるはいか
いとの心也。
○その人の後と——前に、なき人のためいとほしく侍るなどいへる所の心なり。
○是よりぞ出でまうてこまし——つゝしむ事なくばよめとの仰せなくとも此方
よりさし出でて千首も讀み侍らんと也。

八十八

御かたぐ、君達、うへ人など、御前に人多くさぶらへば、廂の柱に寄りかゝり
て、女房と物語してゐたるに、物を投げ給はせたる。あけて見れば「思ふべしやい
なや。第一ならずはいかゞ」と問はせ給へり。御前にて物語などするついでにも、
「すべて人には、一に思はれずは、更に何にかせん。只いみじう憎まれあしうせら
れてあらん。二三にては死ぬともあらじ。一にてをあらん、などいへば、「一乗の法
なり」と人々笑ふ事のすぢなめり。筆、紙給はりたれば、「九品蓮臺の中には下品と
いふとも」と書きて參らせたれば「むげに思ひ屈じにけり。いとわろし。いひ初め
つる事は、さてこそあらめ」との給はすれば、「人に従ひてこそ」と申す。「それがわ
ろきぞかし。第一の人に、又一に思はれんとこそ思はめ」と仰せらるゝもいとをか
し。

一これより后宮
の御前にて有り
し事共のものが
たり也
二清少也
三后宮の清少に
也
四第一也
五是より第一な
らずはさきはせ
給ふ心を註釋す
る詞也
六清少日比いひ
し詞也
七第一の人に
あらん也
八紙也、清少に

答させんこ也
 九名譽のこたへ也
 二后宮の御詞
 二屈也、あまりおもひくづをれたる事也
 三清少詞
 三后宮の御詞也
 四猶心は高くこそもつべけれ也

○御かたぐ君達——后宮の御妹の御かたぐ、伊周公等の君達なるべし。イ本しきにおはします比八月十四日の月あかき夜などいふ事此段の上に有り。然れども語かさなりてよろしからねば今不_レ用也。

○思ふべしやいなや——后宮よりなげて給へりし物に書き給へる詞也。清少我を思はんやとの戯也。

○だいならずはいかゞ——第一の人に清少をおもはずは、清少も相おもふまじくやとの心也。

○二三にては——第二第三に思はれては死すともあるまじきと也。

○一乗の法なりと——是方便品の文の心也。一乗の法とは、法華經の事也。最爲第一の經なれば、彼清少の第一に思はれん二三にてはあらじといふにつけて、人々なぞらへいひし事の筋を、今后宮の第一ならずは如何と仰せらるゝ也。法華經方便品云、十方佛土中唯有二一乘法無_レ二亦無_レ三除_レ佛方便說_レ但說_レ無上道。

○九品蓮臺の中には——朗詠の詞也。后宮の御恵みにかゝらば、たとひ下品にても満足と也。極樂寺建立願文慶保胤「十方佛土之中以_レ西方_レ爲_レ望、九品蓮臺之間雖_レ下品一應_レ足。極樂に生まるゝに、其人々によりて、上品上生に生まれ、或は上品中生上品下生、或は中品上生などすべて九品の淨土ある事、觀無

量壽經に委し。

○いひそめつる事はさてこそ——始め第一に思はれんといふほどならば、後まで其心をたがへずこそあるべけれと也。下品といふともといへるをとがめ給ふ御たはぶれ也。

○人にしたがひてこそ——なみ／＼の人にこそ第一に思はれんとも申さめ。其人によりて下品にても満足と也。后宮のいと忝きをいはんとて也。

八十九

中納言殿まるらせ給ひて、御扇奉らせ給ふに、「隆家こそいみじき骨を得て侍れ。それを張らせて參らせんとするを、おぼろげの紙は張るまじければ、もとめ侍る也」と申し給ふ。「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、「すべていみじく侍る。更にまだ見ぬ骨のさま也となん人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」と言高く申し給へば、「さて扇のにはあらで海月のなり」と聞ゆれば、「これは隆家が言にしてん」とて笑ひ給ふ。かやうの事こそ、傍いたき物のうちに入れつべけれど、人ごと「な落しそ」と侍れば、いかゞはせん。

○くらげのなり——増賀上人の歌「みつわさす八十餘りの老の波海月のほねにあひにけるかな」

一是より別の事也、隆家の事也
 二隆家のみづから給ふ詞也
 三扇の骨也
 四大かたの心也
 五かくよき骨に大かたの紙は張るまじければ然るべき紙を尋ぬる也
 六后宮の御詞也
 七隆家の詞也、見事なるほね也
 八かほごのほねはなし也
 九言高く也、高上の心也
 一〇清少の詞也
 一一海月の骨はまねなる心也
 一二隆家の詞也、此清少の戲言の面白きをうらや

める詞也
三自賛めきし事
なれは也
四毎也
五書落しそ也

一是亦別の秀句
のものがたり也
二中宮へ勅使に
まゐりし也、藏
人なれは也
三いつも勅使に
て褥を出さるれ
は也
四信經憚りて褥
にるざる也
五清少の詞
六料也、信經を
おかんための褥
なるを誰がため
ぞも也
七是より信經が
詞也
八しとねよこれ
ん也
九清少の秀句を
いへる詞也
一〇句
二信經が詞也

○かたはらいたき物の内に——自賛めきたる事いふは此双紙のかたはら痛き物
の中に入りて、こゝには書くまじけれど、人毎にな書落しそといへばせんかた
なくて書きしと也。

九十

雨のうちにはへ降るころ、今日も降るに、御使にて、式部の丞信經参りたり。例の褥
さし出したるを、常よりも遠く押しやりて居たれば、「あれは誰が料ぞ」といへば、
笑ひて、「かゝる雨にのぼり侍らば、足かたつきて、いとふびんにきたなげになり
侍りなん」といへば「など。せんぞく料にこそはならぬ」といふを、「これは御前に
かしこうおほせらるゝにはあらず。信經が足かたの事を申さざらましかば、えの給
はざらまし」とて、返々いひしこそをかしかりしか。あまりなる御身讀めかなと傍
いたく。

○式部のせうのぶつね——藤原信經は中納言兼輔の曾孫、雅正の孫、陸奥守爲
長の子也。勘物云、信經長徳元年正月十一日藏人、三年正月式部丞云云。
○せんぞくれう——氈褥料にや。順和名云、褥氈褥也。今案毛席也。俗猫の皮
にて作ると云云中略記。
せんしよくを、せんぞくといひて、足のよごれし事をいふに付けて、洗足料に

こそならめと秀句に云ふ也。

○かたはらいたく——かたはら痛く人のいひしと含めし詞也。

九十一

はやうおほきさいの宮に、ゑぬたきといひて名高き下仕なんありける。美濃守にて
失せにける藤原の時柄、藏人なりける時、下仕どもある所に立ち寄りて、「これや此
高名のゑぬたき。などさも見えぬ」といひける。返事に、「それはときからも、さも
見ゆる名也」といひたりけるなん、敵にえりても、いかでかさる事はあらん。殿上
人、上達部までも興ある事にの給ひける。又、「さりけるなめりと今までかくいひ傳
ふるは」と聞えたり。「それ又、時がらがいはせたるなり。すべて題出しがらなん、
ふみも歌もかしこき」といへば、「げにさる事ある事なり。さらば題出さん。歌よ
み給へ」といふに、「いとよき事、一つはなにせん、おなじうは數多を仕ふまつらん」
などいふ程に、御題は出でぬれば、「あな恐し。まかり出でぬ」とて立ちぬ。「手もい
みじう、眞名も假名もあしう書くを、人も笑ひなどすれば、かくしてなんある」と
いふもをかし。

○おほきさいのみや——勘物云、皇后宮安子康保元年四月廿四日崩卅八云云。村
上の后、九條右大臣師輔の女。皇太后宮は贈官也。

三清少をさして
いふ也、清少に
も信經がいはせ
し事ぞも也
三前段も自讃の
事此段もおなじ
く自讃なれは也
四例の書きのこ
したる筆法也
一是亦別段也、
はやうは昔とい
ふにおなし
二時柄が詞也、
是彼の音にきこ
えしゑぬたきか
も也
三名は珍しくて
形はさも見えぬ
さの心也
四ゑぬたきが詞
也
五めづらしく見
ゆるも也
六敵也、相手也
七撰也
八是より清少の
時がらに此事を
いふ詞也

九時柄が詞也、
 えぬたきが答も
 又時がらがいは
 せしこ也
 一〇詩なり
 二よき事也
 三清少の詞也、
 題がらの理有る
 こと也
 三時柄が詞也
 四一首にてはお
 かじこ也
 五后宮などの御
 出題にや
 六時がらがやがて
 にけたる也
 七是より時がら
 がにけたること
 はりをいふ也
 八かやうにまか
 りにけてあるこ
 時がらがいひし
 也

春曙抄五終

○美濃守にてうせにける藤原のときがら——勘物云、時柄康保五年正月廿八日
 美濃守。長保二年五月三日藏人兵部丞、被^{ラレ}補^フ二^{ツク}作物所別當^ニ。
 ○かたきにえりても——態^{ワザ}と相^{アヒテ}手に撰^ヒ出^デても、いかでさやうに珍名出で合
 ふべきぞと也。蒙^リ求^メに陸^リ機^キ、荀^{クニ}隱^ンに出^デ合^ヒて、雲^{クモ}間^マ陸^リ士^シ龍^リと名のりしに、荀
 隱、日下^{ヒタ}荀^{クニ}鳴^ネ鶴^カと名のりしに似たり。
 ○又さりけるな^ンめりと今迄^{イマ}かくいひ傳^ツふるはと——今迄もかく世に云^ヒ傳^フ
 るは、此^{コノ}兩人^ニの珍^メ名^ノ問^ト答^ヲ、實^{マカ}にさやうに有^リけるなるべしと也。
 ○それ又時がらが——此^{コノ}えぬたきが答へも、前^マ段^ノの清^シ少^ノの秀^ウ句^ヲを、のぶつねが
 いはせしといひしごとく、是^{コノ}も亦^モ時^ノがらがいはせしといふ也。
 ○ふみも歌もかしこきと——詩^シ歌^ノのよきも題^チ次^ジ第^ニなるがごとく、えぬたきが答
 へも時^ノがらが詞^ノによりてぞと利^リ口^クするさま也。
 ○げにさる事ある事也——是^{コノ}は時^ノがら歌^ヲえよまぬ人^ナれば、題^チ出^シて歌^ヲよめと
 て物^{モノ}うがらせんとていへる詞^ノ也。
 ○手^テもいみじう——手^ノ跡^ノいたく悪^クしき事^ト也。

枕草子春曙抄 卷六

九十二

作物^{ツクモノ}所の別^ワ當^トする比^ヒ、誰^{タレ}がもとにやりけるにかあらん、物^{モノ}の繪^エ様^{ヤウ}やるとして「これが
 やうに仕^シるべし」と書^カきたる眞^{マコト}名^ノのやう、文^{モン}字^ジの世^セに知^シらずあやしきを見^ミつけて、
 それ^カが傍^{カタハラ}に「これがまゝにつかうまつらば、異^{イコト}やうにこそあるべけれ」とて、殿^{テン}上^ノ
 にやりたれば、人^{ヒト}々^々取^トりて見^ミて、いみじう笑^{ウラ}ひけるに、大^{オホ}腹^{ハラ}立^タちてこそ怨^{ウラ}みしか。
 ○つくも所——作物^{ツクモノ}所^ノ、細^{ホソ}流^リ云^フ、金^{カネ}銀^{ギン}細^{ホソ}工^クの所^ノなるべし。拾^シ芥^{カイ}云^フ、作物^{ツクモノ}所^ノ在^ニ進^シ
 物^{モノ}所^ノ西^ニ有^リ二^ニ別^ワ當^ト預^ヨ熟^{ジュク}食^{シキ}。時^{トキ}がら此^{コノ}の別^ワ當^トに補^ホせられし比^ヒの事^ト也。勘^{カン}物^{モノ}前^ノニ注^ツス。
 ○物^{モノ}のゑやうやるとして——細^{ホソ}工^ク人^ノのかたへ時^{トキ}柄^ヘ繪^エやうなどして仰^{オホ}せ付^ツくる
 也。
 ○これがまゝにつかふまつらば——如此^{コノ}見^ミ苦^クしき手^テ跡^ノのまゝに細^{ホソ}工^クせば、異^イ風^{フウ}
 に悪^クしからんと也。時^{トキ}柄^ヘが手^テ跡^ノをわらはんとていへる也。

九十三

一是より時がら
 が手^テもいみじう
 あしくかく事^{コト}の
 物^{モノ}がたり也
 二此^{コノ}繪^エのまやう
 のごこくせよこ
 也
 三眞^{マコト}名^ノの様^{ヤウ}也
 四文^{モン}字^ジ也
 五あしき事^{コト}也
 六清^シ少^ノの見^ミ付^ツけ
 て也
 七こきながら眞^{マコト}
 名^ノの傍^{カタハラ}に也
 八清^シ少^ノの書^カきし
 詞^ノ也
 九時^{トキ}柄^ヘ大^{オホ}いに腹^{ハラ}
 立^タちて清^シ少^ノをう
 らみし也

- 一これより別段
- 二三條院の御事也
- 三いかなる事に
- かこの心也
- 四定子の御事也
- 五后宮へしけい
- さのおはさんこ
- 也
- 六しけいさのお
- はしたり
- 七いくほごの間
- もなく也
- 八十一日也
- 九隔子あけわた
- す也
- 一〇職御曹司也
- 二あつたゝみな
- るべし
- 三餘衆の比なれ
- は也
- 三三まるらせし也

淑景舎東宮に参り給ふ程の事など、いかゞはめてたからぬことなし。正月十日に参り給ひて、宮の御方に、御文などはしげう通へど、御對面などはなきを、二月十日宮の御方に渡り給ふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつろひ、女房なども皆用意したり。夜中ばかりに渡らせ給ひしかば、いくばくもなく明けぬ。登華殿の東の二間に御しつらひはしたり。つとめて、いととく御格子参り渡して、殿、うへ、一つ御車にて参り給ひにけり。宮は御曹司の南に、四尺の屏風西東にへだてて、北西に立てて、御疊、褥、うち置きて、御火桶ばかり参りたり。御屏風の南、御帳の前に、女房いと多くさぶらふ。

○しげいしや東宮に——中關道隆公の御むすめ、三條院の春宮にておはせしころまゐり給ひて、淑景舎におはする事也。榮花物語見はてぬ夢の卷に「かくて攝政殿をば帝おとなびさせ給ひぬれば、關白殿と聞えさす。中姫君十四五ばかりにならせ給ひぬ。東宮にまゐらせ奉り給ふありさま花々とめてたし。さてまゐらせ給ひぬれば、宣耀殿はまかで給ひぬ。淑景舎にぞすませ給ふ。何事もかゞやくやうなれば、いはむかたなくめでたし云云。是正曆三年の事也。

○とうくわでん——后宮の淑景舎に御對面の御しつらひの御殿なり。和名云、登花殿は弘徽殿の北にあり。

○殿うへひとつ車にて——殿は中關白道隆公也。うへは中關白殿の北方高内侍

- 一后宮の御髪な
- ごつくろふ事也
- 二后宮の清少に
- 問ひ給ふ也
- 三清少の詞也
- 四句
- 五しけいさのう
- しろはかり見し
- と也
- 六后宮の御詞也
- 七清少の心也
- 八いつか淑景舎
- を見奉らんこ也
- 九后宮の御裝束
- 也
- 一〇固紋
- 一一三重也
- 一二后宮の御ぞの
- 色たてをの給ふ
- 也
- 一三濃紅のきぬ
- 也、紅梅のかさ
- ねにはこききぬ
- よしと也
- 一四句
- 一五御裝束の色た

也。貴子と號す。儀同三司母といふ是也。后宮淑景舎などの御親也。こなたにて御髪など参るほど、「淑景舎は見奉りしや」と問はせ給へば、「まだいかでか。積善寺、供養の日、御うしろをわづかに」と聞ゆれば、「其柱と屏風とのもとによりて、我うしろより見よ。いと美しき君ぞ」との給はすれば、うれしくゆかしさまさりて、いっしかと思ふ。紅梅の固紋、浮紋の御衣どもに、紅のうちたる御衣、三重が上に、只引き重ねて奉りたるに、紅梅には濃ききぬこそをかしけれ。今は紅梅は着てもありぬべし。されど、萌黄などのにくければ、紅にはあはぬなり」との給はすれど、只いとめてたく見えさせ給ふ。奉りたる御衣にやがて御かたちの匂ひ合はせ給ふぞ、猶ことよき人もかくやおはしますらんとぞゆかしき。さてゐざり出てさせ給ひぬれば、やがて御屏風に添ひつきて覗くを、「悪しかめり。後めたきわざ」と聞えごつ人々もいとをかし。御障子の廣うあきたれば、いとよく見ゆ。上は白き御衣ども、紅の張りたる二つばかり、女房の裳なめり、引きかけて、奥によりて、東面におはすれば、たゞ御衣などぞ見ゆる。淑景舎は北に少しよりて、南むきにおはす。紅梅ども數多濃く薄くて、濃きあやの御衣、少し赤き蘇枋の織物の袷、萌黄の固紋の、若やかなる御衣奉りて、扇をつとさし隠し給へり。いとみじく、げにめでたく美しと見え給ふ。殿は薄色の直衣、萌黄の織物の御指貫、紅の御衣ども。御紐さして、廂の柱に後をあてて、こなたさまに向きておはします。めでた

枕 草 子

てはともあれ后の御形はめでたき也
 云異也、他の美人もかやうにやま也、しはいしやをさしていへるなるべし
 七清少のしはいさをのぞく也
 六あしからん女房達の清少を制する也
 元いひ事する也
 三高内侍也
 二裳也
 三東むきに高内侍の給ふ也
 三御かたはろくに見えぬ也
 二しはいさのいでたち也
 二濃く薄きをかさねて也
 云往也
 三顔をおほひ給ふ也
 三中關白殿也

○き御有様どもを打ち笑みて、例の戲言をせさせ給ふ。淑景舎の繪に書きたるやうに美しげにてみさせ給へるに、宮いと安らかに、いま少しおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣に匂ひ合せ給ひて、猶たくひはいかてか見えさせ給ふ。

○まだいかでか——いまだ見奉り侍らず。いかでか見侍らんと心の心也。

○しやくぜんじくやう——積善寺供養也。榮花物語四見はてぬ夢に云、かくて攝政殿の法興院のうちに別に御堂たてさせ給ひて、積善寺と名付けさせ給ひて、其御堂供養いみじくぞいそがせ給ふ云云。正暦三年の事也。中關白の父兼家公のために建立也。

○こらばいのかたもんうき紋——紅梅は表紅、裏紫、二月の衣也。固紋、浮紋いづれも胡曹抄にあり。或説に固紋は錦のやうに織付けし紋也。浮紋は唐織のごとしといへり。

○今は紅梅はきでも——紅梅は十一月より二月迄着用の衣也。もはや珍しからねば着ずしてもあらんと也。是二月十一日の比なれば也。

○もえぎなどのにくければ句——紅梅は珍しからねど、萌黄などは、みにくければ、紅梅をめすとふくめたる詞也。されど、紅梅は紅に重ねては似合はずと也。紅梅にはこききぬこそをかしけれといへる首尾也。こききぬは濃紅也。只紅とはうすき色なれば也。

枕 草 子

元薄紫の直衣也
 三句
 三直衣のいれひもをさし給ふ御手すさびなるべし
 三よりかゝりて也
 三奥にもさるがう事をの給ふもあり
 三后宮也
 三おまなしき事也
 三誤いかでかあらん也
 一十一日の朝の御手水を進むる也
 二しはいしやの御手水をもてまゐるさま也
 三登花殿に此方、彼方の女房つゞひたれば也

○さてみざりいでさせ——御ぐしの事。御せうぞくなど事すみて后宮の出で給ふ也。

○女房のもなめり引きかけて——后宮への禮儀に高内侍のかりそめに裳をかけ給へり。さすがに御母なれば、態とはなくて女房の裳なめりといへるおもしろきにや。

○もえぎのかたもんわかやかなる御ぞ奉りて——萌黄の固紋花やかに若きいでたちなるべし。

○げにめでたくうつくしと——前に后宮のうつくしき君なりとのたまひしをうけて、げにと清少の見たる心也。

○こなたにむきて——今清少ののぞく方にむきて、關白殿のおはす也。

○めでたき御ありさまどもをうちゑみて——后宮の淑景舎など御形を、關白殿よろこび見給ふさま也。

○しげいしやのゑにかきたるやうに——うるはしく行儀たゞしきさま也。源氏若紫に葵上のありさまを「只ゑにかきたる物の姫君のやうに」といへる同じ儀なるべし。

御手水まゐる。彼御方は、宣耀殿、貞觀殿を通りて、童二人、下仕四人してもて参るめり。唐庇のこなたの廊にぞ、女房六人ばかりさぶらふ。せばしとてかたへは御

- 四女房のさうぞく也、前註
- 五尻也、すそひく也
- 六童、下仕なごのもて来る手水を女房の取次ぐ也
- 七前にもあり、未考
- 八后宮の御方也
- 九手水番
- 二手水の役の番也
- 二青末濃裳背子
- 三裙帶
- 三領巾、前註
- 四けしやうせしさま也
- 五下仕手水を取次ぎて采女にわたす也
- 六將也
- 七公儀めきし也
- 八唐めきし也、めなれぬ心也

おくりして皆歸りにけり。櫻の汗疹、萌黄、紅梅などいみじく、汗衿長くしり引き、取りつぎ参らす。いどなまめかし。織物の唐衣どもこぼれ出でて、すけまさの馬頭のむすめ少將の君、北野の三位のむすめ宰相の君などぞ近くはある。あなをかしと見るほどに、この御かたの御手水番の采女、青末濃の裳、唐衣、裙帶、領巾などして、おもてなどいと白くて、下仕など取り次ぎて参るほど、これはたおほやけしう、唐めいてをかし。

○せんようでんぢやうぐわ殿——これ淑景舎より登花殿へゆく道つゞきなり。宣耀殿和名云麗景殿の北にあり。貞觀殿和名云常寧殿の北にあり。これを御匠殿といふ云云。淑景舎は昭陽舎の北、麗景殿のうしとらにあれば、其西宣耀殿、其西貞觀殿をとほりて、其西登花殿に至るべし。今の御しつらひ登花殿の東の二間とあり。拾芥抄宮城の圖、順和名等にて勘ふべし。

○からきぬ——和名云、背子、形如三主臂、無腰欄之袷衣也。楊子漢語抄云、背子婦人表衣以錦爲之。
 ○北野の三位——菅原輔正、勘解由長官在躬一男現神、北野殿是也。正曆三年二月十五日叙三位、公卿補任大系圖等に在り。
 ○御手水番のうねめ——百寮訓要抄云、采女と申すは、國々より然る可き美女をえらびて天子へまゐらす也。御陪膳などもゆるさるゝ女房也云云。御手

- 一朝御膳也
- 二女藏人也
- 三役義の心也
- 四清少ののぞきゐしがかくれ所なきをいふ也
- 五清少の入り居たる也
- 六清少の衣也
- 七關白殿清少ののぞくを見付け給ひし也
- 八關白の、詞也
- 九后宮の御詞也
- 二關白の、詞也、清少ののぞくをの給ふ也
- 二句
- 三みにくき心也、ざれての給ふ也
- 三御むすめを自慢し給ふ也
- 四后宮しけいさな御膳まゐる也
- 五關白の、詞也

水の役をもつとむるなるべし。

御膳のをりになりて、みくしあげまゐりて、藏人どもまかなひの髪あげてまゐらするほどに、隔てたりつる屏風も押しあげつれば、掻間見の人、隠篋取られたる心地して、飽かずわびしければ、御簾と几帳との中にて、柱のもとよりぞ見奉る。きぬの裾裳など唐衣は、皆御簾の外に押し出されたれば、殿のはしのかたより御覽じ出して、「誰ぞや。霞の間より見ゆるは」と咎めさせ給ふに、「少納言が物ゆかしがりて侍るならん」と申させ給へば、「あな恥し。彼はふるき得意を。いとにくげなるむすめども持ちたりともこそ見侍れ」などの給ふ。御けしき、いとしたり顔なり。あなたにもおもの参る。「うらやましくかたぐいのは、皆参りぬめり。とく聞し召して翁、女におろしをだに給へ」など、只日一日、さるがう事をし給ふほどに、大納言殿、三位の中將、松君も將て参り給へり。殿いつしかといたきとり給ひて、膝に据ゑ給へる、いと美し。せばき縁に、所せき日の御装束の下襲など引き散らされたり。大納言殿は物々しう清げに、中將殿はらうくじう、いづれもめでたきを見奉るに、殿をばさるものにて、上の御宿世こそめでたけれ。御圓座など聞え給へど、「陣につき侍らん」とて急ぎ立ち給ひぬ。
 ○みくしあげまゐりて——河海云、昔は女御更衣以下常に髪を上ぐる事本義也。也足軒云、内の女房は晴の時髪上とて、釵などして、髪をいたゞきへ上ぐる

三關白どの北の方をざれての給ふ也
 七伊周の子也
 六うきくしき心也
 元日装束は東帯の事也
 三裾也
 三伊周隆家など也
 三上臈しき也
 三申すに及ほぬ心也
 三北の方高内侍の事也
 三宿世也、前世の縁をほむる詞也
 三圓座也
 三着陣あらんこ也

也云云。后宮の御ぐしを女藏人など役するさま也。
 ○かすみのまより——清少のほのかに見ゆるをの給ふ也。古今「やま櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ。詞ばかりを用ゐて也。
 ○かれはふるきとくいを——古得意也。清少はもとよりの得意にてよくし給ひしものをとの心也。
 ○うらやましくかたぐのは——いまだ關白殿北の方などの御膳はまゐらざりしにや。
 ○さるがう事をし給ふ——猿樂言也。狂言のざれごとをの給ふ也。
 ○大納言殿——伊周公也。正曆三年に兄の道頼の中納言にこえて大納言になり給ふと榮花物語に在り。
 ○三位中將——隆家卿也。榮花物語四云、此御腹のあるが中の弟の君は三位中將になしきこえ給うつ云云。是も正曆三年の事也。
 ○松君——伊周公の男左京太夫道雅の童名也、榮花物語四云、小千世君は彼大納言殿重光の姫君いみじううつくしき若きみらみ給へれば、をば北の方貴子攝政殿道隆などいみじき物にもてかしづき給ふ。松君とぞきこゆめる云云。是正曆二年也。
 ○御わらうだなど聞え給へど——伊周隆家など縁に居給へば圓坐をと關白どの

一前に式部丞のぶつね御使にまゐりしは別人にや
 二勅使也
 三御膳をおく所也
 四誰しらす
 五登花殿にや
 六使を賞翫也
 七關白どの
 八北方也
 九后宮也
 二關白殿詞
 二淑景舎のありさま也
 三母上也
 三しけいさ也
 四ちかよりへの祿也
 五ちかより祿を辭し佗びたるさま也
 六二歳ばかり也
 七關白どの、詞也
 八いかでか御産

仰せ給ふ也。
 しばし有りて、式部の丞某とかや、御使に参りたれば、御膳宿の北によりたる間に褥さし出でて据ゑたり。御返は、今日はとく出ださせ給ひつ。また褥も取り入れぬほどに、東宮の御使にちかよりの少將参りたり。御文取り入れて、渡殿は細き縁なれば、こなたの縁に褥さし出でたり。御文取り入れて、殿、上、宮など御覽じわたす。「御返はや」などあれど、とみにも聞え給はぬを、「某が見侍れば、書き給はぬな」めり。さらぬ折は、まもなく是よりぞ聞え給ふなる」など申し給へば、御面は少し赤みながら、少しうちほゝゑみ給へる、いとめでたし。「とく」など、うへも聞え給へば、奥さまに向きて書かせ給ふ。うへ近く寄り給ひて、諸共に書かせ奉り給へば、いとどつゝましげ也。宮の御方より、萌黄の織物の小袷、袴押し出されたれば、三位の中將かづけ給ふ。苦しげに思ひて立ちぬ。松君のをかしう物の給ふを誰もく美しがり聞え給ふ。「宮の御子たちとて引出でたらんにわろくは侍らじかし」などの給はするを、げになどか今までさる事のとぞ心もとなき。
 ○御返はけふはとく——后宮の御返事けふはいつより早く出でたる也。
 ○東宮の御使に——三條院より淑景舎へ御使者也。
 ○わたどの——渡殿廊下也。
 ○御返はやなどあれど、とみにもきこえ給はぬ——關白殿御返事を早くと、し

なきにこの心也

げいさにすゝめ給へども、恥らひて、頓てにも出で給はぬ也。淑景舎はいま十
五歳ばかりにや。

○さらぬ折はまもなくこなたよりぞ——關白どのおはさぬ折は、隙もなく
しげいさよりも御文まゐらせ給ふものと也。是も道隆公のたはぶれ詞也。

○いとゞつゝまし——しげいさのはぢ給へる心なるべし。

○宮の御子たちとてひき出でたらんにわろくは侍らじ——后宮の皇子うませ給
はばとの心也。松君をかやうにもてあそぶやうに、皇子をさし出でたらばと
也。これ正暦三年二月なれば、一品宮敦康親王などもいまだ生まれさせ給はぬ
ほど也。

未の時ばかりに「筵道まるる」といふほどもなく、うちぞよめき入らせ給へば、宮

もこなたによらせ給ひぬ。やがて御帳に入らせ給ひぬれば、女房南表にそよめき出
でぬめり。廊に殿上人いと多かり。殿の御前に宮つかさめして、菓子、肴めさす。

「人々酔はせ」などおほせらる。まことに皆酔ひて、女房と物言ひかはすほど、か
たみにをかしと思ひたり。日の入るほどに起きさせ給ひて、山井の大納言召し入れ
て、御うちぎ參らせ給ひて、歸らせ給ふ。櫻の御直衣に、紅の御衣の夕映なども、
かしこければとゞめつ。山の井の大納言は入りたゝぬ御兄にても、いとよくおはす
かし。匂ひやかなるかたは、此大納言にもまさり給へるものを、世の人はせちに
い

一帝也
二關白殿也
三殿上人、女房
も也
四前に天子の御
帳にいらせ給ふ
と有りし首尾也
五御髪にまるる
事也
六帝の御直衣也
七恐れてかかざ
る也

ひおとし聞ゆるこそいとほしけれ。

○えんだうまゐると——筵道しく事也。行事には必ず筵道しくを云ふ也。一條
院の后宮の御方へ入御のさま也。

○宮もこなたによらせ——殿うへなどの御前を立ち去りて、帝のおはしますか
たへより給ふ也。

○殿の御まへに宮づかき召して——中宮太夫以下の宮司に、菓子、肴などの事
仰せ付けて、殿上人をもてなせと申し給ふ也。

○山井大納言——道頼卿也。后宮伊周公などの別腹の兄君也。山井殿、三條坊門
の北、京極の西、悪所なるよし拾芥に見えたり。永頼の三位の家也。榮花物語
云、此大千世君は、國々あまた知りたる人の山の井といふ所にすむがむすめお
ほかる聲に成り給ひぬ云云。大千世君とは即ち道頼卿なり。

○みうちぎまゐらせ給ひて——紅葉賀卷に、うへはみうちぎの人めして出で
させ給ひぬる云云。河海云、御ぐしとる人の事也。花鳥云、藏人。私記云、御
髻、御鬢事侍臣之間、撰二堪レ事之人一供、無三定例一、皆着二當色袍一謂二之御衽一
今案御もとどり御びんにまゐる人は、紫のきぬの直衣を着て伺候するを、御う
ちぎの人といふ也云云。

殿、大納言、山の井の大納言、三位の中將、内藏の頭などみなさぶらひ給ふ。宮の

八后宮など別
腹の兄なればし
たしからぬ也
九伊周公をいふ
也
二深切に伊周に
おされりといふ
也
二前の櫻の御直
衣といふよりこ
こまで異本にな
し

一帝の御使に也

二后宮今夜はえ
 三父母への御禮
 儀なるべし
 四しゆいささま
 五しゆいさの御
 六后宮の御詞
 七しゆいさの御
 答也
 八后宮の詞
 九たがひの御禮
 二淑景舎は登花
 殿遠けれは也
 一后宮也
 二狂言也
 三殆也

ぼらせ給ふべき御使にて、馬の内侍のすけ参り給へり。「今宵はえ」など遊らせ給ふを、殿聞かせ給ひて、「いとあるまじき事、はやのぼらせ給へ」と申させ給ふに、又春宮の御使しきりにある程いとさわがし。御迎へに、女房、春宮のなども参りて、とくとそのかし聞ゆ。「まづさば、かの君わたし聞え給ひて」との給はすれば、「さりともいかでか」とあるを、「猶見送り聞えん」などの給はするほどいとをかしうめたし。「さらば遠きをさきに」とて、まづ淑景舎わたり給ひて、殿など返らせ給ひてぞ、のぼらせ給ふ。道のほども殿の御さるがう事にいみじく笑ひて、ほと／＼うち橋よりもおちぬべし。

○内蔵頭——是も道隆公の御子也。頼親の内蔵頭と藤原系圖にあり。
 ○むまの内侍のすけ——左馬權頭時明の女、一條院源氏物語を御覽じて、紫式部は日本紀をこそよく見たりけれとのたまひしを妬みて、式部を日本紀の局といひし人なるべし。歌人也。
 ○まづさばかの君わたし——さあらば先づしげいさをまゐらせ給ひて後に、后宮はまゐりきまはんと也。
 ○さりともいかでか——さはありともいかでかは后宮よりさきにまゐらんと也、姉君への禮讓也。
 ○うちはしよりも——内階也。細流云、きり馬道に板をうちわたして通ふ道也。

九十四

一清少にいかに見る也
 二清少の答也
 三彼序を大やうに詩を誦しし云ふ也
 四黒戸、瀧口戸の西にあり、前に委し
 五一條院也
 六時にあふ詠吟はと也

殿上より梅の花のみな散りたる枝を、「これはいかに」といひたるに、只「早く落ちにけり」といらへたれば、其詩を誦して、黒戸に殿上人いと多くゐたるを、うへの御前聞かせおはしまして「よろしき歌など詠みたらんよりも、かゝる事はまさりたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

○殿上より——此段、異本には前の段に書きつゞけぬ。
 ○はやくおちにけり——朗詠、大庾嶺之梅早落。誰問「粉粧」これは紀納言長谷雄の詩序の文也。イ本前段につづけし本にしたがはば、かの内階よりもおちぬべき折に合はせられたれば、早落ちにけりと答へたるにや。

九十五

一清少也
 二懷中に用意する物也
 三清少の心也

二月つごもり風いたく吹きて、空いみじく黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司きて、「かうしてさぶらふ」と云へば、よりたるに、「公任の君、宰相中將殿の」とあるを見れば、懷紙に、たゞ、少し春ある心地こそすれとあるは、げに今日のけしきにいとよく合ひたるを、これが本はいかゞつくべから

四 清少の詞也
 五 主殿司答也
 六 清少の心也
 七 何の難もなきやうにこの心也
 八 定子に見せまゐらせてつけさせ申さん也
 九 一條院のおはして也
 一〇 返事をいそぐ也
 一一 付句のよかるまじきうへにこ也
 一二 清少の付句也
 一三 おづ／＼のころ也
 一四 此付句のよしあしの沙汰をききたく思ふ也
 一五 其沙汰きかじこ也
 一六 清少をほめて掌侍に執奏せんさ也

んと思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それ／＼」と云ふに、皆恥しき中に、宰相中將の御いらへをば、いかゞ事なしびに言ひ出でんと、心ひとつに苦しきを、御前に御らんせさせんとすれども、上のおはしまして大殿籠りたり。主殿司は「とく／＼」といふ。げに遅くさへあらんは、取り所なければ、さばれとて、
 空寒み、花にまがへて散る雪に

とわななく／＼書きてとらせて、いかゞ見給ふらんと思ふもわびし。これが事を聞かばやと思ふに、それられたらば聞かじと覺ゆるを、俊賢の中將など、「猶内侍に申してなさん」と定め給ひし」とばかりぞ、兵衛の佐中將にておはせしが語り給ひし。
 ○二月つごもり——是も正暦三年の比、前の段とおなじ比にや。
 ○かうしてさぶらふといへば——かくのごとくの用事ありてまゐりしといふ也。
 ○公任の君、宰相中將殿の——公任と宰相中將殿と兩人のおこせ給ふといふ也。公任は堀河相國頼忠公の男、和漢の才人也。宰相中將は齊信卿にや。
 ○すこし春ある——雪など降荒れて、春色の少き心也。此詞を取りて俊成卿「埋火にすこし春ある心ちして夜深き冬を慰むる哉」
 ○誰々かといへばそれ／＼と——此連歌おこせし一座の人々を誰々かおはすととへば、それ／＼とこたへし也。
 ○おほとのごもりたり——帝の渡御にて后宮の御寝なりし也。

一 讀經也、六百卷を獨りしてよむははるかなるべし

○さばれとて——任他也。たとひあしくもあれとちふてたる詞也。
 ○そらさむみ——花にまがへてちる雪にといふにて、すこし春あるをあへしらへる也。
 ○もしられたらばきかじ——此付句あしきとならば、我に其沙汰きかする人もあらじとの心也。
 ○としかたの中將——源俊賢卿、西宮左大臣高明公の男也。
 ○兵衛のすけ——誰と不知、もしとしかたの兄弟忠賢の兵衛佐にや。

九十六

はるかなる物 千日の精進はじむる日。半臂の緒ひねりはじむる日。みちの國へ行く人の逢坂の關越ゆるほど。生まれたる稚兒の大人になるほど。大般若經御讀經、一人して讀みはじむる。十二年の山籠りのはじめてのぼる日。

○千日のさうじ——御嶽精進などにや。
 ○はんびのをひねり始むる——和名云、半臂、衣名也。桃華葉云、或抄云、近代半臂以小緒結之、往古之例以大緒二筋結之、今世少二知人云云。猶委今案黒半臂といふもあり。冬は綾、夏は生の穀を用ゐる。緒はらす物をたよみて付くといへり。但、此草紙にいへるは、往古の大緒二筋をもちて結之とい

- 一 是より例の筆すさびの物がたり也
- 二 なぶられ笑はる也
- 三 方弘がわらはる事也
- 四 方弘の供の侍なり也
- 五 方弘が供を人々のよびて也
- 六 染縫なごよき也
- 七 方弘が装束也
- 八 方弘がこたへの事也
- 九 方弘が詞也
- 一〇 男の詞也
- 一一 方弘が詞也
- 一二 三何事とはしらす

へる時の事なるべし。是をひねるに遙なる故あるにや。今世知る人まれなりと云云。可尋之。

○十二年の山ごもり——後撰の詞書にも有り。前註。

九十七

方弘はいみじく人に笑はるゝもの哉。親などいかに聞くらん。供にありく者ども、いと人々しきを呼び寄せて、「何しにかゝるものには使はるゝぞ、いかゞ覺ゆる」など笑ふ。物いとよくするあたりにて、下襲の色、うへの衣なども、人よりはよくて着たるを「是はこと人に着せばや」などいふに、げにぞ詞つかひなどのあやしき。里に宿直物取りにやるに、「男二人まかれ」といふに、「一人して取りにまかりなんものを」といふに「あやしの男や。一人して、二人の物をば、いかで持つべきぞ。一升瓶に、二升はいるや」といふを、なでふ事と知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使の来て「御返事とく」といふを「あなにくの男や。竈に豆やくべたる。此殿上の墨筆は何者の盗み隠したるぞ。飯、酒ならばこそほしうして、人の盗まめ」といふを、又笑ふ。

○まさひろ——源方弘、左馬權頭時明男、前註。

○なにしにかゝるものにはつかはるゝぞ——人にかく笑はるゝ方弘にはいかで

ねじたゞ笑ひた

る也

三方弘がこたは

也

四句

五是も方弘が詞

也

六飯酒

つかはるゝぞと也。

○人よりはよくてきたるを——異本ニきたるを紙燭さしつけやき、あるはこれはこと人にとあり。

○是はこと人にきせばや——方弘には似合はずとなぶりていふ也。

○里にとのゐものとり——方弘殿上に宿直して里亭へ夜の物取りにやるなるべし。

○ひとますがめに二ますはいるや——一升入るべき瓶に、二升はいらじと也。

一人して二人の物はえもつまじと也。瓶は方量かぎりあり、人の力はかぎりなき事もしらでいへるまことに笑はるべし。

○かまどにまめやくべたる——せはしき事のたとへにいふにや。

○此殿上のすみふでは——彼返事かゝんとて、墨筆のなければ、尋ねるとていふにや。

女院なやませ給ふとて、御使に参りて歸りたるに、「院の殿上人は誰々かありつると人の問へば、「それかれ」など四五人ばかりいふに、「又は」と問へば、「さてはいぬる人どもぞありつる」といふを、また笑ふも、亦あやしき事にこそはあらめ。人間に寄り来て「わが君こそ。まづ物聞えむ。まづ／＼人のの給へる事ぞ」といへば、「何事にか」とて、几帳のもとによりたれば、「むくろごめにより給へ」といふを「五

- 一 今きたるに
- 二 女院の御かたの也
- 三 方弘がこたへ也
- 四 其外には誰々
- 五 又方弘が答

六方弘が清少をかしづきていふ也
 七人のいひし事かたりきかせん也
 八清少也
 九方弘が詞也
 一〇わざをかし少なきのわらへる也
 二指油、方弘が役する也
 三方弘也
 四油單、和名、かのうちしきの事也
 五うちしきを足にまさひながら歸るゆゑ也
 六方弘がしたうづのぬゆく也
 七震動也、是もわらはる、事也
 八一盛也
 九小障子也
 一〇ひそやかに

體ごめに』となんいひつる」と云ひて、又笑ふ。除目の中の夜、さし油するに、燈臺の打敷を踏みて立てるに、新しき油單なれば、つようとらへられにけり。さし歩みて歸れば、やがて燈臺は倒れぬ。襪は打敷につきてゆくに、まことに道こそ震動したりしか。頭つき給はぬほどは、殿上の臺盤に、人もつかず。それに方弘は、豆一盛を取りて、小障子のうしろにて、やをら食ひければ、引きあらはして笑はるゝ事ぞ限なきや。

- 女院なやませ——是東三條院也、一條院の御母、前注。
- 御つかひにまゐりて——宮の御かたよりの御見まひの使に方弘がまゐりしなるべし。
- さてはいぬる人どもぞ——其外には退出の人々ありしと也。事もなき返事なれば笑ふ也。
- 人まによりきて——人のなき間に方弘清少のもとに來て也。
- むくろごめに——軀籠、全身みなこなたへより給へとの心也。
- ちもくの中の夜——除目は三ヶ夜おこなはるゝ中の夜也。前に委註。
- とうだいのうちしき——燈臺の下にしく物也。すなはち油單也。
- つようとらへられ——油單に方弘が足をつけまつはされし也。
- したうづ——和名襪亦作襪和名之太久頭足衣也。桃華藥葉云、襪練貫の小袖を



いふ詞也
 三方弘を引出し也
 一津の國也
 二伊勢也
 三奥州也
 四八雲奥州云云
 五未考
 六八雲陸奥云云
 七八雲瀧河云云
 八するが也
 九八雲近江云云
 一〇陸奥の奈古會の關の一名さきこえたり
 一一よしなしな來そこいふやうなれは也
 一二八雲に相模云

着する時は練貫を用ゐる。宿老は白き平絹のねりはりたる也云云。
 ○頭つき給はぬほどは——藏人頭は貫首とて殿上の管領なれば、臺盤につきて食する時も、頭のつかざるには殿上人何もつかぬを、方弘は頭より先に豆をくひしと也。

九十八

關は 逢坂の關、須磨の關、鈴鹿の關、くきだの關、白川の關、衣の關、たごこえの關ははゞかりの關とたしへなくこそ覺ゆれ。横走りの關、清見が關、見るめの關、よしなくの關こそ、いかに思ひ返したるならんといと知らまほしけれ。それをなこそその關とはいふにやあらん。逢坂などをまで思ひ返したらばわびしからんか。足柄の關。

- あふさかのせき——近江也。忍熊王、武内宿禰と戦まけて退きしに、武内宿禰追ひてこゝにて行き逢ひて、終に忍熊王を亡したる故、逢坂と云ふと日本紀九に有り。
- くきだの關——細流云、奥州の菊田刺關也。俗にくきだのせきといふ。
- たとしへなくこそ——たとへがたなき心也。只こゆるといふ名と、憚るといふとは、たとへくらべがたき心也。

○いかに思ひ返したるならん——思ひ立ちたる事を、又由なしと思ひ返したるやゝなれば也。
○逢坂などをまで——逢ふべしと契りし人の、由なしな來そなど思ひ返したらば、佗しからんと也。逢坂を逢ふにそへてうたにもあまたよみたれば也。續千載集に、頼朝卿「都には君に逢坂ちかければ、なこそその關は遠きとをしれ」

九十九

枕 一八雲に伊豆國云云
二木枯森、駿河也
三信太、和泉也
四生田、攝津也
五未知、八雲同前
六未知
七未知、イタ、ききの森
八山城也
九イくらつき
二未知
二浮田、山城也
三イラへつき
の、未知

森は おほあらぎの森。しのびの森。こゝろの森。木枯の森。信太の森。生田の森。うつきの森。きくたの森。いはせの森。立聞の森。常磐の森。くるへきの森。神南備の森。轉寢の森。浮田の森。うへ木の森。石田の森。かうだての森といふが、耳とどまるこそあやしけれ。森などいふべくもあらず、たゞ一木あるを、何につけたるぞ。こひの森。木幡の森。

- おほあらぎのもり——大荒木、八雲山城云云。
- しのびのもり——未知。但八雲に、しのぶの森。陸奥云云。是を書きたがへしにや。忍びの岡は河内也。
- いはせのもり——盤瀬森。八雲云、大和、又攝津、信濃にもあり云々。
- くるへきの森——八雲にもしれず。

枕 一まこも也
二水のふかき所に生ひたるさき也
三河内國也
四はせにまうで、三日めにかへる也
五足脛をかりあはる也

三石田、山しろ也
四未知

- 神なびの——神奈備森也。津國、今かうないといふ所也。
- こひのもり——未考。
- こはたの森——山城の木幡にや。可尋之。此兩所イ本になし。

百

卯月の晦日に、長谷寺に詣つとて、淀の渡といふものをせしかば、舟に車をかき据ゑて行くに、菖蒲、菰などの末短く見えしを、取らせたれば、いと長かりける。菰つみたる舟のありきしこそ、いみじうをかしかりしか。高瀬の淀には、これを詠みけるなめりと見えし。三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲刈るとて笠のいと小さきを着て、脛いと高き男、童などのあるも、屏風の繪にいとよく似たり。

- 卯月つごもり——是より例の筆ざさび也。
- 長谷寺——拾芥云、金色二丈六尺十一面云云、猶元享釋書ニ委。
- 淀のわたり——古は橋なくて舟渡りせし也。たつ程のかさね土器なかりせばおほえて淀のわたりせましや」と俊頼の歌也。
- しやうぶどもなど——文選廿二謝靈運、蘋萍泛ニ沉深ニ菰蒲冒ニ淺清ニ金葉集「あやめぐさ引手もたゆく長きねのいかで淺香の沼に生ひけん」

○たかせのよどにはこれを——六帖歌「こも枕高瀬の淀にかるこものかるとも我はしらで頼まん」其外あまたよめり。

百一

湯は 七久里の湯。有馬の湯。玉造の湯。

○湯——温泉の事也。博物志云、凡水源有石硫黄其泉則温。

○七久里湯——八雲云、信濃、しなの、みゆ同云云。

百二

常よりもことに聞ゆる物 元三の車の音。鳥の聲。曉のしはぶき。物の音はさらなり。

○物のねはさら也——是も曉の管絃也。常よりことなるといふも、事新しと也。

百三

繪に書きて劣る物 なでしこ。櫻。山吹。物語にめでたしといひたる男女のかたち。

○なでしこ——イ本此下にさうぶとあり。菖蒲也。

○物がたりにめでたしと——桐壺卷云、ゑに書きたる楊貴妃の形は、いみじき

繪師といへども、筆限あればいと匂ひなし云云。狭衣に、大將の御ありさまぞ筆及ぶべくもあらずとて、果はやりనికిとあるたぐひ也。

百四

書きまさりするもの 松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。冬はいみじく寒き。夏は世に知らず暑き。

○かきまさりする物——ゑにも書きまさり、詞書にも書き勝りする也。

○松の木——是より鹿までは、ゑに書きまさりする也。

○冬はいみじく——是以下は詞に書きまさりする也。韓退之詩云、肌膚生三鱗

甲一衣被如刀鎌一氣寒鼻莫嗅。血凍指不粘圍爐不覺煖。獸炭屢已添。

なほあげてかぞふべからず。

○夏はよにしらずあつき——梁元帝詩云、季夏煩暑流金燂石。みなづきの土さへさけてる日にも我袖ひめやいもにあはずして」と拾遺にも讀めり。

百五

あはれなる物 孝ある人の子。鹿の音。よき男の若きが御嶽精進したる。隔て居てうち行ひたる曉のぬかなど、いみじうあはれなり。むつまじき人などの、目さまし

一イいてるたらんあかつきのぬかなど
二彼の禮拜の聲

をしたしき人の
物へたてて聞く
想像も哀と也
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十

て聞くらん思ひやり、まうづる程のありさま、いかならんとつゝしみたるに、平か
にまうで着きたるこそいとめてたけれ。烏帽子のさまなどぞ、すこし人わろき。な
ほいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてまうづとこそは知りたるに、右衛門の
佐信賢は「あぢきなき事なり。たゞ清き衣を着てまうでんに、なでふ事があらん。
必ずしも『あしくてよ』と御獄の給はじ」とて、三月つごもりに、紫のいと濃き指
貫、白き、青山吹のいみじくおどろくしきなどにて。隆光が主殿の助なるは、青
色の紅の衣、摺りもどろかしたる水干袴にて、うち續きまうでたりけるに、歸る人
もまうづる人も、珍しくあやしき事に、すべてこの山道にかゝる姿の人見えざりつ
とあさましがりをしを、四月晦日に歸りて、六月十餘日のほどに、筑前のかみうせに
し代になりしこそ、げにいひけんいたがはずもと聞えしか。是は哀なる事にはあ
らねども、御獄のついで也。九月三十日、十月一日の程に、只あるかなきかに聞き
つけたる蟋蟀の聲、鶏の子いだきて臥したる。秋深き庭の淺茅に露のいろく玉の
やうにて光りたる。川竹の風に吹かれたる夕暮曉に目さましたる、夜などもすべ
て、思ひかはしたる若き人の中に、せくかたありて、心にしもまかせぬ。山里の雪。
男も女も清げなるが、黒き衣着たる。二十六七日ばかりの曉に、物語して居明し
て見れば、あるかなきかに心細げなる月の、山の端近く見えたるこそいとあはれな
れ。秋の野。年うちすぐしたる僧たちの行したる。荒れたる家に葎這ひかゝり、蓬

の次によ別也
元哀なるこめ
たる詞也
三親のいさめな
ごに也
三服衣也

など高く生ひたる庭に、月の隈なくあかき。いと荒うはあらぬ風の吹きたる。
○孝ある人の子——爾雅釋話曰、善事ニ父母ニ爲レ孝。孟子曰、堯舜之道孝弟
而已。孝經云、子曰夫孝徳之本也。教之所由生一。猶あげていひがたし。
○へだててみてうちおこなひたる曉のぬか——ぬかは額突とて禮拜する事也。御
獄精進に別所にはなれて、彌勒を禮拜するさま也。金峯山の金剛藏王は、過
去釋迦、現在觀音、當來彌勒と也。夕顔巻に、みだけさうじにやあらん。たい
翁びたるこゑにぬかづくぞきこゆる云云。又なもたらうらいだうしとぞおがむな
るともいへり。
○まうづるほどの——千日精進して金峯山に參る也。
○信賢——六條左大臣重信公の息宣方歟。猶可勘。
○たゞきよき衣を——誰もやつれて參るにのぶかたは淨衣にてまうでんとてい
へる詞也。
○かならずよもあしくてよと——金峯山の藏王も必ず悪しくやつれてまいれよ
とはよもの給はじと也。
○あをやまぶき——桃華藥葉衣色異説云、青山吹、表青、裏黄、此衣二月にも
用ゐる事あり云云。
○たかみつのとのもりのすけ——勘物云、隆光、主殿助長保三年藏人年廿九。

三條右大臣定方より五代左衛門佐宣孝の息云云。
 ○すゐかん——桃華葉云、水干事。紗にても平絹生にても、又色は白くても何にても大納言の時まで内々に着用之。
 ○いひけんいたかはずもと——よき衣きてまうでんになでふ事かあらんといひしにたがはずも有りける哉との心也。
 ○十月一日のほど——詩幽風七月篇云、十月蟋蟀入我牀下。「きりくす夜寒に秋のなるまよによわるかこゑの遠ざかりゆく西行」
 ○秋ふかき庭の浅茅に——家持集「松陰の浅茅がうへの白露をけさずて玉にぬく物にがも」
 ○川竹の風に——イ本夕暮曉に川竹の風にふかれたるめさましてきゝたるとあり。此本と心こと也。
 ○二十六七日——はつかあまりむいかなぬかとよむべし。
 ○年うちすぐしたる——年老い過ぎたる也。朗詠、香火一爐灯一盞、白頭夜禮佛名經云云。
 ○いとあらうはあらぬ風の——一説是も荒れたる家の葎蓬など生ひたる所にふく心なるべし。

百六

一是より例の筆
 ずさび也
 ニイをる
 三履也
 四イツ、が
 五清少なごのさ
 六高く上る間の
 七彼の法師はら
 のやすくゆく也

正月に寺に籠りたるはいみじく寒く雪がちに氷りたるこそをかしけれ。雨などの降りぬべき氣色なるはいとわろし。初瀬などに詣て、局などするほどは、樽階のもとに車引きよせて立てるに、帯ばかりしたる若き法師ばらの、あしだといふ物を履きて、いさゝかつみもなく下り上るとて、何ともなき經のはしうちよみ、俱舎の頰をすこしいひつゞけありくこそ、所につけてをかしけれ。わが上るはいと危く、傍によりて、高欄おさへてゆくものを、只板敷などのやうに思ひたるもをかし。
 ○寺にこもり——三井寺にや。いつくにてても也。
 ○くれはし——樽階にや。初瀬にある物也。うつぼ物語云、樓にのぼり給ふべきほどのくれはしは、色々の木をませ／＼につくりて、下より流るゝ水は涼しく見ゆべく作る云云。
 ○おびばかりしたる——小袖に帯ばかりにて衣きざるにや。イおぬは笈斗おひたるにや。
 ○つゝみもなく——少しのつゝしみもなく也。恐れぬ心也。イツゝがもなくは無レ恙也。あやふきけがもなき也。
 ○俱舎のじゆ——大藏經綱目指要録七云、俱舎頰一卷。天親菩薩造也。説一切

枕 草 子

- 一 沓也
- 二 車より也
- 三 よその参詣の人々のさま也
- 四 裳
- 五 背子也
- 六 装束したる也
- 七 深履和名
- 八 半鞆和名、半靴桃華
- 九 廊
- 一〇 藤江次第沓引也
- 一一 大内のやうなる也
- 一二 内證外さまをもゆるされし男也
- 一三 道の高下の案内する也
- 一四 外の者也
- 一五 清少なごに近く也
- 一六 先立也

有部作^{ナス}三八品。一分別界品四十四頌。二分別根品七十四頌。三分別世界品九十九頌。四分別葉品二百三十一頌。五分別隨眼品六十九頌。六分別聖賢品八十三頌。七分別智品六十一頌。八分別定品三十九頌。已上六百頌爲^ニ論之本^一也。

局^{つぼね}したりなどいひて、沓^{くわ}どももて来て下^{くだ}す。衣^{きぬ}かへさまに引きかへしなどしたるもあり。裳^も、唐衣^{からぎぬ}など、こはくしく装束^{さうぞく}たるもあり。深履^{ふかぐら}、半鞆^{はんたう}など履^はきて、廊^{らう}のほどなど靴^{くつ}すり入^いるは、内^{うち}わたりめきて又^{また}をかし。内外^{うちとそと}など許^{ゆる}されたる若^{わか}き男^{おとこ}ども、家の子^{いへの子}など、又立^たちつゞきて、「そこもとは落ちたる所に侍^{まへ}るめり。あがりたるになど教^{しゆ}へゆく。何者^{なにもの}にかあらん、いと近くさし歩^{あゆ}み、さい立つ者^{もの}などを「しばし、人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり」などいふを、げにとて、少し立^たち後^{あと}るゝもあり。又聞^ききも入^いれず、我^{われ}まづとく、佛の御前^{みまへ}にと行^ゆくもあり。局^{つぼね}にゆくほども、人の居^いみたる前^{まへ}を通^{とほ}りゆけば、いとたてあるに、犬防^{いぬせき}の中を見入^{みい}れたる心地^{ちみ}いみじく尊^{たうと}く、なごて月比^{つきひ}もまうでず過^{あや}しつらん」とて、まづ心もおこさる。みあかし常燈^{じやうてい}にはあらで、うちに又人の奉^{ほう}りたる、おそろしきまで燃^もえたるに、佛のきらく〜と見え給^{たま}へる、いみじく尊^{たうと}げにて、手^てごとに文^{ふみ}を捧^{ささ}げて、禮^{らい}はんに向^{むか}ひて、論議^{ろんぎ}誓^{ちか}ふも、さばかりゆすり満^みちて、これはと取り放^{はな}ちて聞^ききさわぐべくもあらぬに、せめてしぼり出したる聲^{こゑ}の、さすがに又紛^{まぎ}れず。千燈^{せんとう}の御心^{みこころ}ざしは、なにがしの御^みため」とわづかに聞^きゆ。帶^{おび}うちかけておがみ奉^{ほう}るに、「こゝにかう候^{さうら}ふ」と

枕 草 子

- 一 彼若^{わか}き男家^{おとこいへ}子^こなごの制^{せい}するさま也
- 二 早く也
- 三 居^い居^い並^{なら}
- 四 内陣^{うちじん}へ他所^{いよところ}のひごの奉^{ほう}りし燈^{とう}明^あなり
- 五 禮^{らい}版^{ばん}
- 六 三論^{さんろん}義^ぎ誓^{ちか}にや
- 七 三動^{さんどう}満^み也、願^{ねん}動^{どう}する也
- 八 大德^{だいとく}達^{だつ}のみあかし文^{ぶん}よみあひしさま也
- 九 清少^{せいしょう}の御^み灯^{とう}文^{ぶん}の詞^{ことば}なるべし
- 一〇 それれゝの立^た願^{ねん}のため也
- 一一 清少^{せいしょう}のこもりゐし局^{つぼね}へ法師^{ほうし}なごのしきみをつかはす也
- 一二 所願^{しよくわん}のおもむきを佛^{ぶつ}に申^{まを}せしご也
- 一三 云々^{うんうん}と書きかやう／＼の人^{ひと}也

いひて、櫛^{しき}の枝^{えだ}を折^をりてもてきたるなどの尊^{たうと}きなども、猶^{なほ}をかし。

○ふかぐつはうくわ——和名^{わな}云、深履^{ふかぐら}、其頭^{みづか}短者^{じやくちやく}謂^い之^を半鞆^{はんたう}、桃華^{とうか}葉^え云、靴^{くつ}深沓^{ふかぐら}同事^{ごじ}也云云。靴^{くつ}靴^{くつ}は赤地^{せきぢ}の錦^{にしん}、靴^{くつ}帯^{おび}はひきはたの皮^{かわ}也。昔^{むかし}はかな物^{もの}あり。節會^{せつゑ}の時^{とき}、内辨^{うちべん}外辨^{そとべん}の公卿^{こうけい}、若^もくは行幸^{ぎやうきやう}供奉^{ほうふ}の時^{とき}用^{もち}之^を。又云、半靴^{はんくつ}は御幸^{ごきやう}の供奉^{ほうふ}直衣^{ちやくい}騎馬^{きば}の時^{とき}用^{もち}之^を。

○犬^{いぬ}ふせぎの中^{なか}を——觀音^{くわんおん}のおはする所のさま也。

○まづ心もおこたる——其^{その}たふときさまを見るより先^{まづ}づ信仰^{しんがう}の心^{こころ}發^は起^{おこ}すると也。

○てごとくにふみをさゝげて——御灯^{みとう}文^{ぶん}なるべし。願^{ねん}文^{ぶん}など也。源氏^{げんじ}玉^{たま}かつらの卷^{まき}にも、初瀬^{はつせ}にてみあかしぶみの事^{こと}あり。

○千^{せん}とうの御心^{みこころ}ざし——千燈^{せんとう}ともす事^{こと}なるべし。イ本^{いほん}千^{せん}たんと有^あり。玄旨^{げんし}御本^{ごほん}にも千燈^{せんとう}とあればイ本^{いほん}用^{もち}るべからず。

○おびうちかけて——かけおびのさまにや。旅^{りよ}すがたのやつせる装束^{さうぞく}なるべし。

犬防^{いぬせき}のかたより法師^{ほうし}寄^より來^きて、「いとよく申^{まを}し侍^{まへ}りぬ。幾^{いく}日^かばかり籠^{かご}らせ給^{たま}ふべき」など問^とふ。「しかくの人^{ひと}籠^{かご}らせ給^{たま}へり。」などいひ聞^きかせていぬるすなはち、火桶^{ひばく}、菓物^{くわつぶつ}などもてきつゝ貸^かす。半挿^{はんさう}に手水^{てすい}など入^いれて、盥^{あら}の手^てもなきなどあり。「御供^{ごとも}の

いふ心也
 三葉子也
 四清少の局宿坊より持来て貸す也
 五匣ハンサウ半挿さもかく也手水入るる物也
 六關和名、手洗同
 七かたへはのこりてかはる也
 八わがなんなりこよむべし
 九額突也、禮拜する也
 一〇不寢也
 一一是もかの男のさき也
 一二鼻かむさはなく事を云ふ也
 一三あのもの、所願を成就させまほしき也

人はかの坊に」など云ひて、呼びもて行けば、かはりくぞ行く。誦經の鐘の音、我ななりと聞けば、たのもしく聞ゆ。傍によるしき男の、いと忍びやかに額など突く。立居のほども心あらんと聞えたるが、いたく思ひ入りたるけしきにて、いも寝ず行ふこそいとあはれなれ。うちやすむ程は、經高くは聞えぬほどに讀みたるも尊げなり。高くうち出させまほしきに、まして鼻などをけざやかに聞きにくはあらで、少し忍びてかみたるは、何事を思ふらん。かれをかなへばやとこそ覺ゆれ。

- 法師のよりきて——清少の宿坊の法師の寄り來たる也。願文讀みし人也。
- しかくの人こもらせ給へり——是も清少の宿坊の法師我がもとに又こもりおはする人の事などかたりきかせて歸るさまなり。
- はんさう——匣ハンザウ和名云、匣中有道可注水之器也。俗用二椽字、所出未詳、或説云、有柄半挿、其内一故呼爲二半挿。
- 御ともの人はかの坊に——堂にての清少の局狭ければ、供の人々は宿坊へとさそふ也。
- ずきやうの鐘のおと——誦經鐘也。祈禱の經をよむ事也。源氏浮舟卷に、ずきやうのかねの風につきてきこえるをつくくと聞きふし給へり云云。
- 我ななりときけば——我よましむる祈禱の鐘の音なりけりと也。
- たかくうち出させまほし——彼の男の忍びやかにぬかづき經をも高からず讀むを聲高く詞にいださせまほしきと也。

一 早
 二 宿坊也、
 三 清少の下人也
 四 清少の局さびしき也
 五 是も願文なるべし
 六 誦經のかね也
 七 いづかたよりの御すきやうぞこ也
 八 こんでうたれの御願なごいふ也
 九 句
 一〇 句
 一一 其産のうへ心もこなく聞きて清少もほこけを念ずる也
 一二 立願の事也

日比籠りたるに、晝は少しのどかにぞ、早うは有りし。法師の坊に、をのこ共、童など行きて、つれづれなるに、たゞ傍に貝をいと高く、俄に吹き出したるこそ驚かるれ。清げなるたて文など、持たせたる男の、誦經の物うち置きて、堂童子など呼ぶ聲は、山ひびきあひてきら／＼しう聞ゆ。鐘の聲響きまさりて、いづこならんと聞くほどに、やんごとなき所の名うちいひて「御産平かに」など。教化などしたる。すゞろにいかならんと覺束なく念ぜらる。これはたゞなる折の事なめり。正月などには、只いと物さわがしく、物のぞみなどする人の、際なくまうづる見るほどに、行もしやられず。

- 日比こもりたるに——前にも日比こもられしなるべし。
- はやうは有りし——前々はかやうに晝夜さわがしくはなかりしとなるべし。
- かひをいとたかく——昔は十二時に貝を吹きし也。千載集に「けふも亦午の貝こそ吹きつなれひつじのあゆみ近付きぬらし赤染衛門」
- ずきやうの物——誦經の布施物なり。浮舟のまきに、御ずきやうせさせ給へとて其れらの物文など書きそへてもてきたり云云。
- たら童子——堂童子は法會の時花筥をおこなひをさめなどする物也。江次第

一暮れて參詣するは通夜の人ならん也
 二持ち上ぐべくもなき也
 三其ま、局に出でて也
 四其事になれたる也
 五火用心の事なるべし
 六是もこもりし人の子なるべし
 七イさぶらひの人とあり、可用ハねほれし也
 九いさほしがる心也
 二〇後夜
 二〇修行者めきたる也

に佛事ごとに見えたり。禁中の法會に其座以下雲圖抄に有り。
 ○御さんたひらかに——御産の祈禱など申すさま也。平に守り給へと申す也。
 ○教化などしたる——法理をのべて此佛驗むなしかるまじき由を教化しきかするにや。

日のうち暮るゝにまうづるは籠る人なぬめり。小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屏風などの高き、いとよく進退し、疊などほうとたて置くと見れば、たゞ局に出でて、犬防に簾をさらりと懸くるさまなどぞいみじくつけたるは安げなり。そよくとあまた下りて、大人だちたる人のいやしからず忍びやかなる御氣配にて、歸る人にやあらん。そのうち危し。火の事制せよ。などいふもあり。七つ八つばかりなる男兒の愛敬つき奢りたる聲にて、さぶらひ人よびつけ、物などいひたる氣配もいとをかし。又三つばかりなる稚兒の寢おびれてうちしはぶきたる氣配もうつくし。乳と人の名、母などうち出でたらんもこれならんといと知らまほし。夜一夜いみじうののしり、行ひあかす。寢も入らざりつるを、後夜など果てて、少しうち休み寝ぬる耳に、其寺の佛經を、いとあらりと高きうち出でてよみたるに、わざと尊しともあらず。修行者だちたる法師のよむなぬめりと、ふとうち驚かれて、あはれに聞ゆ。

○屏風などの高き——彼通夜の人の局をかこはんためなるべし。

○いとよくしんたいし——進退也、屏風の高大なるをよくもてあつかひたるさま也。

○そよくとあまた——是は籠りし人の今歸るさま也。

○あいぎやうづきおごりたるこゑ——愛敬めき驕りたる也。愛敬有りながらほこらしき童のさま也。

○めのとの名母などうち出でたらん——彼ちこの乳母の名をよび母などいひ出でたるなり。

○これならんといとしらまほし——其めのと母などは是ならんといひ出で知りたきと也。

○其寺の佛經——たとへば初瀬にては觀音經、うづまきにては藥師經のたぐひ也。

又夜などは顔知らで、人々しき人の行ひたるが、青鈍の指貫のはたばりたる。白き衣どもあまた着て、子どもなぬめりと見ゆる若き男の、をかしう打ち裝束たる、童などして、さぶらひの者どもあまたかこしこまり、ぬねうしたるをかし。かりそめに屏風立てて、額など少しくめり。顔知らぬは誰ならんといとゆかし。知りたるは、さなぬめりと見るをかし。若き人どもは、とかく局などもなどのわたりにさまよひて、佛の御かたに目見やり奉らず。別當など呼びてうちさゝめき物語して出でぬる。

一縹いろのこき也
 二ひろごりし心也
 三裝束せし也
 四童など具したる也
 五是もかのさしぬききたる人のさま也

六見知りたるは
これ殿ぞ見る
也
七若き男達也

一句
二貴の字也
三句
四もたせたる也
五小舎人也
六摺屋也
七句
八召具して也
九其人ぞかしこ
也
一〇局の前をすぎ
行く也
一一我こ、にこも
りある事をしら
せたき也

えせ物とは見えざかし。

○みねうしたるも——キネウツ圍繞也、かの青鈍アヲニの指貫きたるを、侍どものたちめぐり
渴仰カツウしたるさま也。カコミメツル

○とかくつぼねどもなどの——女中の局のわたりに立ちさまよひのぞく様也。

○別當などよびて——其寺の別當に其局の事をさゝやき問ふ也。

○えせ物とは見えざかし——心あさき若人とは見えざ、いかさま心ふかき故あ
りげなると也。

二月卅日、三月朔日頃、花盛に籠りたるもをかし。清げなる男どもの忍ぶと見ゆる
二三人櫻青柳などをかして、くもりあげたる。指貫の裾もあてやかに見なざる

る。つきくしき男に装束をかして、小舎人童ども紅梅、萌黄
の狩衣に、色々のきぬ、摺りもどろかしたる袴など着せたり。花など折らせて侍
めきて細やかなるものなど具して、金鼓うつこそをかしけれ。さぞかしと見ゆる人
あれど、いかでかは知らん。うち過ぎていぬるこそさすがにさうくしけれ。氣色
を見せましものを——などいふもをかし。

○さくらあをやぎ——直垂或は狩衣などにや。櫻は表白裏赤花。柳は表白裏青
也。

○つきくしきをのこに——よいころなる心也。

○さうぞくをかしてしたるゑぶくる——鷹の餌袋エツツロに見事にかざりしたる也。鷹
などすゑさせて來たるさまなるべし。

○すりもどろかし——袴ハカマにすりゑなどみだれ書きたるなるべし。

○ごんぐ——金鼓、和名云、最勝經云妙童菩薩於二夢中一見二大金鼓云云。ことな
る佛事に樂人物の音を發せんとて圖書金鼓をうつ。又唄師ウタシ音聲を發せんとて、
金鼓を打つ事、江次第十三にみゆ。

○いかでかはしらん——此方には見付けたれども、あなたには見付けねば我と
はいかでしらんと也。

かやうにて寺ごもり、すべて例ならぬ所に、使ふ人の限りしてあるは、甲斐なくこ
そ覺ゆれ。猶同じほにて、一つ心にかしき事もさまぐ言ひ合せつべき人、必
ず一人二人、あまたもさそはまほし。其ある人の中にも、口惜しからぬもあれども、
目馴れたるなるべし。男なども、さ思ふにこそあめれ、わざと尋ね呼びもてありく
めるはいみじ。

○すべて例ならぬ所に——寺籠にかぎらず。惣じて常ならぬ所に旅居などせん
に、我一人斗籠るはかひなし。同じ心の女友達など具してありたきと也。

○をとこななどもさ思ふに——清少のみならず、男もかやうにおもふやらん。わ
ざと友達をたづねありくと也。

一うちものは
かりにて也
二其つかふ人の
中にもいひあは
せてよき物もあ
れ朝夕みなれ
てめづらしから
ず也

心づきなき物 祭、御祓など、すべて男の見る物見車に、只一人乗りて見る人こそあれ、いかなる人にかあらん。やんごとなからずとも、若き男どもの物ゆかしと思ひたるなど、引きのせて見よかし。透影にたゞ一人かくよひて、心一つにまもり居たらんよ。いかばかり心せばく、けにくきならんとぞおぼゆる。物へも行き、寺へも詣づる日の雨。使ふ人などの「我をばおぼさず。何がしこそ只今時の人」などいふをほの聞きたる。人よりは少し憎しと思ふ人の、推し量りごとうちし、すゞるなる物怨みしわれさかしがる。

○心づきなき物——此段衍文也。たゞ一人のりてといふ以下は、前のにくき物に有り。其外はおくにくはしくあれば、こゝには註せず。

百八

一日影もあきらけき時分也
 二よくもなきうし也
 三雨おほひの筵也
 四乞兒也

わびしげに見ゆる物。六七月の午未の時ばかりに、汚げなる車にえせ牛かけて、揺がし行くもの。雨降らぬ日張筵したる車。降る日張筵せぬも。年老いたる乞食。と寒き折も、暑きにも。げす女のなり悪しきが子を負ひたる。小さき板屋の黒う汚げなるが雨に濡れぬる。雨のいたく降る日、小さき馬に乗りて、前驅したる人の冠

五乞食は寒暑皆
 佗しひなる也
 六雨にひたりし
 也

もひしげ、袍も下襲も一つになりたる、いかにわびしからんと見えたり。夏はされどよし。

- はりむしろ——雨覆ひ服車などにむしろをはる事、西宮記に有り。其たぐひなり。
- かたい——乞兒。和名云、列子云齊有貧者一常乞於城市一乞兒云、天下之辱莫レ過ニ於是ニ和名加多井。
- ぜんくしたる——前驅也。馬にのりて供奉したる也。
- なつはされどよし——雨にぬれても冬のやうに寒からねばなるべし。

百九

一六時おこなふ
 日中也

暑げなるもの 隨身の長の狩衣。納の袈裟。出居の少將。いみじく肥えたる人の髪多かる。琴の袋。六七月の修法の阿闍梨、日中の時など行ふ。又、同じ頃の銅の鍛冶。

- ずるじんのをさ——近衛の番長也。環翠軒云、近衛隨身の上臈を番長といふ。秦氏下毛氏等今に隨身たる也。装束は、褐、衣冠、又は狩衣に花をつけたり。時に依りていでたつ様々也。
- のふのけさ——納袈裟敷、納、和名云、俗云二能不一。智度論云、五比丘白佛

當^{マサニ}著^シニ何等衣^{ノヨ}。佛言^{ノクマハク}。應^{チヤク}著^スニ衲衣^{ノフエ}。袈裟^{ノクマ}、和名袈裟^{ノクマ}、天竺語也^{コニハム}、此云^ニ無垢^{ムコ}衣^エ。又功德衣^{グドクエ}、俗云^ニ介佐ケサ^{ケサ}。

○でのの少將——出居次將は賭弓などに帶劍し弓箭をとりて、主上の出御に警蹕を講ず。江次第に、五月の最勝講七月の相撲節などにも、出居次將着座の事あり。是らの折あつげなるにや。出居の座殿上にあり。雲圖抄に委し。

○きんのふくろ——河海云、管絃の器皆袋に在る、事本儀也下略。

○ずほうのあざり——修法阿闍梨護摩など修する僧也。

○あかぐねのかぢ——和名云、鍛冶打金鐵爲^ニ器也^ト。俗云^ニ鍛冶^ニ誑也^ト。くろがねをうつも六七月には暑かるべけれど、あかぐねといへば一人あつげなるにや。

百十

一イニいさきよ
ニ密、ひそかにかくれる也
ニ曲限同物のかくれ也
四忍びて人のする事をみるらんがはづかしき也

恥しきもの 男の心のうち。いざとき夜居の僧。みそか盗人のさるべき隈に隠れ居て、いかに見るらんを、誰かは知らん。暗き紛れに、懐に物引き入るゝ人もあらんかし、それは同じ心にかしとや思ふらん。夜居の僧は、いと恥しき物也。若き人の集りては、人の上をいひ笑ひ、そしり悪みもするを、つくぐと聞き集むる、心の中も恥し。あなうたて、かしがまし」など、御前近き人々の、物けしきばみい

五おのれもぬす人なれは也
六是よりよるのそうのはづかしき事をいふ也
七よるの僧の心の中はづかしき也
八もの氣色をしらせていふ也
九若き人々のさま也
一〇是よりをこの心の中のはづかしき事をいふ也
一一心につく事なき也
一二女を也
一三契る心也
一四よのつねの男たにはづかしきに也
一五猶よく女をすかしたのめて淺からず思ふ人女におもはするが恥しき也

ふを、聞き入れず、いひくつてのはては、うち解けてねぬる後も恥し。男はうたて思ふさまならず、もどかしう心づきなき事ありと見れど、さし向ひたる人をすかし憑むるこそ恥しけれ。まして情有り、好ましき人に知られたるなどは、愚なりと思ふべくもなざずかし。心のうちにのみもあらず、又皆、これが事はかれに語り、かれが事はこれに言ひ聞かすべかめるを、我がことをば知らで、かく語るをば、こよなきなめりと、思ひやすらんと思ふこそ恥しけれ。いであはれ、又逢はじと思ふ人に逢へば、心もなき者なめりと見えて、恥しくもあらぬ物ぞかし。いみじく哀に、心苦しげに見捨てがたき事などを、いさゝか何事とも思はぬも、いかなる心ぞとこそはあさましけれ、さすがに人の上をばもどき、物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき宮仕の人などを語らひて、たゞにもあらずなりたる有様などをも知らでやみぬるよ。

○をとこの心の中——イ本ニいろこのむ男の心の中とあり、女はおろかにて、色好む男のすかし易く思はんが恥しき心也。猶あとに委し。

○いざときよるの僧——夜をもねぬ心也。河海云、夜居僧内裏の二間に候ひて夜もすがら加持まゐる僧也云云。其恥しき心あとにあり。

○くらきまぎれにふところ——盗人の隠れみて見るをもしらで家人の物盗む也。

云此女の事はかの女にかたりな
 ざる事也
 一男の心を推察
 して清少のいへ
 る也
 一六こゆる事なく
 思ふ事也
 一元女の心也、た
 のもし伊なしと
 見かざりし男に
 あへはさ也
 一三さやうに情も
 しらぬ男には恥
 しき事なき心也
 一三彼たのもし伊
 なき男の事をい
 ふ也
 一三男の情なくむ
 くつけさま也
 一三親兄弟なごも
 なき宮づかへ人
 を也
 一三是もたのもし
 伊なく情なき男
 のさま也

○あなうたてかしがまし——御前ちかき人の、夜居の僧のきく事を心得させんとていふ詞也。

○いひく／＼てのはては——拾遺「世の中をかくいひく／＼てはて／＼はいかにやいかにならんとすらん」このうたの詞書を用ゐる。

○うたておもふさまならず——男の心に思ふやうならず、もどかしと見る女も先づさしむかひてはふかく思ひがほにすかしたのむると也。

○情ありこのましき人にしられたる——情あり好色人にてありと世にもしられたる男はと也。

○心のうちのみもあらず——男の心中の恥しきのみにあらず。しわざにもうちとけがたき所有りと也。

○我が事をばしらで——男の心中を察していへる詞也。女の我が事をもかく人にかたたるゝをしらで、只かく外の女の事をかたるを、我をこよなく思ふ故かたるなりけりとのみ女の思はんかと男の思ふが恥しきと也。

○心もなき物なめりと——又あはじと思ひつめたる男に對しては心もなき女ぞと見えてもはづかしからぬと也。

○さすがに人のうへをば——さやうに情なき男の、かへりて人の事はうらみもどきて、我が非をいひつくるふと也。

○たゞにもあらずなりたる——彼宮仕へ人の懷妊せしをも情なく見捨てて、其事をもとりあへずしてやみはてしと也。

春曙抄六終

一千湯也
 二かもじさいふ
 物也
 三さしあけて也
 四うしろつき也
 五威勢もなき主
 の従者を勤當す
 る也
 六老人のすくな
 き白髪さほきた
 る也
 七妻也
 八怨也、嫉妬す
 る心也
 九女の家出した
 る也
 一〇男のたづねま
 せはんと思ひし
 也

枕草子春曙抄 卷七

百十一

むとくなる物 潮干の瀉なる大きな舟。髪短き人の、かづらとりおろして髪けづ
 る程、大きな木の風に吹き倒されて、根をさへげて横たはれ伏せる。相撲の負け
 て入る後手。えせ者の従者かんがふる。翁の髻放ちたる。人の妻な、どの、すど
 ろなる物怨じして隠れたるを、必ず尋ね騒がんものをと思ひたるに、さしも思ひた
 らず、妬げにもてなしたるに、さてもえ旅たち居たらねば、心と出て來たる。狛犬
 しく舞ふものの面白がりはやり出て踊る足音。

○むとくなる——無徳也。せんなくよしなき事也。
 ○すまひのまけて——相撲の節とて禁中にある也。年中行事歌合注云、相撲と
 いへる事は諸國の供御人をめしあつめて、七月に相撲の節といふことを行ひて、
 天子御覽する也。始めを召合せといふ。後にすぐりてめされんずるをば、ぬき
 てと申す下略。猶江次第雲圖抄に委し。
 ○心と出で來たる——イ本此次に、なま心おとりしたる人のそゞるなる事いひ

むつかりて一つにもふさじ云云とあり。前のねたき物にあれば不用。
 ○こまいぬしくまふもの——和名四曲調類高麗樂曲の中に、狛犬とてあり。
 此まひを舞ふものの興に乗じて躍るが無徳なるにや。伶人にとふべし。

百十二

修法は、佛眼眞言などよみたてまつりたる。なまめかしうたふとし。

○修法は佛眼眞言——是は無徳なる物にあらず、例のふと書き出でたる筆ざさ
 びなるべし。佛眼尊は曼陀羅圖の中央にあり。一切諸の佛菩薩に圍繞せられ、諸
 の佛菩薩の功德を具足せり。亦佛母尊とも號せり。瑜祇經云、時金剛薩埵對二
 一切如來前忽然現二作一切佛母身一住二大白蓮一身作二白日暉一兩目微笑二手住レ
 臍如レ入ニ奢摩地ニ從ニ一切支分ニ出ニ生十恒河沙俱胝佛一々佛皆作ニ禮敬一略。
 此修法の次第等眞言家秘密也。かの家に尋ぬべし。

百十三

はしたなきもの こと人をよぶに、我かとしてさし出でたるもの。まして物取らする
 折は。いとど自ら人の上など打ち言ひ誇りなどもしたるを、幼き人の聞き取りて、
 其人のある前にいひ出でたる。哀なる事など人の言ひてうち泣くに、げにいと哀と

二女の外に家出
 してもえぬ也
 三我さ女のかへ
 りきたる也
 三めきて也
 四おもしろめか
 したる也

一泪いでこねは也

一一條院の母后
東三條院の御棧敷也
二帝の風鬘を也
三女院よりの御消息なるべし
四御消息を敬し申し給ふ也
五清少の感涙也
六化粧也
七齊信卿、前にあり
八女院の御棧敷へ也
九句
一〇大路也

は聞きながら、泪のふつと出て来ぬ、いとはしたなし。泣顔作り、けしきことになせど、いと甲斐なし。めでたき事を聞くには、又すどろに、只いできにこそ出でくれ。

○はしたなき物——物の相應せぬ心也。よわき物につよくあたる類也。

○まして物とらする折は——只よばぬにさへさし出づるに、まして物とらすれば、追従に人事などいふ也。

○其人のある前——其所しられたる人の前にて童の意地わるく告げたるなるべし。

八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院御棧敷のあなたに、御輿をとめて、御消息申させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御有様にてかしまり申させ給ふが、世に知らずいみじきに、まことにこぼるれば、化粧したる顔も皆あらはれて、いかに見苦しがるらん。宣旨の御使にて齊信の宰相中將の御棧敷に参り給ひしこそ、いとをかしう見えしか。只隨身四人いみじうさうぞきたる。馬ぞひの細うしたてたるばかりして、二條の大路廣う清らにめでたきに、馬をうちはやして急ぎ参りて、少し遠くより降りて、そばの御簾の前に候ひ給ひし。院の別當ぞ申し給ひし。御返し承りて、又走らせ歸り参り給ひて、御輿のもとにて奏し給ひし程、いふも愚なりや。さてうち渡らせ給ふを見奉らせ給ふらん。女院の御心思ひやり参らす

二齊信卿也、馬をはやめて也
三女院の御目ごほりならぬかたの也
三宣旨の取次申し給ふ也
四女院の御返事也
五齊信卿也
六前に馬うちはやしてさある首尾也
七風鬘也
八大かたの人の美々しきを見るさへ也

は、飛び立ちぬべくこそ覺えしか。それには長泣をして笑はるゝぞかし。よろしき際の人だに猶此世にはめてたき物を、かうだに思ひ参らすもかしこしや。

○八幡の行幸——一條院の行幸也。榮花物語さまざまの悦びの巻に云ふ、永延元年といふ二月は例の神わざどもしきりて、所々の使たち何くれといふほどに過ぎぬ。三月は石清水の行幸あるべければ、いみじういそがせ給ふ云云。此時の事にや。江次第十六に、石清水行幸の次第あるべけれど今氓びたり。

○さばかりの御ありさま——還幸の諸官供奉のめでたき帝の御ありさまにて女院の御消息を敬せさせ給ふ事也。

○みなあらはれ——洗はれ、顯れ兩説なるべし。泪に白粉のおちたる也。

○せんじの御使——帝より女院への御使也。宣旨御使なるべし。

○隨身四人——宰相中將の召し具せられし也。

○すこしとほうよりおりて——女院の御棧敷より遠くより齊信卿下馬し給ふなり。禮義也。

○院の別當——女院の大別當也。職原抄追加云院廳。

大別當、大臣公卿清華之人任之、女院も大略院と同じ云云。

○さてうちわたらせ——女院の御棧敷の前を帝の渡御也。

○それにはながなきを——かやうのめでたき事には清少の泪とめがたくて笑は

- 一 是より道隆公のめでたかりし事也
- 二 廊也
- 三 中關白ごののこほ也
- 四 御許、女房をの給ふ也
- 五 老人をわらはんこ也
- 六 女房の中へ出で給ふ也
- 七 關白ごのの沓也
- 八 關白ごののさま也
- 九 裾也
- 一〇 ころせはまき也

るゝ、物の哀なる事をきゝてはかへりて泪出でこぬことのありとなるべし。
 ○かうだにおもひまゐらすもかしこしや——いはんや帝女院などの御事は、猶かやうにおもふも恐れ多しと也。

百十四

關白殿の黒戸より出でさせ給ふとて、女房の廊に隙なく候ふを、あないみじの御許たちや。翁をばいかにをこなりと笑ひ給ふらんと分け出でさせ給へば、戸口に入々の色々の袖口して御簾を引き上げたるに、權大納言殿御沓取りてはかせ奉らせ給ふ。いと物々しう清げによそほしげに下襲のしり長く、所せくさぶらひ給ふ。まづあなめでた、大納言ばかりの人に、沓を取らせ給ふよと見ゆ。山の井の大納言、そのつぎ、さらぬ人々、黒きものを引き散らしたるやうに、藤壺のへいのもとより登華殿の前まで居並みたるに、いと細やかにいみじうなまめかしうて、御はかしなど引きつゝろひやすらはせ給ふに、宮の太夫殿の清涼殿の前に立たせ給へれば、それは居させ給ふまじきなめりと見る程に、少し歩み出でさせ給へば、ふと居させ給ひしこそ、猶いかばかりの昔の御行のほどならんと見奉りしこそいみじかりしか、中納言の君の、忌の日とて、くすしがり行ひ給ひしを、「たべ、其珠數しばし。行ひてめでたき身にならんとか」とて、集りて笑へど、猶いとこそめでたけ

- 二 道賴卿也
- 三 御弟たち也
- 三 袍也、ふしかねにて染むる也
- 紫の由也
- 四 登花殿、和名に弘徽殿の北にあり云云
- 五 居敷也
- 六 關白ごののさま也
- 七 太刀也
- 八 關白ごののさま也
- 九 道長はつくはらせ給ふまじか
- 一〇 おもへはご也
- 一〇 中關白ごの也
- 三 道長公つくはらせ給ふ也
- 三 前世の善業にてかく人々に尊敬せられ給ふにやご也
- 三 誰としらさふ也、帚木卷に法けづきくすし

れ。御前に聞しめして「佛になりたらんこそ、是よりは勝らめ」とて打ち笑ませ給へるに、又めでたくなりてぞ見参らす。太夫殿のゐさせ給へるを返す、聞ゆれば「例の思ふ人」と笑はせ給ふ。まして此後の御有様見奉らせ給はましかば、ことわりと思し召されなまし。

- ころ戸より——黒戸、拾芥に瀧口の戸の西とあり。大鏡云々、こまつ帝と申す此御時に藤壺の上の御局の黒戸はあきたると聞き侍るはまことにや。
- 權大納言殿——勘物云、伊周公正曆三年權大納言。
- したがさねのしりながく——桃華葉云、裾、下襲の尻也。昔はつゞけたるを着する時煩ひ有るによりて、切りはなして着之也。仍つて一ツとしてかはる事なし。たけは代々の制不同也。但近代攝家に用ゐ來たる分は、納言以前は八尺大臣一丈關白の時一丈二尺ばかり也。大概かくのごとし。又可レ隨レ時。
- 藤つぼのへい——和名云、飛香舎在弘徽殿北一布知豆保。
- 宮の太夫殿——勘物云、御堂正曆二年權大納言、中宮大夫如元。榮花物語、三云、六月一日正曆元年后にたゞせ給ひぬ定子太夫には右衛門督どのをなしきこえさせ給へれどとあり。是中關白の御弟御堂の關白道長公也。
- 忌の日——齋日の事也。六齋日には殺生を斷つ事拾芥にも見ゆ。
- たべ其ずししばし——句を切るべし。其珠數を暫し給はれと也。中納言のあ

がらんこある
詞也
三句
三此關白殿なご
のやうの果報を
えんきて、おこ
なひ給ふかき也
三后宮也
三關白ごのの宿
世をうらやむを
きこしめして也
三后宮の御さま
をほむる也
三清少の申す也
三后宮の御詞也
いつもあやしき
事を感じおもふ
人さ也

まりに行ひ給ふをあざけりざれて、珠數をもとりて妨ぐるさま也。
○猶いとこそめでた——中納言をば笑へども實に關白殿の果報はめでたき也。
○佛になりたらん——とても宿業の善果をうくれば、關白どのの御身よりはおこなひて佛果をえまほしきと也。
○太夫どのの——道長の中關白殿につくまはせ給ふ事也。
○此のちの御ありさま——道長公の後々の御榮花を后宮御存命にて見給はゞと也。此草紙は清少の老後、后宮薨去ののちかけるにや。
○ことわりとおぼしめされ——かく威勢ある御堂殿も道隆公にはつくばひ給へる事を、后宮おぼしめしあはせば我かく感じおもひし事はことわりと思召されんと也。

百十五

九月ばかり、夜一夜降り明したる雨の、今朝は止みて朝日の花やかにさしたるに、前栽の菊の露こぼるばかり濡れかゝりたるもいとをかし。透垣、羅文、薄などの上にかいたる蜘蛛の巢のこぼれ残りて、所々に絲も絶えさまに雨のかゝりたるが、白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじう哀にをかしけれ。少し日たけぬれば萩などのいと重げなりつるに、露のおつるに枝のうち動きて、人も手觸れぬに、ふと上様へ

さま也
六イニナシ可然
七露にふしたる
がこぼれたれば
おきあがりし也
八人の心千差萬
別なれば也

一是より亦別段
也
二菊の若はへ初
春にもある物也
三清少のうた也
四助字也
五子供は歌の心
もなければ也、
是も耳無の心也

上りたるいみじういとをかしといひたる、異人の心地は露をかしからしと思ふこそ又をかしけれ。

○絲もたえさまに雨のかゝり——蜘蛛の絲のきれぬべく雨のかゝりたる也。
○いとおもげなりつるに——イ本にの字なし。其本にしたがはゞ、いとおもげなりつる露のおつるにとつゞけて見るべし。露の風情まさりて面白きにや。

百十六

七日の若菜を、人の六日にもて騒き取り散らしなどするに、見も知らぬ草を、子どものもてきたるを、「何とかこれをばいふ」といへど、とみにもいはず、「いざ」など、これかれ見合はせて、「耳無草となんいふ」といふ者のあれば、「むべなりけり、聞かぬ顔なるは」など笑ふに、又をかしげなる菊の生ひたるをもて來たれば、つめどなほみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊も交れり。

○よみにも——頓の字也。やがてこたへもせぬ也。
○いざなどこれかれ——引率也。いざ見給へなど人々をさそひ催す心也。
○むべ成りけり——彼の子供かぬかほなるは尤もなり。耳無草なればと也。
○つめど猶歌——此五文字草を摘むに、人をつみおどろかす心をそへたり。つ

一是より別段也
 二定考也
 三釋奠、孔子をまつる事也
 四孔子也
 五聰明也、釋奠の酢也
 六一條院と后宮也

めどもきかぬがほに答へぬはつれなし。あまたある中には聞くといふ草もあるものをと也。菊を添へて也。

百十七

二月官のつかさに定考といふことするは、何事にあらん。釋奠もいかならん。孔子などは掛け奉りてする事なるべし。聰明とて、うへにも宮にもあやしきものなど、かはらけに盛りて参らする。

○二月くわんのつかさのからぢやう——是二月列見の事なるべし。列見定考、始終の公事なればかやうにいへるにや。江次第釋奠の所にも當二列見定考一日上臈上卿参二釋奠二例天曆二八十一云云。くわんのつかさとは、太政官の官人を云ふ也。百寮訓要云、太政官といふは眞實朝家の政を成敗する所也。今官の廳など申すも此儀也。大臣公卿政務を成敗の人は太政官の被官也。辨、少納言、外記史など申す儀式官も皆太政官の内の官也。列見とは公事根源云、公卿辨少納言外記史など参りて太政官にて行へる公事也。六位以下の藝能ある者を撰びて、式部兵部の二省より率してまゐれるを、上卿それを召しよせて器量容儀を見る心也。朝所并宴穩の座につきて儀式あり。委しき事は定考の所にしるし侍るべし。中略。定考とは公事根源云、是は昔六位以下の加階する人は、彼藝能

行跡恪勤を撰びて、官爵を給ひける也。上卿、官の東の廊の座に着きて事を
 行ふ。次に朝所につきて三献の儀式あり。次に宴穩の座につく。各三献あり。大かた二月の列見におなじ。式兵の二省より、諸司の輩の上日を選成する事を列見といふ。それを書きあつめて奏するを、擬階奏といふ。此人々を撰び出でて定め侍るを定考とは申し侍る也。定考と文字には書きて侍れども、からぢやうとよみ侍るが口傳にて侍る也。選叙令に委事はのせたり。其儀などは次第に見えたり。

○くじなどはかけ奉りて——釋奠に孔子の像を掛けてまつるにやと也。釋奠は二月上の丁の日なれば、おなじ二月の中に公事をとりあはせていふなるべし。公事根源云、釋奠、是は二たび二月と八月とにあり。上の丁の日必ずおこなはる。大學寮にて孔子並に十哲の影をまつらる。上卿辨少納言などまゐりて廟拜にたち、宴穩の坐に着く、文章博士題を出す。孝經禮記毛詩尙書論語周易左傳年にめぐりて用ゐる、明くる日釋奠の酢をまゐらす。藏人持ちて朝餉の前に進む。藏人又一人御手水の間のかたの簀子にて、あれは何ものぞといふ。藏人答へて、ふんやのつかさの奉れる昨日の釋奠の酢ぞと文字を長くいひて、高く捧げて簾中に入る也。中下略。禮記玉制云、釋菜奠幣禮二先師。月令仲春將釋奠之一猶延喜式江次第等委。仁平三年八月台記云、先聖先師九哲像巨勢金岡所寄云。

一行成卿也
 二使なるべし
 三繪をつまみたるやうなるもの也
 四むかしはかやうの物を花につけて送りし也
 五清少への送り物也
 六餅餠なり、列見の時するもの也、肴也
 七是も行成のみづからの給ふたはぶれ也
 八后宮へ也
 九后宮御詞

○そうめいとて——イ本そうめうとて、聰明これかの公事根源に、明くる日釋奠の昨をまるらするとある事也。江次第五釋奠の所に云寮官居聰明以三折敷高坏等一羞二公卿。註聰明者昨也。餅白黒、梁飯栗黄乾棗也、昨字彙云音祚祭福肉也。○あやしき物などかはらけに——かの餅梁飯などなれば也。

百十八

「頭辨の御許より」とて、主殿司、繪などやうなる物を、白き色紙に包みて、梅の花のいみじく咲きたるにつけてもて来る、繪にやあらんと急ぎ取り入れて見れば、餅餠といふ物を二つ並べて包みたるなりはり。添へたるたて文に、花文のやうに書き「進上餅餠一包、例によりて進上如件。少納言殿に」とて、月日書きて、任那の成行とて、奥に「此をのこは自ら参らんとするを、晝はかたち悪しとて参らぬ也」といみじくをかしげに書き給ひたり。御前に参りて御覽せさせれば、「めでたくも書かれたるかな。をかしようしたり」など譽めさせ給ひて、御文は取らせ給ひつ。「返事はいかゞすべからん。此餅餠もてくるには、物などや取らすらん。知りたる人もがな」といふを聞き召して、「惟仲が聲しつる。呼びて問へ」との給はすれば、はしに出て「左大辨に物聞えん」と侍して言はすれば、「いとよくうるはしうて來たり。」あらず、私事也。もし此辨、少納言などのもにかゝる物もてきたる下部などには、

一〇べいだんのつつまやりしを也
 二清少のひまりごに申す也
 三后宮の間かせ給ひて也
 四惟仲の官をよぶ也
 五惟仲、后宮のめしかと思ひてまゐりしさま也
 六清少詞、后宮のめしにはあらず也
 七餅餠也
 八祿なごつかはす事あるか也
 九惟仲の詞也
 一〇清少の詞いかでさやうの事あらんご答ふる也
 一〇清少の返事の詞也
 一〇行成の清少へ也
 一〇三行成のみづからの給ふ詞也
 一〇三清少の出合ひ

する事やある」と問へば、「さる事も侍らず。只とどめてくひ侍る。何しに問はせ給ふ。もし上官のうちにて、得させ給へるか」といへば、「いかゞは」といらふ。只返しをいみじうあかき薄様に「自らもてまうてこぬ下部は、いとれいたうなりとなん見ゆる」とて、めでたき紅梅につけて奉るを、すなはちおはしまして「下部さぶらふ」と給のへば、出でたるに、「さやうの物ぞ歌よみしておこせ給へると思ひつるに、美々しくも言ひたりつる哉。女少し我はと思ひたるは、歌詠みがましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ。まろなどに、さる事はん人は、かへりて無心ならんかし」との給ふ。則光、なりやすなど笑ひて止みにし事を、殿の前に人々と多かりけるに、語り申し給ひければ、「いとよくいひたる」となん給はせし」と人の語りし。是こそ見苦しき我讀めどもなりかし。

○へいだんといふ物を——餅餠、裏餅の中に鶉鴨などの子雜菜等をいれ、煮合はせて四方にきりたる物也。一名餅賤ともいふと和名にあり。是二月の列見にも八月の定考にも上卿以下の公卿諸臣等に三献或は四献ののちする物なり。江次第列見の所に四献餅餠云云。定考にも廳事朝所宴座穩座等皆用三列見儀」と江次第第八に見えたり。
 ○けもんのやうに書きて——花文綾、花文紗のたぐひのやうに、うるはしくかゝれし也。行成卿は三跡の一人也。

たる也
 三行成詞
 三五さまの風流
 のものなれば也
 云歌はよまでか
 くいひしをほめ
 給ふ也
 毛世上の我はが
 ほする女はさ也
 云歌よみがまし
 からぬが語らひ
 よき也
 云無心也
 云是は清少事を
 道隆へ行成の語
 り給ひし事を云
 ふ也
 三道隆公なるべ
 し

○みまなのなりゆき——任那成行、行成卿の作り名なるべし。
 ○これなか——平惟仲權中納言時武息。左中辨。中宮大夫。大宰權帥中納言從
 二位公卿補任。

○此辨少納言などのもとに——行成より我得たるをまぎらはし隠して問ふ詞
 也。列見定考小辨や少納言などに粉熟餅炭等をすうる事あれば辨少納言のもと
 にと云ふ也。

○上官のうちにて——じやう官は太政官の外記史などをいふ也。其へいだんは
 もし太政官の官人などより得給へるか也。

○みづからもてまうでこぬ下部はいとれいたう——前に行成の此男はみづから
 參らんとするをといへるを請けて自持ちて來ぬ下部は非道ぞと也。行成のみづ
 からおはせぬをとがめし詞也。れいたうは戻道にや道理に背きもとりし心也。

○下部さぶらふ——彼清少のみづからもてこぬ下部はといへるに付けて行成の
 下部侍ふとの給ふ也。

○さやらの物ぞ——赤き薄様に書いて紅梅に付けたる物は歌よみてぞおこせた
 ると思ひしにと也

○のりみつ——前に左衛門尉則光とて清少の歌よみしかば更に見侍らじとてあ
 ふぎ返したる人也。

○なりやす——誰とも不知、是も歌を嫌へる人にや。

○笑ひてやみにし事を——清少に歌讀み懸けられて、則光なども恥ぢ笑ひて止
 みにしに、行成にはさはならで、此詞をいひおこせしと、關白殿の前にて行成
 のほめ語り給ふ也。

○これこそ見ぐるしき——人のほめ給ひし事を此草紙にかく事、見苦しき自讃
 と也

百十九

一中官職也
 二六位のみなら
 でも也
 三正體もなき事
 を也
 四何ぞこごがめ
 し詞也
 五からぎぬの短
 きをいはんとて
 也
 六からぎぬとい
 ふも尤もといは
 んため也
 七句
 ハイラへのはか

などてつかさ得はじめたる六位筋に、職の御曹司のたつみの隅の築土の板をせしぞ。
 更に西東をもせよかし。又五位もせよかし——などいふ事を言ひ出でて、「あぢきな
 き事どもを、衣などにすぐる名どもを付けん、いとあやし。衣の名に、細長を
 ばさも云ひつべし。なぞ汗衫は、尻長と云へかし。をの童の着るやうに、なぞ唐衣
 は、短き衣とこそいはれ。されどそれは、唐の人の着るものなれば。うへの衣の
 袴、さいふべし。下襲もよし。又、大口、長さよりは口廣ければ。袴いとあぢき
 なし。指貫もなぞ。足ぎぬ、もしはさやうの物は、足袋などもいへかし——など、よ
 ろづの事をいひのしるを、いであなかしがまし。今はいはし。寝給ひね」といふ
 いらへに、夜居の僧のいとわろからん。夜一夜こそ猶の給はめ」と、にくしと思

ま可用敷
九句
一〇何のゆゑにいふ名ぞあぢきなし也
二足をいゝ、物なれば也
三清少詞也、いでは發語の詞也
三寢給はんは悪しからん也、あまりの事にいふ詞也。

ひたる聲こゑさまにて言いひ出いでたりしこそ、をかしかりしに添そへて驚おどろかれにしか。
○などてつかさ——是より清少ごとき女房などのいひしろひしそごるごとをか
けり。

○六位しやくに——新藏人の笏しやくに此築地の板をせし事清少の在世の比有りにや。つかさえしはじめとは、任官の初めをいふ也。六位は藏人なるべし。

○ほそながをさもいひつべし——弄花抄云、ほそなが貴女の着る物也。一勘幼かんわき上うへ藤の上つたのうへにのきる物也。其形細く長ければ其名さもいふべしと也。

○かざみはしりながと——花鳥云、かざみは童女のきる物也。西宮抄、汗あせ衫かみカザミ尻長き物なるべし。

○からぎぬはみじかききぬと——和名に背かた子こ形かたち如ごとく半臂はんうで無なし腰こし云云。腰なきゆゑにみじかききぬとこそいはめと也。

○うへのきぬのはかま——表袴うへはかまの事也。桃華藥葉云、表袴中少將より大臣大将に至る迄も着す。若年の時は白き浮線綾うきせん、窠くさ敷しの浮文を用ゐる。裏は紅打平絹也下略。

○おほくち——桃華藥葉云、赤大口あかおほくち生なま平絹へいけん紅べにに染めて用ゐる也。濃こき装束には、濃平絹也。名目抄云、大口は生、平絹、幼年こども日白ひら、長年ながね紅也。

百二十

一道隆公の忌日也
二清範、前に註す
三講師
四説法也
五法軍果てて也
六齊信卿、前に註す
七期
八句
九后宮の御座にまゐりて此咏吟の事はんさて也
一〇后宮出御也
一一后宮の御詞也
一二清少詞、齊信卿の吟の感ある事を申し上あげんさて也
一三后宮の御詞也

故殿こどのの御ために、月毎つきごとの十日、御經ごきやう佛ほとけ供養くやうせさせ給ひしを、九月十日しゅうがつじふにち職しやくの御曹司ごそうしにてせさせ給ふ。上達部かみかたべ、殿上人どのじやうじんいと多おほかり。清範せいはん講師こうしにて説とく事ことどもいと悲かなしければ、ことに物の哀深あはれかるまじき若わかき人も皆みな泣なくめり。果みてて酒飲さけのみみ、詩誦しじゆじなどするに、頭中將かみちゆうじやう齊信せいしんの君きみ、月秋つきあきと期きして、身みいづくにか」といふ事をうち出し給へりしかば、いみじうめでたし。いかでかは思おもひ出いで給ひけん。おはします所に分わかけ参まゐる程ほどに、立ち出たでさせ給ひて、「めでたしな。いみじう興きやうの事に言いひたる事にこそあれ」との給たまはすれば、「それを啓けいしにて、物も見みさして参まゐり侍まりつる也。猶なほいとめでたくこそ思おもひ侍まれ」と聞きえさすれば、「ましてさ覺おぼゆらん」と仰おほせらるる。

○故殿の御ため——入道にゅうだう關白せみむら道隆みちたか公こう薨こじて後の事也。長徳元年四月十日に薨の由榮花物語にあり。

○月と秋ときして——朗詠らうぎやう菅三品すがさんしんの句也、南樓なんろう翫くわん月つき人ひと月つき與よ秋あき期き而して身み何なに去さ。文粹十四願文の句也。

○いみじうけうの事にいひ——興ある事と也。彼詠吟の事をの給ふ也。又希有の事にもあるべし。いづれも大切の事と也。
○ましてさおぼゆらん——齊信清少に心ある中なれば、清少は一入齊信をめで

一是れより齊信と清少の中のこと
 二齊信の詞
 三八雲云、うるはしく也
 四清少の思ひはなれしにはあらぬ也
 五得意也、いひかたらふ中の事也
 六清少の詞也
 七逢ふ事はかたからぬ也
 八齊信をほむるを誰も役としてほむるに也
 九句
 〇實事はなくて只に心ばかり通はし給へ也
 二齊信也
 三齊信の詞也、夫婦なる人他人よりほむるもあ

たくおぼゆらんと御たはぶれの詞也。

わざと呼びもいで、自らあふ所にては、「などかまろを、まほに近くは語らひ給はぬ。さすがにくしなど思ひたるさまにはあらずと知りたるをいとあやしくなん、さばかり年頃になりぬる得意の疎くてやむはなし。殿上などに明暮なき折もあらば、何事をか思ひ出にせん」との給へば、「さら也。難かるべき事にもあらぬを、さもあらんのちには、え譽め奉らざらんが口惜しき也。うへの御前などにて、役とあつまりて譽め聞ゆるに、いかでか。只思せかし。傍痛く心の鬼出て来て、いひにくく侍りなん物を」と云へば、笑ひて「など、さる人しも、よそ目より外に譽むる類多かり」との給ふ。「それがにくからずはこそあらめ。男も女も、け近き人を方引き思ふ人の、いさゝか悪しき事を云へば、腹立ちなどするがわびしう覺ゆるなり」と云へば、「たのもしげなの事や」との給ふもをかし。

〇わざとよびもいでおのづから——齊信の清少を態とよびいでても、又自然あふ所などにてうらみ給ふ事を云ふ也。
 〇殿上などにあけくれなき——今齊信の殿上人にて清少もかく度々まみゆる時逢ひかたらはで、昇進の後など殿上にもあらざらん時は何を思ひ出にせん也。齊信當官頭中將也。
 〇さら也——勿論の事と也。

一是より行成の中のものたり也
 二禁中の御物忌に籠らん也

れは、逢ひ見んのちも疎慮あるまじき事也
 三清少詞
 四方引也、蟲負の心也
 五我がおもふ人を人の少しもそしるをはらたつを見れば清少は侘しき也
 六齊信の詞

〇さもあらんのちには——若し夫婦となりては、あたら齊信をえほめまらすまじきと也。
 〇いかでか——句をきるべし。人のほむる時も夫婦なる身になりては、いかでかほめまらせんと也。
 〇心のおに出で来ていひにくく——ほめたき折も心に夫婦とおもふを遠慮出で来ていひにくからんと也。心の鬼とは心のあやまりを我と恥ぢおもふやうの心也。
 〇それがにくからずはこそあらめ——夫婦なる人をほむるがにくきゆゑ我は遠慮ありと也。
 〇たのもしげなの事や——思ふ人を悪くいふを腹立つ人こそ頼もしけれ。それを侘しとはたのもしげなしと也。畢竟清少の逢ふまじき氣色なれば、頼むかたなき心をこめていへるなるべし。

百二十一

頭の辨の職に参り給ひて、物語などし給ふに、夜いと更けぬ。「明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなば悪しかりなん」とて参り給ひぬ、つとめて、藏人所の紙屋紙引き重ねて「後のあしたは残り多かる心地なんする。夜を通して、昔物語も

三丑の時よりまへに禁中へまゐらん心の心也
 四通夜の心也
 五鶏にさそはれて早く別れ出でし心也
 六裏表和名、文のうらおもてに也
 七清少の返事也
 八孟嘗君也、歸さを急ぎてまごならぬ鳥をなかせ給へるにま也
 九又行成卿よりの文也
 一〇孟嘗が客三千人やうくのがれさりし也
 一一猶清少に逢はん心の事也
 一二清少のうた也
 一三たはからるゝ事は侍らじとの心也
 一四又行成より也

聞え明かさんとせしを鶏の聲に催されて」といといみじう清げに、裏表に事多く書き給へるいとめでたし。御返りに、「いと夜深く侍りける鳥の聲は孟嘗君のにや」と聞えたれば、立ち歸り、「孟嘗君の鶏は、函谷關を聞きて、三千の客わづかに去れり」といふは、逢坂の關の事なり」とあれば、
 「夜をこめて鳥の空寝ははかるとも世に逢坂の關は許さじ」
 心かしくき關守待るめり」と聞ゆ。立ち返り、
 「逢坂は人越えやすき關なれば鳥も啼かねとあけて待つとか」
 とありし文どもを、はじめのは、僧都の君の額をさへつきて取り給ひてき。のちのちのは御前にて。

○しきにまゐり給ひて——行成中宮職にて清少とかたらひ給ひし也
 ○藏人所のかうやがみ——藏人所にある紙屋紙也。行成今藏人頭なれば、此所の紙を清少への後朝の文に用ゐられしにや。藏人所は校書殿にあり。拾芥云、恒例御物納藏人所云々。紙屋紙とは弄花抄云、紙屋の人初めていろ紙をすき出せる也云々。北野のかみや川にてすきし紙也。
 ○まうさうくん——孟嘗君が函谷關をこえし事也。玄旨百人一首抄云、孟嘗君といひし人秦王にとられしが、夜にまぎれてのがれし時函谷の關鶏の鳴かぬ限りは人を通さず。孟嘗君が三千の客の中に鶏明とて鶏のまねをよくする者まねをしければ、誠の鳥も鳴きて夜深きに關を明けて通しけり云々。猶史記列傳十

一五行成のうた也
 二鳥の聲に催されての文也
 三隆縁也、前に註す
 四拜みて也、懇望のさま也、行成の筆を執して也
 五后宮也

一清少のまけて返歌せざりし也、實は清少の

をしければ、誠の鳥も鳴きて夜深きに關を明けて通しけり云々。猶史記列傳十
 五に委し。
 ○夜をこめて鳥の歌——後拾遺集に入る。玄旨云、はかるとはたばかる也。相坂の關はゆるさじとは逢ふ事をゆるさじと也。惣の心は明か也。扱て函谷の關と相坂とをやすらかに一首によみ出でける事上手のしわざ也。又よに逢坂の上にといふ詞は助字也。逍遊軒云、夜深きに偽の鳥をたばかり給ふとも、此逢坂は函谷のごとくにゆるすまじきと也。彼の行成の夜深く歸りて、心淺きやうなるをまぎらはさんとて、鳥のこゑに催されてと偽りの給へるを、さやうの偽にたばかられては逢ひ侍らじとの心をいへる也。
 ○あふさかは人こえやすき歌——此返歌の心は、清少の偽の鳥には逢坂の關をゆるさじといへるをうけて、鳥のそらねをはかるまでもなし。唯此關はあけてまつぞといふ事にやとなり。清少に詞じちをとられていひやらんかたなきに、まげていひなしたる歌也。すでに逢ひ語らふ申なれば、むづかしき詞とがめにとりあはぬ心なるべし。
 ○のちくは——まうさう君の鶏はとの文と、逢坂は人こえやすきの歌のと也。さて「逢坂の歌は詠みへされて、返しもせずなりにたる、いとわろし」と笑はせ給ふ。「さて其文は殿上人皆見てしは」との給へば、「まことに思しけりとは、これにて

うたをほめて態
 この給ふ詞也
 二是より行成の
 清少の文の事を
 いへる詞也
 三清少の答也
 四名言秀歌など
 を人に聞かせぬ
 はかひなしと也
 五我見ぐるしき
 手跡を人に見せ
 給ふ恨みに態と
 かくいふ也
 六彼人々に見せ
 し事を遠慮なき
 事と清少のかこ
 たんと思ひしに
 也
 七清少の詞也、
 これは何事ぞよ
 く見せ給ひしと
 悦びこそせめさ
 也
 八行成の詞也
 九人にみせは也
 一〇前に註す
 一一經房の詞也、
 清少にの給ふ也

こそ知りぬれ。めでたき事など人のいひ傳へぬは、甲斐なきわざぞかし。又見苦しければ、御文はいみじく隠して、人に露見せ侍らぬ。心ざしのほどを比ぶるに、ひとしくこそは」といへば、「かう物思ひ知りていふこそ猶人々には似ず思へど、思ひ限なく悪しうしたり」など、例の女のやうには「はんとこそ思ひつるに」とて、いみじう笑ひ給ふ。「こはなぞ、よろこびをこそ聞えぬ」といふ。「まろが文を隠し給ひける。又、猶うれしき事也。いかに心憂くつらからまし。今よりも猶頼み聞えん」などの給ひて、後に、經房の中將、「頭辨はいみじう譽め給ふとは知りたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。思ふ人々の賞めらるゝはいみじく嬉しく」など、まめやかにの給ふもをかし。「嬉しき事も二つにてこそ。かの譽め給ふなるに、又思ふ人の中に侍りけるを」などいへば、「それは珍しう、今の事のやうにも悦び給ふかな」との給ふ。

○殿上人みな見てしは——清少のまうさうくんのにやといひ、夜をこめてとよみし文どもを感にたへずして人々に行成の見せ給ふと也。
 ○まことにおぼしけりとは——行成の我を眞實におぼすとは、此文を人々に見せ給ひしにて知りたると也。是我見ぐるしき手跡を人に見せられしを恥ぢ恨むる心を態と裏を云ふ也。
 ○御文はいみじくかくして——我文を人に見せ給へるが、満足ならぬ事をいは

三五嘗君のこたへ夜をこめての歌の事など也
 三三清少の詞也、うれしき事二つありと也
 一四句
 一五らんイ
 一六つねふさの詞也
 一七事あたらしく今始めたるやうに也

んとて、かへりて行成の文見ぐるしければ、人には見せぬと、是もうらをいふ詞也。前にはじめの文は僧都にまゐらせ、のちくのは后宮へ見せ申せし上にかくいへるにて、裏を云ふと知るべし。
 ○こゝろざしのほどをくらぶるに——行成の人に見せ給ふも我をおぼす故也。我が人に見せぬも行成の御ためなれば、心ざしはひとつぞと也。是もたはぶれ也。
 ○いみじくうれしくなだまめやかにの給ふ——思ふ人にかくほめられて嬉しく思ふらんと眞實にの給ふと也。これも彼の清少の行成にいひし事は、皆うらをいひたるたはぶれとしらで、經房のいへるとの心也。まめやかといふに心を付くべし。
 ○かのほめ給ふなるに——只ほめ給ふが嬉しきに、又おもふ人々の中にてほめらるゝは二つ嬉しきと也。是も實に嬉しきにはあらずたはぶれ也。
 ○それはめづらしういまの事のやうに——是も經房清少の戲としらで、事あたらしく嬉しき事二つと悦ぶと不審していへる詞也。

百二十二

五月ばかりに、月もなくいと暗き夜「女房やさぶらひ給ふ」と聲々していへば「出

一是より別の事

也
 二后宮の御こと
 三清少也
 四こればたれぞ
 五かの女房をよ
 六殿上人たちの
 さま也
 六管竹和名
 七清少の詞也
 八竹をいれし人
 九たれぞもしら
 ず
 一〇行成の詞也
 一一仁壽殿のまへ
 のくれたけなる
 べし
 一二后宮の御かた
 へまゐりて也
 一三清少のこのき
 みさいひし事也
 一四清少はたれに
 習ひて此名をし
 りたるか也
 一五清少の詞也
 一六イめかし

てて見よ。例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出でて、「こは誰ぞ。おどろく、しうきはやかなるは」といふに、物も言はで、御簾をもたげて、そよると差し入るゝは呉竹の枝なりけり。「おい、この君にこそ」と言ひたるを聞きて、「いざや、これ殿上に行きて語らん」とて、中將、新中將、六位なども有りけるはいぬ。頭辨はとまり給ひて、「怪しくいぬる者どもかな。御前の竹を折りて歌詠まんとしつるを職に参りて、同じくは女房など呼び出でてを」と言ひて來つるを、呉竹の名をいとくいはれて、いぬるこそをかしけれ。誰が教を知りて、人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ」などの給へば、「竹の名とも知らぬ物を、なまねたしと思しつらん」と言へば、「まことぞえ知らじ」などの給ふ。まめごとなど言ひ合はせて給へるに、「此君と稱す」といふ詩を誦じて、又集り來れば、「殿上にていひ期しつる本意もなくしては、など歸り給ひぬるぞ。いとあやしくこそありつれ」との給へば、「さる事には何のいらへをかせん。いとなか／＼ならん。殿上にもいひのゝしつれば、上も聞き召して興せさせ給ひつる」と語る。辨諸共に返す／＼同じ事を誦じて、いとをかしがれば、人々いでて見る。とり／＼に物どもいひ交はして歸るとて、猶同じ事を諸聲に誦じて、左衛門の陣に入るまで聞ゆ。つとめて、いとく少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、此事を啓したれば、しもなるを召して「さる事やありし」と問はせ給へば、「知らず。何とも思はで云ひ出で侍りしを、行

一七清少はよもえ
 一八しらし行成の
 詞也
 一九中將、新中將
 などの詠吟也
 二〇行成の詞也
 二一期也、約束の
 心也
 二二殿上人の詞也
 二三かやうの名言に
 はなまじひの返
 答はせざらんが
 まさらんとの心
 也
 二四一條院也
 二五行成也
 二六此君としよう
 すの句也
 二七あまり朗詠す
 れは也
 二八建春門也
 二九聖朝也
 三〇禁中の女房也
 三一清少の職に侍
 らぬをめて后
 宮のとはせ給ふ
 也
 三二清少の答也

成の朝臣の取りなしたるにや侍らん」と申せば、「取りなすとても」と打ち笑ませ給へり。誰が事も殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さいはるゝ人を喜ばせ給ふもをかし。
 ○おどろくしうきはやか——驚かるゝやうにきはをたてゝきつと人をよぶ心也。
 ○おいこのきみにこそ——おいはあゝなどいふ詞也。此君は竹の名也。晉の王子猷空宅の中に寄居して竹を植ゑて嘯詠して曰、何可一日無此君。この故事にて云ふ也。
 ○いさやこれ殿上に行きて——殿上人達此竹の歌よまんとてきたりしかど、清少に此君といふ詞を先せられてにげかへるといへる詞也。
 ○よび出でてを——女房などよび出でて諸ともによまんとこのころ也。
 ○竹の名ともしらぬものを——清少は竹の名ともしらで、殿上人なれば此きみといひし物をと也
 ○此君としようすと——朗詠藤篤茂、晉騎兵參軍王子猷種而稱此君。これ本朝文粹十一に修竹冬青といふ事を賦したる詩序の詞也。
 ○殿上にていひきしつる事のほいもなくしては——后宮の女房などと歌よまむといひ期したる本意もとげずして何とて歸り給ひしぞと也。

三是より后宮の御心ほせをいふ也
三三やうにほめいはるゝ人を也

一禁中也
二圓融院にめしつかへし人也
三一條院の御めのこの上し後拾遺集の詞書に見えたり
四椎の葉のしろきにや
五藤三位のかたの女房の詞也
六蔀をもあけぬも也
七藤三位の女房の詞也
八なゆしの上なきにかの木の枝の文を也

○御文まゐらせたるにこの事をけいしたれば——少納言命婦みかどの御文を后宮へまゐらするとして此清少の名言を殿上人のほむる事を申上げしとなり。
○とりなすとも——たとひ取りなしていふとも一向に跡なき事はかくほめ草にはせじとの心也。

百二十三

圓融院の御果ての年、皆人御服脱ぎなどして、哀なる事を公より始めて、院の人も「花の衣に」などいひけむ世の御事など思ひ出づるに、雨いたる降る日、藤三位の局に、義蟲のやうなる童の大きな木の白きに、たて文をつけて「これ奉らん」といひければ「いづこよりぞ。今日明日御物忌なれば、御蔀も参らぬぞ」とて、しもは立てたる蔀のかみより取り入れて「さなんとは聞かせ奉らず。物忌なれば得見ず」とてかみについさして置きたるに、つとめて手洗ひて、其巻数とこひて、伏し拜みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと見てあけて行けば、老法師のいみじけなるが手にて、
これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖と書きたり。あさましくねたかりけるわざかな。誰がしたるにかあらん。仁和寺の僧正のにやと思へど、よもかゝる事の給はじ。猶誰ならん。藤大納言ぞ、かの院の

九藤三位也
一〇歌はしらで祈念の巻数とおもふ也
一一厚肥也、あつき也
一二一條院の態とせさせ給ひし也
一三一條院御うた
一四藤三位の心也
一五物いみゆゑ早々まゐりていはねを心もさなきも也
一六陰陽師なごの勤へいひたる也

別當におはせしかば、其し給へる事なめり。これを上の御前、宮などに、とう聞しめさせばやと思ふに、いと心もとなけれど、猶恐ろしういひたる物忌をし果てむと念じ暮らして、またつとめて、藤大納言の御許に此御返しをしてさし置かせたれば、すなはち又返事しておかせ給へりけり。
○ゑんゆうゐんの御はての——圓融院、一條院の御父帝也。正暦二年二月十三日に崩卅三御はてとは御一周忌の事也。正暦三年二月の事也。
○みな人御ぶくぬき——御一周忌過ぎて服衣をぬぐ也。除服の祓とて河原に出でて禊事をなす事などあり。
○花の衣になど——仁明天皇の御果過ぎて人々叙爵などせし時、遍照「皆人は花の衣に成りぬ也昔の袂よかわきだにせよ。」古今にあり。又榮花物語四に、かくて月日も過ぎもて行きて、正暦三年に成りぬ。哀にはかなき世になん、二月には故院の御果あるべきなれば、天下急ぎたり、御はてなどせさせ給ひつ。世の中のうすにびなどはてて花の袂になりぬるもいと物のはへあるさま也云々。
○みのむしのやうなるわらは——雨ふりて笠蓑きたるさま也。誰方よりともしらすまじきとてかやうにせし也。
○さなんとはきかせ奉らず——かやうの使有りと藤三位殿には申さずと也。物忌なれば遠慮して也。
○くるみいろ——源氏にも、こまの胡桃色の紙とあり。表は香色に裏は白き

一藤三位の申上
 ぐる也
 二后宮也
 三帝の御しわざ
 を知りながらし
 らぬさま也
 四后宮の詞也
 五椎柴のかたの
 手跡の事也
 六藤三位詞、さ
 てはこれほ也
 七物すきなる也
 八うたがひたる

紙也。
 ○これをだにかたみと歌——後拾遺の歌也。詞書この草紙と同心也。これをだ
 にとは、服衣をなりとも也。しひしばの袖とは八雲御抄に四位の異名云云。
 服をだに故院の形見と思召すに、藤三位は服ぬぎ加階せしよと也。藤三位、四
 位より加階せしなるべし。山僧のせしやうに態と都にはと也。

○仁和寺の僧正——榮花物語三云、仁和寺の僧正と聞ゆるは、土御門の源氏の
 おとこの御はらからにおはす、にわじのみことときこえける御子におはす云云。
 寛朝僧正也。式部卿敦實親王の三男雅實公の御弟也。

○藤大納言——圓融院の別當ときこゆ。いまだ誰とも勘へ侍らず。
 それを二つながら取りて急ぎ参りて、「かゝる事なん侍りし」と上もおはします御前
 にて語り申し給ふを、宮はいとつれなく御覽して、「藤大納言の手のさまにはあら
 で、法師にこそあめれ」との給はすれば、「さはこは誰がしわざにか。すきくしき
 上達部、僧綱などは誰かはある。それにやかれにや」などおぼめきゆかしがり給ふ

に、うへ、「此わたりに見えしにこそは、いとよく似たンめれ」と打ちほゝあませ給
 ひて、今一すぢ御厨子のもとなりけるを、取り出でさせ給へれば、「いであな心う。
 これおぼされよ。あな頭痛や。いかで聞き侍らん」と、たゞ責めに責め申して恨み
 聞えて笑ひ給ふに、やうく仰せられ出でて、「御使にいきたりける鬼童は、臺盤所の

心也
 九帝也
 一〇一つさいふ心
 也
 二藤三位詞
 三イおほせられ
 よ
 三帝のしわざも
 也
 四刀自也、女官
 也
 五供也
 六打也
 七山法師の巻數
 と思ひし故也
 八藤三位のつほ
 ね也
 九みのむしのや
 うにて來し童也
 一〇わらはが體也
 無知くさわら
 ひる也
 三院別當也

刀自といふ者の供なりけるを、小兵衛が語らひ出したるにやありけん」など仰せら
 れれば、宮も笑はせ給ふを、引き揺がし奉りて、「などかくはからせおはします。猶
 疑もなく手を打ち洗ひて、伏し拜み侍りし事よ」と笑ひねたがり給へるさまも、
 いと誇りに愛敬づきてをかし。さて、上の臺盤所にも笑ひのゝしりて、同におり
 て、此の童尋ね出でて、文取り入れし人に見すれば「それこそ侍るめれ」といふ。
 「誰が文を誰が取らせしぞ」と云へば、しれなくと打ち笑みて、ともかくも言はで
 走りにつけり。藤大納言後に聞きて、笑ひ興じ給ひけり。

○それをふたつながら——椎柴の袖のうたと藤大納言の返歌と二つをもちて、
 藤三位参内する也。

○僧がう——僧綱也。僧正、僧都、律師などをいふ也。

○此わたりに見えしにこそはいとよくにためれ——其老法師の歌は帝の御かた
 にあるうたに似たるとて、御厨子のもとなる御詠草を取りいでさせ給ふ也。

○これおぼされよ——是いかなる御事ぞ、おぼしめして御覽あれと也。猶誰が
 しわざとしられぬゆゑ也。

○おにわらはは——みのむしのやうなると有りし首尾也。鬼童丸とて古ありし
 也。

○小兵衛——后宮の女房。前にありし人也。

○ひきゆるがし奉りて——后宮を藤三位のかこちまゐらせらるゝさま也。帝をかこち申さんは憚りあれば也。
 ○いとほこりにあいやうづき——御乳母なればほこれるものから、さすがに愛敬ある也。
 ○だいはん所にも——禁中の臺盤所は女房の侍ひ也。彼刀自がわらはを尋ね出でむため也。
 ○文とりいれし人に——かの使のわらはは、是かとして其文うけとりし藤三位の女房に見すれば也。

百二十四

つれづれなるもの 所ざりたる物忌。馬降りぬ雙六。除目につかさ得ぬ人の家。雨うち降りたるはましてつれづれなり。
 ○ところさりたる物いみ——ふかくつゝしむ時、家をさり外にて物忌する也。
 ○むまおりぬ双六——馬は賽の事也。晋書袁彦道が傳に、投馬絶叫とあり。是博局にむかひての事也。むまおりぬは双六に思ふ目のおりぬ也。

百二十五

一葉子也
 ニイに

つれづれ慰むる物 物語。碁。雙六。三四ばかりなる稚兒の物をかしういふ。又いと小き稚兒の物語したるが、笑みなどしたる。くだ物。男のうちさるがひ、物よくいふが来るは物忌なれど入れつかし。
 ○をとこのうちさるがひ——前にさるがふ事とあるにおなじ。猿樂とて狂言などいひたはるゝ也。
 ○物いみなれど——つゝしむ折なれど興ある人なればいるゝと也。

百二十六

取り所なきもの 容貌憎げに心あしき人。御衣編糲のぬれたる。これいみじうわろき事いひたると、萬の人憎むなる事とて、今止むべきにもあらず。又、門燎の火筋といふ事、などてか。世になき事ならねば、皆人知りたらん。げに書きいで人の見るべき事にはあらねど、此草紙を見るべき物と思はざりしかば、怪しき事をも、にくき事をも、只思はん事の限りを書かんとて有りし也。

○みぞひめ——編糲、或説云、非米作粥之義也と和名にあり。衣にひめのりして張るは、こはくせんためなるにぬれてはとり所なかるべし。
 ○あと火の火ばし——門燎火筋也。あとかと五音相通也。和名云、周禮云、喪設二門燎。俗云門火。但此一句禁忌の事なれば時によりて義をつくまじき歟。

一衣編糲也
 二書くまじきもあらず也
 三是も取所なき物也
 四火筋和名五句
 六又伊にかくまじき事なれども也
 七此まくら草紙の卑下也
 八書きて有りし也

一 試樂也
二 石清水臨時祭也
三 掃部
四 主上の御前也

○などてか——句をきるべし。禁忌の事ながらいかでか書き出づまじきぞと也。
○あやしき事をもにくき事をも——あやしき事は衣綱縹也。こくき事はあとびは人のいみにくむ事なれば也。

百二十七

なほ世にめでたき物 臨時の祭の御前ばかりの事は、何事にかあらん。試樂もいとをかし。春は空の氣色のどかにて、うらくとあるに、清涼殿の御前の庭に、掃部づかさの、疊どもを敷きて、使は北面に、舞人は御前のかたに、これらは僻事にもあらん。

○りんじのまつり——江次第第六云、石清水臨時祭三月中旬日、有二年二時、用二下午。賀茂臨時祭十一月下酉日。なほ次第等委圖は雲圖抄にあり。

○おまへばかりの事——臨時の祭に御前の座といふ事あり。庭座ともいふにや。外になき事なれば、御前ばかりの事といふなるべし。江次第第六略云、御前座事御装束をはりて主上出御ありて倚子に着御あり。藏人頭召の由を告げて公卿以下壁下の座に着く。又藏人頭仰せを承つて、使、舞人以下を召して一献二献過して大臣穩座に着く。さて三献過して垣下の公卿着座あり。衛重をすう。さて陪從音楽をなして歌曲の聲を發す。四献五献過して舞人陪從重盃を給ふ。

さて挿頭の花を給うて、使は左のかたにかざし、舞人は右の方にかざす。さて使以下退出すれば、内藏寮撤三鏝物等。掃部撤座主殿掃除云云。雲圖抄に圖あり。

○しがくもいとをかし——試樂、りんじのまつりの音楽を先づこゝろみる心也。石清水の臨時祭の試樂は、祭の前一兩日に行レ之。賀茂同レ之と雲圖抄にあり。圖もあり。御殿の孫庇に倚子たてて出御ありて、四位、藏人舞人をめせば、舞人竹臺のもとにて竹の枝を折りかざして、仁壽殿の廊の下より御前につらなり、陪從近衛の召人、求子うたひ、琴笛ひちりきのねをあはせ、舞人舞終りて、大比禮かへしうたひてまかり出づる由公事根源にあり。猶次第は江次第に委し。

○かもりづかさのたゝみども——百寮訓要云、掃部寮は御装束の事を奉行する所也。但し是もむしる風情の物を沙汰する所也云云。職原抄にも掌二鋪設事云云。

○つかひは北おもてに——賀茂の臨時祭の使の座は北面、南祭の時は又南面なるよし雲圖抄にあり。此草紙のさまは南祭のよしなれば不審也。よりて是らはひが事にもやあらんといへるにや。大やうに書きたるなるべし。

所の衆ども衝重ども取りて、前ごとに据ゑ渡し、陪從も、其の日は御前に出でいる

一陪從、地下の樂人也

二句
 三をこのまじり
 ひろふさへ見に
 くきにさ也
 四火焼屋、又炬
 舎同じく河海に
 あり
 五かるくしく
 也
 六納殿、宣陽殿
 にあり、こは
 たこへ也
 七掃除する也
 八音楽する也
 九有度濱緩河舞
 のうたひもの也
 一〇江次第に漸出
 至吳竹臺下ニ
 あり
 二藏人所、雑色二
 人昇御琴ニ
 あり
 三そまろに面白
 きさま也
 三二舞二人先進
 云云
 三三舞也

ぞかし。公卿殿上人はかはるく盃取りてはてにはやくかひといふ物、男などの
 せんだにうたてあるを、御前に女ぞ出でて取りける。思ひかけず人やあらんとも知
 らぬに、火焼屋よりさし出でて、多く取らんと騒ぐ者は、なか／＼うちこぼしてあ
 つかふ程に、かろらかにふと取り出でぬる者には遅れて、かしこき納殿に火焼屋を
 して取り入るゝこそをかしけれ。掃部司の者共、疊取るや遅きと、主殿司の官人と
 も、手毎に箒とり、砂子ならず。承香殿の前のほどに、笛を吹きたて、拍子打ちて
 遊ぶを、とく出でてこなんと待つに、有度濱歌ひて、竹のませのもとに歩み出でて、
 御琴うちたるほどなど、いかにせんとぞ覺ゆるや。一の舞のいとうるはしく袖を合
 せて、二人走り出でて、西に向ひて立ちぬ。つぎ／＼出づるに、足踏を拍子に合せ
 ては、半臂の緒つくるひ、冠、袍の領などつくるひて、あやもなきこま山など歌
 ひて舞ひ立ちたるは、すべていみじくめでたし。大比禮など舞ふは、日一日見ると
 も飽くまじきを、果てぬるこそいと口惜しけれど、またあるべしと思ふはたのもし
 きに、御琴昇返して、此度やがて竹のうしろから舞ひ出でて、脱ぎ垂れつるさま
 どものなまめかしさは、いみじくこそあれ。播練の下襲など亂れ合ひて、こなたか
 なたに渡りなどしたる、いて、更にいへば世の常也。此度は又もあるまじければにや、
 いみじくこそ果てなん事は口惜しけれ。上達部なども、つぎ／＼出でて給ひぬれば、
 いとさう／＼しう口惜しきに、賀茂の臨時の祭は、還立の御神樂などにこそ慰めら

一五陪従の半臂結
 也、江次第にあ
 り
 一六冠也
 一七袍の領也、袷
 和名コロモノク
 ビ
 一八こまのあやの
 なき也
 一九求子のたぐひ
 なるべし
 二〇大比禮也、江
 次第云返歌大比
 禮返也云云
 二一大ひれの後使
 舞人退出云々
 二三御琴、昇き返
 し也、是より以
 下は退出のさま
 なるべし
 二四江次第に歸時
 經臺東云云
 二五右御云云
 二六播練下襲、舞
 人のさま也

るれ。
 ○ついがさねども——石清水の臨時祭の御前の座に内藏寮衝重をすうる事、江
 次第六に見ゆ。所の衆は舞人陪従などの瓶子を執る。ついがさねをすうる事お
 ぼつかなし。但し石清水還立御前儀に突重を雑色以下役之とあり。此時所の
 衆もすゑわたすべし。こゝは此儀式をいへるにや。
 ○やくかひ——口訣あり。
 ○かしこきをさめどのに——納殿、也足軒御説云、何にてもをさめおかるゝ所
 也。かしこくはやみちにやくかひをいれおく所にしてといはんとて、をさめど
 のといへるなるべし。
 ○かんでもりづかさの——御前の儀果てて舞あるべきさま也。江次第六に、掃部
 撤座、主殿掃除とある是也。
 ○承香殿のまへのほどに——承香殿は和名に仁壽殿の北にあり云云。拾芥大内
 裏の圖に清涼殿の丑方にあたる殿也。樂人舞人此殿のまへより吳竹臺をへて清
 涼殿の前へ出づる様也。江次第六臨時祭舞略云、主上出御有りて王卿着座して、
 殿上人壁下の座に着く、さて使舞人などを召し、陪従音楽をなす。藏人所の雑色
 二人御琴を昇きて、吳竹の臺のもとに至る。主上藏人頭をめして一の舞を仰せ
 定めらる。舞人すゝみて、駿河舞をまふ也。先づ一の舞二人進み出でてまへり、

一主殿頭役之、立金輪積薪官人着膝突云

其後次々の舞あり、舞人上より退いて竹臺の東に至る。次に右の袒いで進みて求子をまへり。舞をはりて舞人下より退く。大比禮をかなでて後、使舞人退出して、承香殿の馬遞を経て、建春門にいたり、それより賀茂にまうづ。猶委し。○うとはまうたひ——賀茂の臨時の祭の歌定家卿「ふる袖はみたらし河に影見えて空にぞすめるうとはまのこゑ」
○ぬぎたれつるさま——江次第曰、袒右、只袒一袍袖許一不袒一半臂下重。
○かへりだちの御かぐら——むかしは南祭に還立なくて、賀茂許りに有りし由雲圖抄にあり。公事根源云、賀茂の臨時の祭、先兼日に試樂調樂などいふ事あり。當日の儀式御禊庭座など石清水に同じ。社頭の儀果てて、使舞人歸りまゐりて還立の儀あり。孫廂に御障子をたつ。御引直衣に御草鞋をめす。額間より出御あり、階間のとほりの庭南北二行に座を敷きて、使ひ舞人つく、うしろに本末の神樂の所作人、陪從、近衛の召人つく。出御ありて、公卿召あれば、簀子長階に候す。階の下に頭以下着きて、使以下を召す。勸盃ありて、神樂あり。庭火よりはじめて、朝倉其駒までうたふ。庭火にももろ歌あるべければ、人長作法あり。みかぐらはてろくあり云云。
庭火の烟の細う上りたるに、神樂の笛の面白うわななき、細う吹きすましたるに、歌の聲もいとあはれにいみじく面白く、寒くさへ氷りて、打ちたる衣もいとつめた

一賀茂也
二一回いましき也、深切にもに執着すまじき事也

圖抄にあり
ニ本末のうた也
三霜月なれば也
四見る人の衣裳也
五才男也
六いまた清少の宮づかへせざりし時也
七賀茂にて也
八篝火なるべし打松て松をたく也
九舞人のさま也
一〇賀茂の橋也、みたらしにあり
一一誰ともなし、但實方なごの事にや
一二舞人に出づるをよろこびしにや
一三賀茂也
一四いましき也、深切にもに執着すまじき事也

う、扇持たる手の冷ゆるも覺えず。才の男ども召して飛びきたるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ。里なる時は、たゞ渡るを見るに飽かねば、御社まで行きて見る折もあり。大きな木のもとに車立てたれば、松の烟たなびきて、火の影に半臂の緒、衣の艶も、晝よりはこよなくまさりて見ゆる。橋の板を踏み鳴らしつゝ、聲合せて舞ふほども、いとをかしきに、水の流るゝ音、笛の聲などの合ひたるは、まことに神もうれしと思しめすらんかし。少將といひける人の、年毎に舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、なくなりて、上の御社の一の橋のもとにあなるを聞けば、ゆゝしう、せちに物思ひ入れじと思へど、なほこのめでたき事をこそ、更にあえ思ひ捨つまじけれ。
○さえのをのこ——雲圖抄御神樂裏書歌二韓神一時人長立舞。次勸盃。次人長進召才男。公事根源にも、からかみはてて又すゝみて才の男めす云云。
○人長の——舞人陪從などの長也。次第云、舞人陪從皆起座隨人長仰一皆次第着座云云。
○たゞわたるを見るにあかねば——里人は御前の儀などは見ねば、使舞人などの大路をわたるを見て、猶あかで賀茂まで行きて見ると也。
○御やしるまで行きて——江次第十賀茂臨時祭社頭儀委。使舞人など着座して垣下殿上人相分れて勸盃あり。使ひ宣命をよみ、御馬を引次にあづまあそびあ

一かへりたちな
 けれは也
 二かへりたちあ
 らは也
 三一條院也
 四清少の申すに
 や
 五后宮へも申せ
 し也
 六例なき事はさ
 もあるまじきこ
 思ひたゆみしに
 七よろこびふた
 めくさま也
 八物見に急ぎま
 うのほる也
 九從者也
 一〇裳也、女房の
 かほかくす也

り、次に舞ひ、次に馬を馳す。猶委し。
 ○上の御やしろの一の橋のもとに——少將の執心をとめてこゝに有りしと也。
 是橋本の社の事にや。賀茂の橋本のやしろは藤原實方をいはひし由つれど草
 に見ゆ。此事にや、猶可尋之。

「八幡の臨時の祭の名残こそ、いとつれづれなれ。などて還りて又舞ふわざをせざ
 りけん。さらばをかしからまし。祿を得て、うしろよりまかづるこそ口惜しけ
 れ。などいふを、上の御前に聞き召して、「明日還りたらん、召して舞はせん」など
 仰せらるゝ。まことにや候ふらん。さらばいかにめでたからん」など申す。うれし
 がりて、宮の御前にも「猶それ舞はせさせ給へ」と集りて、申しまどひしかば、其
 度還りて舞ひしは、嬉しかりし物かな。さしもやあらざらんとうちたゆみつる
 に、舞人前に召すを聞きつけたる心地、物にあたるばかり騒ぐも、いと物狂しく、
 下にある人々惑ひのぼるさまこそ、人の從者、殿上人などの見るらんも知らず、裳
 を頭にうちかづきてのぼるを笑ふもことわり也。

○やはたのりんじの——袋双紙云、八幡臨時祭は、先朱雀院御時被二始行一也。
 件歌は貫之奉之。其歌に「松も生ひ又も苔むす石清水行末遠くつかへまつらん
 下略」
 ○ろくをえてうしろより——内藏づかさ祿の唐櫃を小板敷にかきもてきて藏人

頭以下、使舞人などにくばりあたふる事江次第第六に委し。
 ○其たびかへりてまひしは——南祭にむかしは還立なかりしを、近代おこなは
 るゝよし江次第などに侍るは、此時よりの事にや。

百二十八

一定子也
 二二條の南東、
 洞院の東ミ拾芥
 にあり
 三清少也
 四里にゐながら
 おもひやる也
 五齊信卿にや、
 清少の里亭へ也
 六おちぶれの折
 にも作法懈怠な
 き也
 七女はうたち也
 八薄紅なご也
 九衣のいろ也
 一〇おもしろき詞
 也
 一わぎこにかく
 奉らせ給ふも也
 三清少の事をの

故殿などおはしまさで、世の中に事出てき、物騒がしく成りて、宮又うちにも入ら
 せ給はず。小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう
 里に居たり。御前わたり覽東なさにぞ、猶えかくてはあるまじかりける。左中將お
 はして物語し給ふ。けふは宮に参りたれば、いみじく物こそ哀なりつれ。女房の装
 束、裳、唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしうても候ふ哉。御簾のそばのあきた
 るより見入れつれば、八九人ばかりりて、黄朽葉の唐衣、薄色の裳、しをん、萩な
 どをかしく居並みたる哉。御前の草のいと高きを、などか、これは茂りて侍る。は
 らはせてこそ」といひつれば「露おかせて御覽せんとて、こと更に」と、宰相の君
 の聲にていらへつる也。をかしくも覺えつる哉。御里居いと心憂し。かゝる所に住
 居せさせ給はんほどは、いみじき事ありとも、必ずさふらふべき者に思し召された
 る甲斐もなく」など、あまたいひつる。語り聞かせ奉れとなめりかし。参りて見給
 へ。哀げなる所のさまかな。露臺の前に植ゑられたりける牡丹の、唐めきをかしき

給ふ也
 三宮の小二條に
 おはすほどの事
 也
 一清少をいふ也
 一五女房達のいひ
 し也
 一六清少の詞也
 一七我も護人のに
 くきにまゐらぬ
 也
 一八左中將の詞也
 一おさなしやかな
 る詞也

事」などの給ふ。いさ、人の憎しと思ひたりしかば、又憎く侍りしかば」といらへ
 聞ゆ。おいらかにも」とて笑ひ給ふ。

○故どのなどおはしまさで世の中にこと出で来——中關白道隆公薨じ給ひて、
 御堂殿關白し給ひしに、道長公、道隆公と兄弟の御仲よからざるにそへて、伊
 周公も下心いどみがちにありしに、伊周公其時の太上天皇花山院を由なき恨に
 て、射奉らんとし給ひしつみ、又禁中ならでおこなはせ給はぬ大元師法を伊周
 公年比おこなひ給へるつみ、又其比の女院東三條院をのろひ給へりと云ふつみ
 などにて、長徳二年四月太宰権帥に左遷し給へり。御弟の隆家卿も花山院をい
 給はんとせしつみありとて、出雲へ配流せり。后宮定子は此御恨にて御ぐしお
 ろして籠りおはす由、榮花物語三四の卷、大鏡にも見ゆ。

○何ともなくうたて——其比清少を妬む者有りて御堂殿がたへ清少の心ざしあ
 りと談じたるゆゑ、久しく后宮へ出仕せざりし也。
 ○黄朽葉のからぎぬ——桃華藥葉に七月より九月に至る云云。
 ○紫苑——河海云、おもて蘇芳うらもえぎ也云云。
 ○萩——おもてすはう、うらあをしと桃華藥葉にあり。
 ○かたりきかせ奉れとなめり——いかなる事にも清少は侍ふべき者と后宮の
 思召すよしを清少へ傳へよとのやうに人々左中將にいひしと也。

○ろだいのまへの——是は禁中などの事を取りませ語り給ふさまにや。露臺は
 仁壽殿の邊と江次第六に見ゆ。但し小二條にもろだい作られしにや。

○ぼうたん——牡丹也。花の比ならねど、枝葉も唐めきしとにや。唐朝に盛に
 もてあそびし事、白氏文集、愛蓮説などに見えられたれば、からめきをかしといふ
 にや。

一清少御堂殿の
 人に縁あり也
 二清少を護する
 もののさま也
 三清少のまるれ
 は人々かひこ
 をいひやむ也
 四清少をよそが
 ましくする也
 五聞過してまる
 らざりし也
 六后宮の御あた
 りには也
 七后宮の仰せ事
 もなくて也
 八長女が詞也
 九后宮の女はう
 なるべし
 一〇清少心也、后

げにいかならんと思ひまゐらす御氣色にはあらで、侍ふ人達の、左大殿の方の
 人、知る筋にてありなどさゝめき、さしつどひて物など云ふに、下より參るを見て
 はいひ止み、はなち立てたるさまに見做はず憎ければ、まるれなどある度の仰せを
 も過して、げに久しうなりにけるを、宮の邊には、只あなたがたになして、空言な
 ども出て來べし。例ならず仰事などもなくて、日頃になれば、心細くて打ち眺むる
 程に、長女文をもて來り、「御前より左京の君して忍びて給はせたりつる」と云ひ
 て、こゝにてさへひき忍ぶもあまり也。人傳の仰せ言にてあらぬなめりと、胸潰れ
 てあげたれば、紙には物も書かせ給はず。山吹の花びらを只一つ包ませ給へり。そ
 れに「いはで思ふぞ」と書かせ給へるを見るもいみじう、日頃の絶間思ひ歎かれつ
 る心も慰みて嬉しきに、まづ知るさまを、長女も打ち守りて、「御前にはいかに、物
 の折毎に思し出て聞えさせ給ふなる物を」とて、誰もあやしき御長居とのみこそ侍
 るめれ。などか參らせ給はぬ」などいひて「こゝなる所に、あからさまにまかりて

宮の直に清少への御せうそこにおもふ也
 二絶間也
 三后宮の御せうそこを清少の見知りたるさまをさめも見ざりし也
 三清少を也
 四かりそめ也
 五いはでおもふその上句を忘れたる也
 六清少の心也

参らん」といひて、いぬるのちに、御返事書きて参らせんとするに、この歌の本さに忘れたり。「いとあやし。同じふる事といひながら、知らぬ人やはある。こゝもとに覺えながら、いひ出てられぬはいかにぞや」などいふを聞きて、小さき童の前に居たるが、「下行く水の」とこそ申せ」といひたる、なとてかく忘れつるならん。これに教へらるゝもをかし。

○げにいかならんと思ひ——彼左中將の後宮の御心むけの事をかたられしをうけて、げに后宮の御氣色はいかならんと心もとなく憚るべき事もなしと清少心也。

○左大殿——道長公長徳二年七月廿日轉左大臣と公卿補任にあり。

○をさめ——長女也、下づかへのをんななり。

○おまへより——后宮の御かたより、左京のきみをとりにて、此文を給へりとをさめのかたる也。

○こゝにてさへ——后宮は譏人のまへをおぼして、清少への御文を忍ばせ給へるに、長女清少のかたにても忍ぶと也。

○山吹の花びら——山吹は口なし色なれば、いはで思ふといふ心なるべし。

○いはでおもふに——心には下ゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまさる。前に、おほせ言もなくて日ごろになればとある首尾なり。

○たれもあやしき御ながみ——清少の久しき里居を人々あやしがる也。

○おなじふる事といひながら——同じ古歌の中にも、此歌はことに誰もよく覺

えたる事をと也。

○こゝもとにおぼえながら——世俗に心やすき事を足もとなる事といふにおなじ。

一后宮の御こまは
 二いはでおもふそのうたの事を給ふ也
 三いまあひかたりてこそなぐさむべけれその心也
 四清少かの歌の上句わすれし事也
 五后宮也
 六后の御詞也さやうなる物ぞ也
 七后宮の御物がたり也

御返り参らせて、少し程経て参りたり。いかゞと例よりはつゝまじうて、御几帳にはた隠れたるを、「あれは今参りか」などと、笑はせ給ひて、「にくき歌なれど、此折は、さもいひつべかりけりとなん思ふを、見つけでは、暫しえこそ慰むまじけれ」

などの給はせて、變りたる御氣色もなし。童に教へられし詞など啓すれば、いみじく笑はせ給ひて、「さる事ぞ。あまりあなづるふる事はさもありぬべし」など仰せられて、ついでに、「人の謎々合しける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらう

くじかりけるが、左の一番はおのれ言はん。さ思ひ給へ」など頼むるに、さりと

もわろき事はいひ出でじと、撰り定むるに「其詞を聞かん。いかに」など問ふ。たまかまかせて物し給へ。さ申して、いと口惜しうはあらじ」といふを、げにと推しは

かる。日いと近う成りぬれば、「猶この事の給へ。非常にをかしき事もこそあれ」といふを、「いさ知らず。さらばな頼まれそ」などむつかれば、おぼつかなしと思ひながら、其日になりて、みな方人の男女居分けて、殿上人などよき人々多く居込み

ハおろかならぬ事也
 九 勞々也、なぞ、
 〇 〇、なごの巧者也
 一〇 約束したる也
 二 此人を撰び定むる也
 三 猶心もこながりてこふ也
 四 勞巧の人の詞也
 五 〇さやうに申すことわろき事申さじ也
 六 〇なご合せの日限也
 七 〇又心もこながりてこふ也
 八 〇勞巧の人のはらちちの答也
 九 〇双びて也
 一〇 〇用意也、かの勞巧の人のやうたいする也
 一〇 〇右方也
 一〇 〇左也
 一〇 〇勞巧の人のなご也

て、合はするに、左の一番に、いみじう用意しもてなしたるさまの、いかなる事をか言ひ出でんと見えれば、あなたの人もこなたの人も、心もとなく打ちまもりて、〇なご〇といふほど、いと心もとなし、〇天にはり弓〇といひ出でたり。

- 〇はたがくれ——端隠也。すこし面がくしに清少のゐる也。
- 〇あれは今まゐりか——清少のうるくしげなるをたはぶれの給ふ詞也。
- 〇此をりはさもいひつべかりけり——いはでおもふなどしうねくにくげなる事ながら、此折ふしにはかなふべしと也。
- 〇見つけではしほしえこそ——是清少の久しくまゐらざりし恨みをの給ふ也。かくいふにまさる心中の無音の遺恨あれば、清少を見つけずば、このうらみはなぐさむまじと也。是も御たはぶれ也。
- 〇なご〇あはせしける——謎を左方右方わかれて、歌合のやうに勝負する事也。なごの歌合といふ物もあり。其たぐひなり。
- 〇ひざうにをかしき——非常に也。さやうに奥ふかげにても、よのつねならずをかしくてわらはるゝ事もやと也。
- 〇むつかれば——發憤、はらだつ也。
- 〇みなかた人——左右の方々の人々居分れたる也。
- 〇あはするに——なご〇を合はせあらそふ也。

一 左也、まけぬべけれは也
 二 愛敬なき也
 三 〇あまりの事にあなづり思ひて也
 四 〇わざとあざけりていふ也
 五 〇猿樂也ざれ事也
 六 〇數さしの人に下知して也、右方の詞也
 七 〇左の人々の詞也
 八 〇其次々のなごも勞巧の人に任せし也
 九 〇右の人しらすさいひし味方をかこつ詞也、何とてさやうにはしらすさいひしぞ也
 一〇 〇后宮の女房達也
 一〇 〇右方にさやうに恨み思ふべし

右の方の人はいと興ありと思ひたるに、こなたの方の人は、物も覺えず、あさましうなりて、いとにくく愛敬なくて、あなたによりて、殊更に負けさせんとしけるを、なご、かた時の程に思ふに、右の人をこに思ひて、うち笑ひて、〇や、さらし知らず、と口引き垂れて、猿樂しかくるに、〇數させ〇とて、さよせつ、いと怪しき事。是知らぬ者誰かあらん。さらに數さすまじと論ずれど、〇知らずといひ出でんは、なごてか負くるにならざらん」とて、つぎ〇のもの、此人に論じ勝たせける。いみじう人の知りたる事なれど、覺えぬ事はさこそはあれ。〇何しかは、え知らずといひし」と、後に恨みられて、罪さりける事を語り出でさせ給へば、御前なる限は、〇さは思ふべし。口惜しく思ひけん。こなたの人の心地、聞き召したりけん、いかににかりけん」など笑ふ。これは忘れたる事かは。〇皆人知りたることにや。

- 〇右のかたの人はいと興あり——此なご童べもしりたる事にて、ときやすければ、勝つべきにて逸興とおもへる也。
- 〇あなたによりてことさらに——彼勞巧の人右方に心よせて、わざと左にまかせんとてしたるわざをしらで、ねたしと片時のほどにさま〇思ひくだきし也。
- 〇口ひきたれて——おぞみて物いふさま也。
- 〇數させ〇——勞巧の人かちに定めて勝の數をとらせたる也。花鳥餘情云、

三左の人の彼勢
巧のひきをにく
みし事は后宮に
開召しおきけん
也
三清少の断り也

一厚也、雲深き
也
二清、ケザヤカ
萬葉によめり
三荒島也
四土也、地心も
濕氣ありて平直
ならぬ也
五若立、春の楢
の様也
六濃紅に光ある
也
七蘇枋也、桃の
若枝のさま也
八桃の木にのほ

歌合に員指とてある也。天徳の歌合には金銀の藤の枝を洲濱にすゑて、かずさ
しの所におく。花の枝にて數をとれる也云云。
○此人に論じかたせける——淺き事をあざけりて、態と右にまけしに、左の勝
は嬉しき事にはあらねど、先勝をよきにしてこの巧者に任せし也。
○さこそはあれ——しらずといふからは勝に定むべき事ぞとの心也。
○つみさりける——罪去、つみをいひのがるゝ心也、右方の人に彼しらずとい
ひし人さまゝいひわけして罪をのがれたると也。
○これはわすれたる事かは——此などは清少のごとく忘れたるにはあらず、皆
しりて態としらずといひしに、われはかくわらはも知りたるうたを忘れたる事
と也。

百二十九

正月十日空いと暗う、雲も厚く見えながら、さすがに日はいとけざやかに照りたる
に、えせ者の家のうしろ、荒島などいふものの、土もうるはしうなほからぬに、桃
の木若立ちて、いとしもと勝ちにさし出でたる、片つ方は青く、今片枝は濃くつや
ゝかにて、蘇枋のやうに見えたるに、細やかなる童の狩衣はかけやりなどして、髪
はうるはしきがのぼりたれば、又紅梅の衣白きなど、ひきはこえたる男兒、半靴は

ら也
九ひきかさね着
たる也
二半靴、くつ也
前註
二童女なるべし
三袖、前註
三打着也
四卵榎、卵杖に
大やうおなじ、
前註
五イ御前にもめ
す
六句
七桃枝切りてお
ろす也
八さりわかちほ
ひあふ也
九木にのほりし
わらはの今しほ
しまてさいふ也
三かのおのこの
わらはをおごす
也
三木のほりの童
のさま也
三木にさりつき
て也

きたる、木のもとに立ちて、「我によき木切りて、いで」など乞ふに、又髪をかしげ
なる童の、袖ども綻び勝ちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち着たる、三四
人、「卵榎の木よからん切りておろせ。こゝに召すぞ」などいひて。おろしたれ
ば、走りかひ、取りわき、「われに多く」などいふこそをかしけれ。黒き袴着たる男
走り来て乞ふに、「まで」などいへば、木のもとによりて引き揺がすに、危ふがり
て、猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅などのなりたる折も、さやうにぞ有る
かし。

- しもとがちに——管和名、梓玉篇、すは枝のおほく出でたる也。
- かけやりなどして——物にかけてやぶりたるさま也。
- よき木きりていで——よき桃の枝きりて出せよと也。これ正月の卵杖のれう
にこふなるべし。延喜式舍人式に、正月上卯日の御杖に桃梅各六束云云。
- はしりかひ——はしりまがふ心也。ちりかひくもれなどいふと同じ。
- 梅などのなりたるをりも——此桃の枝をばひあへるごとく梅のなりし時もす
ると也。

百三十

清げなる男の雙六を日一日打ちて、猶飽かぬにや、短き燈臺に、火をあかくかゝげ

一 是亦別段也
 二 敵也、相手也
 三 采イ和名
 四 古くてなよら
 五 呪咀也
 六 ほこらはしき
 也

て、敵の賽をこひせめて、とみにも入れねば、筒を盤の上に立てて待つ。狩衣の顔の顔にかゝれば、片手して押し入れて、いとこはからぬ烏帽子をふりやりて、さはいみじう呪ふとも、うちはずしてんやと、心もとなげに、うちまもりたるこそ、ほこりに見ゆれ。

○とみにも入れねば——相手の賽を悪しかれといひて手に入れてもみななどして、頼ても筒にいれざる也。

○さはいみじうのろふとも——さやうに我がさいを悪しかれと呪咀するともよき目うたん物をと也。

碁をやんごとなき人のうつとて、紐うち解き、ないがしろなる氣色に拾ひ置くに、劣りたる人の居ずまるも、畏まりたる氣色に、碁盤よりは少し遠くて、及びつゝ、袖の下いま片手にて引きやりつゝ、打ちたるをかし。

○ないがしろなるけしき——しどげなきさま也。空蟬巻に、ふたあみのこうちぎだつ物、ないがしろにきなしてと云云。

○かしこまりたるけしきに——はゞかりたるさま也。

○袖のしたいまかた手にて——及びごしに石をおけば、盤の上に袖のさはらぬやうにせしさま也。

百三十一

一 菱也

おそろしきもの 椽の笠。焼けたる所。水ぶき。菱。髪多かる男の頭洗ひて乾すほど。栗のいが。

○つるばみのかさ——椽 和名。櫟實也云云。どんぐりの笠のたぐひなるべし。

○みづぶき——和名云、茨一名鶏頭草、其實似鳥頭故以名之。

百三十二

清しと見ゆる物 土器。新しき金椀。疊にさす薦。水を物に入るゝ透影。新しき細櫃。

○かなまり——金椀 和名前註。

○水を物に在るゝ——透影、すきとほる物に在るゝ影也。

○ほそびつ——孟津抄綿をかけてむしりなどするもの也。細流にぬりをけなどのたぐひか云云。

百三十三

汚げなる物 鼠のすみか。つとめて手遅く洗ふ人。白きつきはな、すゝ鼻し歩く稚

一 早朝也

二吐の字也
三浴せぬ也

兒。油入るゝ物。雀の子。暑き程に久しく湯浴みぬ。衣の萎えたるは、いづれもいづれも汚けなる中に、練色の絹こそ汚けなれ。

○ねりいろの——練色の絹のなえたるはと也。

春曙抄 七 終

枕草子春曙抄 卷八

百三十四

一屏風を布にて
はりて繪なき書
きし物也
二是は一向いや
しけなる沙汰に
も及はぬ也
三是も布屏風の
事也
四繪のさま也
五胡粉
六朱砂
七厨子
八伊よ藤
九出雲蕨にてか
の土産なる由延
喜式、民部式に
あり

いやしげなる物 式部の丞の爵。黒き髪かみの筋太すぢとき。布屏風ぬのびやうの新あらしき、古ふるり黒くろみたるはさる言いふかひなき物にて、なか／＼何とも見えみえず。新あらしく仕立したてて、櫻さくらの花多おほく咲さかせて、胡粉こふん、朱砂すさなど彩いろどりたる繪書えがききたる。遺戸やりの、厨子くし、何も田舎者いなかものはいやしきなり。蕨張わじはりの車くるまのおそひ。檢非違使けいひゐしの袴はかま。伊豫いよ簾すだすの筋太すぢとき。人の子ひとこに法師ほふし子のふとりたる。眞まことの出雲いづみ蕨わじの疊たま。

○しきぶのぞうのしやく——式部丞しきぶのせうの爵しやく。百寮訓要ひやくらうくんよう云、地下ちかの六位ろくゐ可べ然ぜんもの任にん之云云。式部しきぶ丞せうと民部たみぶ丞せうは二省にせうの丞せうとて、必ず爵しやくを給たまふ由職原抄しやくわらに見ゆ。式部丞しきぶのせう必ず叙爵じやくすといへど、猶地下なほちかにて昇殿のぼりだんもかなはねば賤いやしきにや。
○むしろばりの車くるまのおそひ——蕨わじをおほひたる車くるまなるべし。西宮記さいみやうき云、天祿四てんろくし年十一月八日女御懷子にむすめのおほひこ於お東河とうが有あ二除服じよふく。其儀御そのぎぎみ二檳榔毛車べいろうけし。其上張そのかみ蕨わじ懸かへ二鈍色どんじき簾すだす并下簾鞞等しやうげんぎやうら。御祓みたまひら之後取のち二張蕨ちやうわじ懸かへ二替簾等かへて。即すなは以歸御もも。
○けびるしのはかま——是は檢非違使けいひゐしの下したの督かどの長ながの事ことにや。其故そのゆゑは環翠軒かんすいけん云、

一 きれん事を氣づかふ故にや
 二 疫病なごをこなはる此の事也
 三 いつも馴れあそぶ所也
 四 誰と聞きしらぬ人のこゑ也
 五 むねつぶるもこゝろなり也
 六 是も例の所に也
 七 むねつぶるも也
 八 後朝の文也

看督長とて別當の召具する物みな赤き狩衣に白き布被を着る也。白杖を持ちて雑人等追拂ふ也云云。此の出立をいやしげなるとにや。

百三十五

胸つぶるゝ物 競馬見る。元結よる。親などの心地悪しうして、例ならぬ景色なる。まして世の中など騒がしき比、萬の事覺えず。又物言はぬ稚兒の泣き入りて乳も飲まず、いみじく乳母の抱くにもやまで、久しう泣きたる。例の所などにて、殊に又いちじるからぬ人の聲聞きつけたるはことわり。人などの其うへなど言ふに、先づこそつぶるれ。いみじく憎き人の來たるも、いみじくこそあれ。よべ來たる人の今朝の文の遅き、聞く人さへつぶる。思ふ人の文取りて、さし出でたるも又つぶる。

○おやなどの心ちあしう——孝子の心最も胸つぶるべし。伊勢物語に、とみの事とて御文あり。おどろきて見ればなどいふ所を思ふべし。小學云、文王有疾。武王不レ説冠帶、而養。文王一飯亦一飯。文王再飯再飯。云云。是らの心かなふべし。

○人などのそのうへなどいふに——是も例の所などにて、人の我が身の上を陰ごとするにむねつぶるゝこと也。

百三十六

一 瓜
 二 イよる
 三 居もおく心也
 四 うつくしむ心也
 五 イふた
 六 兒の目敏也
 七 小指也
 八 たれあまのさま也
 九 髪をむつかしかりかたぶける也
 一〇 腰の上也
 一一 装束したてられし也
 一二 かりそめに也
 一三 愛する也
 一四 其ままとそひつきて也
 一五 ひいなあそびの道具也
 一六 前二註
 一七 前二註
 一八 ひよこのさま

うつくしき物 なりに書きたる稚兒の顔。雀の子の鼠鳴きするに躍り來る。又べになどつけてすゑたれば、親雀の虫など持て來てくくむるもいとらうたし。三つばかりなる稚兒の急ぎて這ひ來る道に、いと小さき塵などの有りけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるをよびに捕へて、大人などに見せたるいとうつくし。尼にそぎたる兒の目に髪のおほひたるを、搔きは遣らで、うち傾きて物など見るいとうつくし。たすきがけにゆひたる腰の上の、白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、装束たてられて歩くもうつくし。をかしげなる稚兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、掻い附きて寝入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいと小さきを、池より取りあげて見る。葵の小さきもいとうつくし。何もく小さき物はいとうつくし。いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の薄物など、衣長くて、髷あげたるが這ひ出て來るも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなる男の、聲をさなげにて文讀みたる、いとうつくし。鶏の雛の足高に、白うをかしげに、衣短かなるさまして、ひよひよとかしがましく鳴きて、人の後に立ちて歩くも、又親のもとに連れだち歩く、見るもうつくし。雁の子。さりのつぼ。瞿麥の花。

短衣着たるやうなるをいふ也
二後じりへ也

- うつくしき物——めぐみあはれむ心也。尤も美麗の心もあり。
- ふりにかきたる——姫瓜の事なるべし。
- べになどつけて——雀子を愛して紅粉をつけしにや。
- いとちひさきちりなど——白紙文集十の觀兒戲詩に、韶齡七八歳、綺紈三四兒、弄塵復闢草、盡日樂嬉嬉、下略。
- たすきがけにゆひたるこしの——是も兒のさまなるべし。源氏薄雲の卷に、ただひめぎみのたすき引きゆひ給へるむねつきぞうつくしげさそひて見え給へる云云。和祕抄云、むかしはをさなき人小袖をばきず。たすきといふ物をきたる也。猶祕訣あり。
- 殿上わらは——童殿上とて元服以前に昇殿する事也。
- 八九十ばかり——やつこのつとをばかりとよむべし。皇子は七歳にて讀書はじめの事桐壺の卷にあり。只人も八歳より小學に入りて、酒歸應對書數など習ふ事禮記にあり。
- 人のしりにたちて——伊勢物語に、しりに立ちておひゆけどとあり。後の聲によむべし。
- かりのこ——鴨子西宮記。かものこ也。
- さりのつほ——玻璃壺にや。さとはと五音通ずる也。貨源云、玻璃水玉也。

或云千年水化爲之。

百三十七

一いさほしくし習はされし也
二和名ニ款シハフキ咳同
三せきはらひする心にや
四イいられ
五制也
六其子のほしく思ひし物を也
七其子の詞也
八母の人と物いひてききいれぬ也
九子のさま也
一〇無正也

人ばへする物 異なる事なき人の子の、かなしくしならはされたる。しはぶき。はづかしき人に物言はんとするにも、まづ先に立つ。あなたこなたに住む人の子どもの、四つ五つなるはあやにくだちて、物など取散らして損ふを、常は引きはられなど制せられて、心のまゝにもえならぬが、親の來たる所えて、ゆかしがりける物を、
「あれ見せよや、母」など引揺がすに、大人など物言ふとて、ふとも聞き入れねば、
手づから引き探し出でて見るこそいと憎けれ。それを「まさな」とばかり打ち言ひて、取り隠さて「さなせそ。そこなふな」とばかり笑みて言ふ親も憎し。我えはしたなくも言はて見るこそ心もとなけれ。

○人ばへするもの——人そばへと世俗にいふ詞也。人映と書く。

○あやにくだちて——文惡也。あながちめきたる心なり。せそとおもふ事をしてするさま也。

○ひきはられ——引張られ也。イひきいられハ引とりいるる心也。

○親の來たる所えて——其子を愛する父のきたるにほこりたるさま也。

○まさなとばかり——其子の引きさがすを父の正なしなどばかりいひて、其物をとりにかくさぬ也。

一 鱧板、家の具也
 二 土塊也
 三 風の名也、和名ニ暴風ハヤチ
 四 イニヒコハシ牽牛也
 五 牛ハ佐目、牛にはさめ牛也
 六 蠟にや
 七 籠長敷。囚獄正をいふにや
 八 網籠
 九 強盜
 一〇 地楊梅也
 一一 鬼薺
 一二 三茨
 一三 三根殼也
 一四 牡丹也

○われえはしたなくもいはで——親もさまでしらぬを、他人ば猶つよくもしか
 らで道具そこなはれて見るる也。

百三十八

名おそろしき物 青淵。谷の洞。鱧板。鐵。土塊。雷は名のみならず、いみじうお
 そろし。暴風。ふさう雲。ほこ星。狼。牛はさめ。らう。ろうのをさ。いにすし。
 それも名のみならず、見るもおそろし。繩庭。強盜。又萬に恐ろし。肱笠雨。くち
 なはいちご。生靈。鬼薺。鬼薺薺。茨。枳殼。煎炭。牡丹。牛鬼。
 ○あをぶち——青みだちたる淵なるべし。
 ○いかづち——穀。梁。傳云、陰陽相薄。感而爲雷。
 ○ふさうくも——不崇雲歟。公羊傳云、觸石而起。膚寸而合。不崇朝而雨
 者唯泰山雲乎。又不祥雲にや。世のさとしなどに出づる雲也。
 ○いにすし——未勘。但土佐日記に穗屋のつまの蝙蝠鮫とあり。蝙蝠ハ貝也。
 和名爲其貌似レ蜩而大者也云云。是にや。には助字なるべし。
 ○ひぢかさ雨——梁塵愚案抄云、俄にふる雨の笠もとりあへずして袖をかづく
 雨也。
 ○いきすだま——河海云、窮鬼遊仙窟。弄花云生靈也。又た靈也。

一 五牛頭、馬頭の
 たくひ也

○いりずみ——煎炭。しめりを煎取りし炭にや。奥にいりずみおこすとあり。

百三十九

見るに異なる事なき物の文字に書きて事々しき物 覆盆子。露草。水蔞。胡桃。文
 章博士。皇后宮の權太夫。楊桃。いたどりはまして、虎の杖と書きたるとか。杖
 なくともありぬべき顔つきを。

一 胡桃
 二 さらの事をい
 ふ也

○いちご——覆盆子。まことに文字はことごとしきにや。
 ○つゆくさ——鴨頭草と書く也。
 ○水ぶき——黄實とかけり。本草云、黄實黄莖、三月生。葉貼レ水大ニ千荷葉。
 面青背紫。莖葉皆有刺下略。
 ○もんじやうはかせ——文章博士。史書詩文などよむ人也、令義解云文章博士
 從五位下。弘仁二年定レ之云云。位ひきき官なればかく云ふ也。
 ○皇后宮權大夫——職原抄云華族納言參議及三位以上兼レ之云云。中宮大夫は后
 宮の御内を管領する也。權大夫は大夫のごとくにはあらねば、文字に見るほど
 はなき歟。
 ○とらのつゑと——虎杖和名に伊太止利云云。其莖のまだらにて虎の名あるよ
 し本草疏にあり。

一ねずみの子也
二男のおもはぬ
也

百四十

むつかしげなる物 縫ひ物の裏。猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを、巢の中より敷多まろばし出でたる。裏またつかぬ皮ぎぬの縫目。殊に清けならぬ所の暗き。異なる事なき人の、小さき子どもなど、敷多持ちてあつかひたる。いと深うしも心ざしなき女の、心地あしうして久しくなやみたるも、男の心の中にはむつかしげなるべし。

○むつかしげなる——むさくしげなる心也。又物うき心もあり。

○ぬひものの——繡の絹のうら也。和名云、蔣魴。切酌云繡以五色絲一刺二萬物、形状一也。

○かはぎぬ——狐腋 裘。粘 裘のたぐひ也。裘の裏付かぬは表の縫目見えてむさくしきにや。

百四十一

えせものの所得る折の事 正月の大根。行幸の折の姫まうち君。六月、十二月の晦日の節折の藏人。季の御讀經の威儀師。赤袈裟着て、僧の文ども讀みあげたる、いとらうらうじ。御讀經、佛名などの御装束の所の衆。

一イ名

○えせものの所うる折——常はあなづらはしき物の折にふれては時にあふ事也。

○正月のおほね——齒固などに用ゐる大根也。花鳥云、齒固は元三によはひをかたむる心也。齒はよはひとよむ也。高土坏六本に折敷をすゑ一の臺に餅大根橋をもる也下略。

○行幸の折のひめまうち君——東賢子也。公事根源にひめまつともいへり。正月の女叙位に叙爵する故、姫太夫といふにや。公事根源云、あづまわらはいふは、内侍司の被官にて行幸の時、ひめ松とてをかしき馬に乗りて供奉するこれが事也。これはみつ子を用ゐらるゝにや。三子は天子の守りになる由。由緒も侍る故とかや。年ごとに申文を出して必ず五位の位を給ふ也。是は昔より同じ名乗を相傳して、紀朝臣季明と名のる云云。

○よをりの藏人——節折の命婦とも云ふ也。六月十二月晦日の夜節折の命婦、竹を持ちてまゐりて、主上の御長より始めて所所の寸法を取果てて、宮主にきりあてがはせて御袂をつとむる也。あらたへにこたへとて二度あり。二度果てて祿を給ふ。節折をよをりといふ。竹にて御たけの寸法をとりて其ほどに切りあてがへば也と公事根源にあり。延喜式藏人式云、十二月晦日諸司供三奉荒世和世御装束一一同二六月一云云。又云孫廂南北兩方立二御屏風一其北御屏風前鋪二小庭一爲二

節折藏人座」と江次第にあり。雲圖抄に圖あり。常はひきき女官の此時座をかまへなど所をうる也。

○季の御讀經の威儀師——季の御どきやうとは二月と八月に百敷にて大般若經を四ヶ日講ぜらるる事也。江次第首書云、季御讀經春秋二季請二百僧於南殿讀大般若經。其内定御前僧二十口於御殿讀仁王經。下略。威儀師は此みどきやうに彼清涼殿にて仁王經をよむところの御前の僧を引きて入る奉行の僧也。江次第、五、季御讀經の所に、威儀師引御前僧入自明義仙華等門云云。西宮記云、南座東端威儀師候前居警云云。雲圖抄に此圖あり。

○あかげさきて——官職便覽云、延曆十三年九月三日延曆寺供養記云、奉行僧二人威儀師從儀師始賜赤袈裟云云。

○僧の文どもよみあげたる——僧の名ども書きし例文なるべし。江次第、五、季御讀經事云、例文置上卿前。入二年々僧名名僧帳諸寺解文外任并死去勘文等興福寺延曆寺等豎義者注文。近例去年僧名上押紙書付今年可請定之僧名。

○御どきやう佛名などの御さうぞくの所の衆——季の御讀經などに行事の藏人、清涼殿をかざり、辨南殿をかざる事あり。佛名にもかざるを、裝束といふ也。藏人所の衆此時所をうるにや。雲圖抄裏書云、季御讀經事初日行事藏人奉仕御殿御裝束一辨奉仕南殿裝束云云。すなはち圖あり。江次第十一云、御佛名當日

一市女の笠也

春日祭の舎人ども。大饗の所のあゆみ。正月の薬子。卯杖の法師。五節の心見の御髪上。節會御陪膳の采女。大饗の日の史生。七月の相撲。雨降る日の市女笠。渡する折のかん取。

○かすがまつりの——年中行事歌合話云、かすがの祭は二月上の申の日也。まづ未の日勅使たつ。近衛の中將少將これをつとむ。清和天皇貞觀元年十一月九日に生まれり云云。此勅使の近衛の舎人ども、けふ所をうるにや。近衛の隨身番長府生等をこのゑのとねりといふ也。又春日まつりに馬寮の使御馬をひきて社をめぐり、長者殿の神馬此次にひきめぐる事江次第、五にあり。又春日まつりの使途中の次第に、七條大宮にて、除目をおこなひ、左右大臣各一人。以三職官一任之、左右大辨各一人以三番長一任之。頭中將一人以三府生一任之云云。これらのとねりをとるをうるといふなるべし。

○大饗のところのあゆみ——二宮大饗大臣大饗等也。あゆみとは或説云、大臣などの御慶賀に學生ども列參して、嘉辰令月歡無極といふ詩を朗詠して腰指の絹を給ふ事云云。公事根源云、二宮とは春宮中宮を申す也。玉卿以下本宮に參

じて拜禮の事あり。次に玄輝門の東西の廊にして襷につく。先づ中宮の襷につく。次に春宮の襷につく。三献の儀有り云々。猶江次第委。大臣大饗は前に委註。あゆみとは歩の字也。江次第に勸學院歩といふ事もあり。常にはことなる事なき學生などの此折に所をうるを云ふにや。

○正月のくすりこ——年中行事歌合註云、薬子はをさなき童女にて侍り。是も屑蘇は小兒よりのむ本文あれば、先づ御薬を是になめさせてきこしめすにや。

○うづゑのほうし——卯杖を奉る法師にや。卯杖の事前註。

○五せちのころみのみくしあげ——五節の事前に註す。十一月丑日帳臺の試あり。寅日御前の試あり。江次第雲圖抄等委。いづれも五節舞妓を天子の御覽ずる事也。みぐしあげとは五節の舞妓につく女房也。江次第には理髪とあり。雲圖には髪上とあり。江次第第十。五節御前試云、時刻先五節師參入着座。次舞姫參上。藏人頭進向長橋東禁陪從等亂入。免入者理髪一人。童女二人。薰爐茵等也。下略。他の者はまゐらぬ所へかの髪上の女房は入る事をゆるさるゝゆゑ、えせ物のところうると也。

○せちゑの御はいぜんのうねめ——御陪膳とは天子の御給仕つかふまつる事也。禁秘抄云、陪膳采女尤可然事也下略。江次第一元日節會云、其南置緑草墩陪膳末女座。又云采女撤御膳臺盤下略。七日節會踏歌節會にもかくのごと

し。采女はいとしもなき女官なれども、せちゑの御はいぜんの折は所をうるとの儀也。

○大饗の日の史生——大臣大饗に大政官の史生を召して、勸坏居飯の儀有りて祿を給ふ事あり。紅次第二委。史生は大政官の細事を書註す官人、此時所をうる也。

○七月のすまひ——年中行事歌合註云、相撲といへるは諸國の供御人をめしあつめて、七月に相撲節といふ事をおこなひて天子御覽ずる也。始めをば御召合はせといふ。後にすぐりてめされんずるをぬきてと申す。其次第は江次第委。雲圖抄に圖あり。是もいやしき物の此折に所をうる心なり。

百四十二

苦しげなる物 夜泣きといふ物する稚兒の乳母。思ふ人二人持ちて、こなたかなたに恨みふすべられたる男。こはき物の怪あづかりたる験者。験だにはやくはよかるべきを、さしもなきを、さすがに人笑はれにあらじと念ずる、いと苦しげなり。わりなく物疑ひする男に、いみじう思はれたる女。一の所に時めく人もえやすくはあらねど、それはよかんめり。心いられたる人。

○おもふ人ふたりもちて——詞花集云、等思二人戀。右大臣「いづくをもよ

一イわざ
二験はやく見え
は也
三験の見えぬ也
四人に笑はれぬ
やうにこの心也
五色々に加持し
護念する也
六攝關を申す也
執柄も云ふ也

七短氣にせはせはしき人也

がるる事のわりなきにふたつにわくるわが身ともがな
○一の所に——職原抄云、執柄者必蒙一一座之文宣旨。故稱二人。又云二一所。○時めく人——攝家などに近習にて召しつかはるる也。

百四十三

一よくよむは理也
二いつかはよくよむべき也
三山道也
四他の人人也
五清少よりあこに来る也
六初午なるべし
七清少の心也
八かやうにしひていなりまうでせぬ人も世にあらんとなり
九衣をつほをる心也、前註、よき人にはあらぬさま也
一〇ひきあはたる也

羨しきもの 經など習ひて、いみじくたどくしくて忘れがちにて、返すくおなじ所をよむに、法師はことわり、男も女も、くるくるとやすらかに讀みたるこそ、あれが様に、いつの折とこそふと覺ゆれ。心地など煩ひて臥したるに、うち笑ひも言ひ思ふ事なげにて、歩みありく人こそ、いみじく羨しけれ。稻荷に思ひ起して参りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じて登る程に、聊か苦しげもなく、後れて來と見えたる者どもの、只ゆきに先だちて詣づる、いと羨し。二月午の日の曉に急ぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりなりにけり。やうく暑くさへなりて、誠に佗しうかからぬ人も世にあらんものを、何しに詣てつらんとまで涙落ちて休むに、三十餘ばかりなる女の、盡装束などにはあらで、たゞ引はこえたるが、丸は七度詣てし侍るぞ。三度は詣てぬ。四度は事にもあらず。未には下向しぬべし」と、道に逢ひたる人に打ち言ひて、下り行きしこそ、只なる所にては目もとまるまじき事の、かれが身に、只今ならばやと覺えしか。

二彼女の詞也
三八時の事也
三我ありきかぬる時なれば也

一下ゆたる髪のさま也
二貴人の事也
三貴人也
四手よき人也
五心にくき所への仰せ書きの事也
六手跡未熟なる也

男も、女も、法師も、よき子持ちたる人、いみじう羨し。髪長くうるはしう、さかりばなどめでたき人。やんごとなき人の人にかしづかれ給ふもいと羨まし。手よく書き歌よく詠みて、物の折にも先づ取り出でらるる人。よき人の御前に、女房いと數多さぶらふに、心憎き所へつかはすべき仰せ書などを、誰も鳥の跡などの様にはなどかはあらん。されど、下などにあるを、わざと召して、御硯おろして書かせさせ給ふ羨し。さやうの事は、所の大人などに成りねれば、誠に難波わたりの遠か

○いなりに——延喜式神名帳云、稻荷神社三座。下社大山祇。中社倉稻魂。上社土祖神。この神は百穀を播し給ふ故稻荷と申す由卜部の記にあり。
○中乃御社——倉稻魂と申す也。
○二月むまの日——口傳貫之集第一云、延喜六年月次の屏風の歌の中に、二月初午いなりまうでしたる所、「獨のみ我こえなくにいなり山春の霞のたちかくすらん」
○坂のなからばかり——いなりの上の社の奥十八町ばかり山中也。今も氏は正月五日に参る事あり。瀧などの跡も有。其道のほどのさま也。
○七度まうで——一日に七度まうづる也。稻荷へは七度参る事信心にや。拾遺集に「瀧の水かへりてすまばいなり山七日のぼりししとおもはん」とよめり。

にかかする折な
らでせ也
七かやうのかた
へつかはすべき
御文にはせ也
八相手のさいの
よく出る也
九此まことに
いふ詞面白し

らぬも、事に従ひて書くを、これはさはあらで、上達部のもと、又始めて参らんなど申さずる人の娘などには、心ことに上より始めて繕はせ給へるを、集まりて戯れにも妬がり言ふめり。琴笛習ふに、さこそはまだしき程は、かれが様にいつしかと覺ゆめれ。内裏、東宮の御乳母。上の女房の御かたぐゆるされたる。三味堂たてて、宵曉に祈られたる人。雙六うつにかたきの賽きたる。誠に世を思ひ捨てたる聖。

○よき人の御前に——是より彼手よくかく人のうらやましき事をいへり。

○鳥のあとなどのやうに——手の一向あしきを云ふ也。源氏柏木巻に、あやしき鳥の跡のやうにて、河海云、蒼頡觀鳥跡一文字一史記。

○なにはわたりの遠からぬ——手跡の未熟なるを云ふ也。世俗に机ばなれせぬといふたぐひ也。古今集序になにはづのことはを習ふ人のはじめにもしけるとあるに付けて、若紫巻に、まだ難波づをだにはかぐしうつだけ侍らざんめればといへるたぐひなるべし。

○あつまりてねたがり——彼手跡よき人にねたみうらやましき也。人々あつまりてねたき事など戯れてうらやめると也。

○三まいだら——河海云、三昧梵語也。此には云正受又名正定云云。法華三昧、念佛三昧などとて他事なく其事のみうけおこなふをいふ也。其堂を三昧

堂といふ也。

百四十四

疾くゆかしき物 卷染、村濃、括り物など染めたる。人の子産みたる、男女疾く聞かまほし。よき人はさらなり。えせ者、下衆のきはだに聞かまほし。除目のまだつとめて、必ず知る人のなるべき折も聞かまほし。思ふ人のおこせたる文。

○とくゆかしき——早く見まほしく、聞かまほしき心也。

○まきぞめ、むらご、くくりもの——卷染、村濃、括物。くくり物は源氏關屋巻に、くくりぞめといへる物なるべし。今くくしといふ物のたぐひ也。

○ちもくのまだつとめて——縣召除目の翌日早天をいふ也。

○必ずしる人のなるべき——知人の必ず受領すべき年は何れの國等ととく聞きたきと也。

百四十五

心もとなき物 人の許に、頓の物縫ひにやりて待つほど。物見に急ぎ出でて、今やくと苦しう居入りつゝ、あなたを守らへたる心地。子産むべき人の、程過ぐるまでざる氣色の無き。遠き所より思ふ人の文を得て、固く封じたる續飯などはなちあ

一 祭行幸也
二 くるかたを守
りて也
三 うむべきさま
ならぬ也

四封也
 五續飯也
 六イにて白き
 七物見の棧敷近
 八心もさなき心
 也
 九生まれ出づる
 をまらつたる
 也
 二針
 二五十日百日也
 三イ、す
 三闇きに我糸付
 くるは其分にて
 也
 一四いかでささぎ
 らんさやさはれ
 し人のおもふ也
 一五え立ちのかぬ
 也
 一六心もさなき上
 に也
 一七傍輩などの先
 づ其車をかへる
 一八我車のかへる
 なりよるこぶ
 也

くる心もと無し。物見に急ぎ出でて、事なりにけり。白き答など見付けたるに、近
 くやり寄する程ほとむしう、おりても往ぬべき心地こそすれ。知られじと思ふ人のある
 に、前なる人に教へて物言いけせたる。いつしかと待ち出でたる稚見の、五十日、百
 日などの程ほどになりたる。行末いと心もとなし。頓の物縫ぬいふに、暗き折、針はりに絲いとつく
 る。されど、我われはさる物にて、ありぬべき所を捕へて、人につけさするに、それも
 急げばにやあらん、とみにも得さし入れぬを、「いで只なすげそ」と言へど、さすが
 になどてかはと思ひ顔かほにえ去らぬは、憎にくささへ添そひぬ。何事にもあれ、急ぎて物へ
 行く折せり、先づわがさるべき所へ行くとして、只今おこせんと出でぬる車待まちつ程こそ
 心もと無なけれ。大路行ぢきけるを、さなりけると喜びたれば、外ほかざまにいぬる、いと
 口惜くし。まして物見に出でんとあるに、「事はなりぬらん」など言ふを聞くこそ佗
 しけれ。子産うみける人の、後の事久くしき。物見にや、又御寺詣みでなどに、諸共あにあ
 るべき人ひとを乗のせに行きたるを、車さし寄よせたるが、頓とんにも乗のらて待たするもいと
 心もと無なく、うち捨ててもいぬべき心地する。頓とんに煎炭いりすすをおこすいと久ひさし。人の歌の
 返し疾はやくすべきを、え詠よみ得えぬ程、いと心もと無なし。懸想けんさう人などはさしも急いそぐまじ
 けれど、おのづから又さるべき折もあり。又、まして女も男も、只に言いひ交かはす程は、
 疾はやきのみこそはと思ふ程に、あひなく僻事ひがも出てくるぞかし。又、心地悪あしく物お
 そろしき程、夜の明あくる待まちつこそ、いみじう心もとなけれ。まつばぐるめのひる程

も心もと無し。

○とみの物ぬひに——頓の字也。近き晴れわざにきるべき物縫はせし也。
 ○居ゐりつゝ——物見の所に入居る也。

○事なりにけり——いとて入。祭などのわたる時節に成りたる也。源氏葵巻に
 物も見で歸らんとし給へど、事なりぬといへば云云。おなじ心也。

○白しろきしもと——警固けいこの白杖しろじやうを持ちて来る也。答こたへは犯人ほんにんをうつ杖なり。

○しられじと思ふ人あるに——我ある事をかくさんとおもふ人の來たる時、我
 は隠れ居て前なる人に我ここにあらぬ由を教へていはずせたる也。イニ我はかく
 れゐてしられじと思ふ人のきたるに、前なる人に物いいはせてきゝゐたるこゝち
 とあり。

○ありぬべき所をとらへて——我は糸付くべき針をとらへて、人にやとひて
 つけさする也。

○それもいそげばにや——やとはれし人も氣をせくゆゑにやらん。頓とんてにもえ
 つけぬ也。

○只今おこせんとて——其かりし車を追付返さんとてのりて出でし也。

○おほぢいきけるを——彼車の歸るを待つ程に他の車の大路をゆく也。
 ○とみにいりずみおこす——煎炭也。急に炭をおこすに、おこりかぬる程の久

一五是も車まつ程
 の事也
 一六祭のわたらん
 さいふ也
 一七えなのささぎ
 ぼる也
 一八同車すべき人
 をさそひにゆき
 し也
 一九イ、に
 二〇かのさそふ人
 の遅なはる也
 二一イ、心もさな
 し

一定子の出で給ふべき也
 二前に註
 三イ、たん
 四格子也
 五四方に御座か
 けし也
 六萱草也
 七架垣也
 八あざやか也
 九太政大臣の歴々たる所に似合ふ也
 一〇守辰丁のうつ時の鐘也

しく心もとなき也。
 ○けさう人などはさしも——懸想人への返歌は、態と物おもはせて遅くすべければさもいそぐまじけれど、又自然急ぐべき折もありと也。
 ○ときのみこそはと——口ときのみこそ規模ならめと思ひて、急ぎよみ出づればひが事も出で來ると也。
 ○まつばぐるめ——松葉黒、待齒黒兩説也。

百四十六

故殿の御服の頃、六月三十日の御被と言ふ事に出でさせ給ふべきを、職の御曹司は方悪しとて、官のつかさのあいたる所に渡らせ給へり。其夜はさばかり暑くわりなき闇にて、何事も、せばう瓦葺にて様異也。例の様に格子なども無く、只めぐりて、御簾許りをぞ掛けたる、中々珍しうをかし。女房庭におりなどして遊ぶ。前裁には、萱草と言ふ草を、笹結ひて、いと多く植ゑたりける。花きはやかにかさなりて咲きたる、むべくしき所の前裁にはよし。時司などは只傍にて、鐘の音も例には似ず聞ゆるをゆかしがりて、若き人々二十餘人許り、そなたに行きて走り寄り、高き屋に上りたるを、これより見あぐれば、薄鈍の裳、唐衣、同じ色の單衣襲、紅の袴どもを着てのぼり立ちたるは、いと天人などこそ言ふまじけれど、空より下

二女房也
 三其方
 四薄鈍裳唐衣、道隆公の衣服也
 一四是も薄鈍也
 一五若くても上履はかろがろしく襪にもものほらぬさま也
 一六襪にのほりしをうらやむ也
 一七年たけ上履なる人也
 一八女房の狼藉をいましむる也
 一九うちあひまをしたる也
 二〇女房達のさま也
 二一外也
 二二イ、に
 二三巢に蜂の付きある也
 二四定子の御方の宿直に也
 二五句を切るべし
 二六イに
 二七二星の近くみ

りたるにやとぞ見ゆる。同じ若さなれど、おし上げられたる人はえまじらて、美しげに見あげたるもをかし。日暮れて暗まぎれにぞ、通じたる人々皆たち交りて、右近の陣へ物見に出てきて、戯れ騒ぎ笑ふもあめりしを、かうはせぬ事也。上達部のつき給ひしなどに、女房どものぼり、上官などの居る障子を、皆うちとをし損ひたりなど、苦しがる者もあれど、聞きも入れず。屋のいと古くて、瓦葺なればにやあらん。暑さの世に知らねば、御簾の外に、夜も臥したるも、古き所なれば、蜈蚣と言ふ物、日一日落ちかゝり、蜂の巢の大きにて、附き集りたるなど、いと恐ろしき。殿上人日毎に参り、夜も居明し、物言ふを聞きて、秋ばかりにや、太政官の地の、今やかうのにはとならん事を」と誦し出たりし人こそをかしかりしか。秋になりたれど、かたへ涼しからぬ風の、所がらなめり。さすがに虫の聲などは聞えたり。八日ぞ還らせ給へば、七夕祭などにて、例より近う見ゆるは、程の狭ければなめり。

○故殿の御ふくの比——中關白殿、長徳元年四月十日薨。服忌令云父母服一年。暇五十日云云。

○六月卅日の御はらへ——定子の被に出で給ふべきと也。被は觸穢などにもあるべき也と年中行事註有。

○官のつかさのあいたる——太政官廳のあきし所へ渡御也。イあいたん所とは

朝所にや。

○時つかさなど——禁中の漏剋博士の事也。百寮訓要云、漏剋博士は漏をつかさどる。晝夜の時を伺ふ也。漏水のうつるを守りて時を正しくする職也。職員令云、漏剋博士二人、掌下率守辰丁二伺中漏剋文節、守辰丁廿人。掌下同漏剋文節、以時擊中鐘鼓也。

○たかきやにのぼり——新古今、「高き屋にのぼりて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」仁徳天皇御歌也。東野州註云、たかき屋は樓閣などの事也。

○くらまぎれにぞ——あかきほどは樓閣へ上らざくし人々、くらまぎれに若き女房にまじはりてあそびありく也。

○右近陣——月華門をいへり。拾芥に委。

○上達部のつき給ひし——公卿の着座し給ふ所にも、女房のはばかりのぼるなるべし。

○上官——政官也。太政官の官人、辨少納言、外記などをいふ也。

○ふるき所なればむかでといふ物——ここもと法華經譬喻品の長者の大宅久しくふりて、蜈蚣、蜘蛛、守宮、百足などの諸悪虫交横馳走せしさまをおもひてかけるにや。

○太政官の地のいまやかうの——やかうは八講にや。これ古き序文などの句なるへし。追而可考。

○かたへすずしからぬ風の——六月より初秋までここに后宮のおはせしにや。

古今二「夏と秋と行きかふ空の通路はかたへ涼しきかぜやふくらん」此うたをうけて残暑を云ふ也。

○七夕まつりなど——八日に還御の前の夜七夕也。乞巧奠の事江次第にあり。

百四十七

宰相中將齊信、宣方の中將と参り給へるに、人人出て物など言ふに、序もなく、「明日は如何なる詩をか」と言ふに、聊か思ひ廻らし、溜もなく、「人間の四月をこそは」と應へ給へる、いみじうをかしくこそ。過ぎたる事なれど、心得て言ふはをかしき中にも、女房などこそさやうの物忘れはせね、男はさもあらず、詠みたる歌をだになま覚えなるを、誠にをかし。内なる人も、外なる人も、心得ずと思ひたるぞ理なるや。

○宰相中將齊信——長徳二年四月廿四日参議、恒徳公の三男。

○のぶかたの中將——宣方、六條左大臣重信公息。

○人間の四月をこそ——白氏文集十六云、大林寺桃花、人間四月芳菲盡、山寺桃花始盛開、長恨春歸無二、覓所一不知轉入二此中一來云云。此詩こそはかかめ

一是より別段、三月卅日の事きこゆニ清少の詞也三いかなる詩を書き給はんぞ也四齊信卿也五過ぎて古き事也六文集の句を覚えざる也

花始盛開、長恨春歸無二、覓所一不知轉入二此中一來云云。此詩こそはかかめ

一 彼人間四月をいへる日の事なるべし
 二 殿上人の退出せし也
 三 藏人也
 四 清少のこさほ也
 五 三月卅日に七夕の詩をさなへ給へば也
 六 齊信の詞也、七夕の心得もなく別の事許に吟じたるにさ也
 七 遠慮なくいふべき事ならず也
 八 夜明はてたる也
 九 露分けて歸り

此三月三十日、細殿の一の口に、殿上人數多立てりしを、やうくすべり失せなどして、唯頭、中將、源中將、六位一人残りて、萬の事言ひ、經讀み歌うたひなどするに、「明け果てぬ也。歸りなん」とて、「露は別の涙なるべし」と言ふ事を、頭の中將うち出し給へれば、源中將諸共に、「いとをかく誦んじたるに、「急ぎたる七夕かな」と言ふを、いみじう妬がりて、「曉の別のすぢの、ふと覺えつるまゝに言ひて、佗しうもあるわざかなと、すべて此のわたりにては、かゝる事思ひまはさず言ふは口惜しきぞかし」など言ひて、餘り明くなりしかば、「葛城の神、今ぞすぢなき」とて、わけておはしにしを、七夕の折、此事を言ひ出せばやと思ひしかど、宰相になり給ひにしかば、必ずしも如何てかは其程に見付けなともせん。文書きて、主殿司してやらむなど思ひし程に、七日に參り給へりしかば、嬉しくて、其の夜の事など言ひ出せば、心もぞ得給ふ。すずろにふと言ひたらば、怪しなどやうち傾き給はむ。さらばそれには有りし事言はんとてあるに、露おぼめかて應へ給へりしかば、誠にいみじうをかしかりき。月頃いつしかと思ひ侍りしだに、わが心ながら好

百四十八

と也。三月卅日にあすはいかなる詩をかといへばなるべし。
 ○誠にをかし——齊信の古詩を覺えて答へ給ふを感ずる詞也。

給ふ也
 一 露は別の吟の事を也
 二 齊信、長徳二年四月廿四日參議
 三 齊信の定子の御方へ也
 四 詠吟の事也
 五 心え給ひもやせん也
 六 齊信の不審し給はんと也
 七 不審し給はば委しく申しさかせん也
 八 齊信のよく覺えぬ給ひし也
 九 何としてさやうに、又かねて覺悟せし事のやうに覺してこたへ給ひけん也
 一〇 宣方は忘れ給へる也
 一一 齊信の詞也
 一二 三かの露は別の

きくしと覺えしに、争てさはた思ひまうけたるやうにの給ひけむ。諸共に妬がり言ひし中將は、思ひもよらで居たるに、「有りし曉の詞戒めらるるは知らぬか」との給ふにぞ、「げにさしつ」など言ひ、「男はてうけん」など言ふ事を、人には知らせず、此君と心得て言ふを、「何事ぞ」と、源中將は添ひつきて問へど、言はねば、彼の君に、「猶是の給へ」と怨みられて、よき中なれば聞かせてげり。いとあへなく言ふ程も無く、近うなりぬるをば、「おし小路の程ぞ」など言ふに、我も知りにつるといつしかしらんとて、わざと呼び出でて、「碁盤侍るや。まろも打たんと思ふはいかが。手は許し給はんや。頭中將と等し碁也。なほほし分きそ」と言ふに、「さのみあらば、定め無くや」と應へしを、彼の君に語り聞えければ、「嬉しく言ひたる」と悦び給ひし。猶過ぎたる事忘れぬ人はいとをかし。

○ほそどのの一口——弘徽殿の廊の第一にあたりたる戸口なるべし。源氏花宴に、三の口あきたりとあるたぐひ也。弄花抄云弘徽殿の東にわたり廊あり。それを細殿といふ。ほそどのに出づる所に戸三有り。南の第三にあたるくるるさしたる戸也云云。
 ○頭中將源中將——前にいへる齋信と宣方となるべし。
 ○露は別のなみだ——菅家文章五云、七月七日代「牛女」惜「曉」。露應「別淚」珠空落雲是殘粧「誓未」成、此句朗詠にもあり。

事をぞがめらるる也
 三宣方の詞
 二宣方の詞
 一齊信卿と清少
 斗心えて也
 二清少に也
 三齊信に宣方の
 間也
 云てうけんとい
 ふ事はいひまか
 しけれども、又
 ほごなく餘のあ
 ひ詞をいふ也
 元宣方の心也、
 齊信に問ひ聞き
 て知りたりと清
 少に知られんと
 也
 三清少を也
 三宣方の詞也
 三其盤也
 三おなじほごの
 其さ也、心ざし
 まけじさ也
 三清少の答也
 三齊信に清少の
 語る事也

○かつらぎの神今ぞ——拾遺「岩橋のよるの契も絶えぬべしあくる侘しき葛城の神」役行者金峯山とかつらぎ山の間岩橋をかけさせしにかつらぎの神かたちみにくき故、晝夜を侘びたる事あるをよめる歌也。此双紙の心も明けはなれてかたちのはしたなくあらはなる事を侘びていへるなるべし。
 ○わけておはしにし——前に露は別のと吟じ給ひし其露を分けて齊信のかへり給ふ也。
 ○いかでかは其ほどに見付け——上達部に齊信の成り給へば、殿上人のやうに中宮の御かたへもおはさぬを、いかで其七夕の比にも見付けて此事をいはんと也。
 ○月頃のいつしかと思ひ侍りしだに——月ごろ此事をいつか齊信卿に申し出でんと思ひかまへしだにと也。
 ○我心ながらすきくしと——齊信の覺え給はぬ事など言ひ出でんも我心ながら物ずきなるわざと思案せしにと也。
 ○もろともにねたがり——宣方の事也。齊信卿と共に清少にとがめられねたがりし事也。
 ○げにさしつなど——げにくさやうにしたる事有りしと也。
 ○をとこはてうけん——是は清少と齊信卿のあひ詞なれば知りがたし。但し漢

の張鷟が河源を尋ねて、織女を見し事あり。けふ七日なれば、其よせある事にや。
 ○よき中なればきかせてけり——齊信宣方仲よければ、其子細を齊信のきかせて給ひしと也。

○こぼん侍るや——碁盤也。清少にいひよらんためにいへるよせ詞也。
 ○手はゆるし給はんや——清少、宣方に心とけ給はんやと也。源氏竹川巻に、「哀とて手をゆるせかしきしにを君に任する我身とならば」是も碁に寄せし也。

○さのみあらは——女のさやうに人になびかば、不定のものにならんと也。
 ○猶過ぎたる事忘れぬは——齊信の露は別の涙といひし事を、覺え給ひしを感ずる也。

宰相になり給ひしを、上の御前にて、「詩をいとをかしう誦じ侍りしものを、「さうくわいけい」肅會稽之古廟をも過ぎにし」なども誰か言ひ侍らんとする。暫しならでも侍へかし。口惜しきに」など申ししかばいみじう笑はせ給ひて「さなん言ふとて、なざじかし」など仰せられしをか。されどなり給ひにしかば、誠にさうくしかりしに、源中将劣らずと思ひて、故だち歩くに、宰相中將の御上を言ひ言て、「未だ三十の期に及ばず」と言ふ詩を、異人には似ずをかしう誦し給ふ」など言へば「なぞかそれ

一是も齊信の事也
 二一條院也
 三清少のこさほ也
 四宰相にならでもあれかしと也
 五帝也
 六清少さやうにいふとて、な

七 齊信のさまにまけじとて也
 八 故々しく由めきありく也
 九 清少詞也
 一〇 齊信のよく詠じ給ひし也
 一一 誦也、齊信のらうえいし給ふ也
 一二 宣方の詞
 一三 宣方の朗詠也
 一四 清少の詞也
 一五 齊信のやうにらうえいせで残念也
 一六 清少の詞
 一七 齊信のらうえいをほむる也
 一八 宣方也
 一九 齊信卿を宣方の也
 二〇 宣方の詞也
 二一 足下也、齊信をさしていへり
 二二 齊信卿也

に劣らむ。勝りてこそせめ」とて詠むに、「更に悪くもあらず」と言へば、「佗しの事や。いかであれがやうに誦んぜで」などの給ふ。三十の期と言ふ所なん、すべていみじう愛敬づきたりし」など言へば、妬がりて笑ひ歩くに、陣に著き給へりける折に、わきて呼び出でて、「かうなん言ふ。猶そこ教へ給へ」と言ひければ、笑ひて教へけるも知らぬに、局のもとにて、いみじくよく似せて讀むに、あやしくて、「こは誰ぞ」と問へば、あみ聲になりて、「いみじき事聞えん。かうく、昨日陣に著きたりに問ひきて立ちにたるなめり。誰ぞ」と、憎からぬ景色にて問ひ給へれば」と言ふも、わざとさ習ひ給ひけんをかしければ、これだに聞けば、出でて物など言ふを、「宰相の中將の徳見る事、そなたに向ひて拜むべし」など言ふ。下にありながら、「上に」など言はするに、これをうち出づれば、「誠はあり」など言ふ。御前に、「かく」など申せば笑はせ給ふ。

○詩をいとをかしう——齊信卿の朗詠よくし給ひしに、上達部に成りて昔のやうにもまるり給はで、おもくしくはくちをしからんと也。
 ○せうくわいけいのこびやう——朗詠云、蕭會稽之過古廟、託締異代之交、是朝綱卿の交友之序の文也。會稽の大守蕭氏、吳の季札が賢をしたひて、其廟に行きあそびし事也。
 ○いまだ三十のごに——未レ速ニ三十期ニ古詩の詞なるべし。未レ勘ニ全文。

三 清少のしらぬ也
 四 宣方の也
 五 清少の詞也
 六 宣方也
 七 宣方の詞、をかき事をいはん也
 八 齊信に朗詠をならひし事をいへり
 九 清小にきかれんばかりに態ささやうに習ひしを感ずる也
 一〇 宣方の詞
 一一、四方
 一二 かの宣方の朗詠せらるれば也
 一三 實は局に有りしとて出で合ふ也
 一四 宣方よりのせうそくのさま也
 一五 消息の詞也、參らんとするを也

○さらにわろくもあらず——わろくもあらず、よくもあらずとふくめたる詞也。其故に佗しの事やとのぶかたのいへる也。
 ○ちんにつき——齊信の着陣し給ふ也。
 ○かうなんいふ——清少かくのごとくいへば、其朗詠を我にをしへ給へと也。
 ○いみじくよくにせて——宣方の齊信のらうえいに似せて也。
 ○たちにたる也——局にたたずみうたひしとの心也。
 ○たれぞとにくからぬけしきにてとひ給へれば——彼たぞととへる清少のけしきのいとほしくて、此習ひて詠じたる事をあざりてかたるぞと也。
 ○宰相のとく見る事——清少の出でて物いふも、齊信のらうえいををしへし功德を見ると也。
 ○しもにありながらうへになど——常は清少の局にありても、后宮の御前になど留守つかひて宣方にあはぬと也。
 内の御物忌なる日、右近のさうくわん、みつなにとかや言ふ者して、疊紙に書きておこせたるを見れば、「參ぜんとするを。今日は御物忌にてなん。三十の期に及ばず」はいかが」と言ひたれば、返事に、「其の期は過ぎぬらん。朱買臣が妻を教へけん年にはしも」と書きてやりたりしを、又妬がりて、上の御前にも奏しければ、宮の御方に渡らせ給ひて、「争でかかる事は知りしぞ。四十九に成りける年こそ、さは

三かの朗詠はい
 かがききしどま
 の心也
 四清少の返事の
 詞也
 五妻也
 六帝に宣方此清
 少の返事を申上
 けらるる也
 七定子の御方に
 帝おはしまして
 也
 八清少前漢書を
 しりたるを御威
 の詞也
 九宣方をさして
 いふ也

いましめけれ」とて、宣方は「佗しう言はれにたり」と言ふめるは」と笑はせ給ひ
 しこそ、物狂ほしかりける君とこそ覺えしか。

○右近のさうくわんみつ何——右近衛將曹光とまで覺えて其名を忘れしさま
 也。諸官にかみ、すけ、せう、さくわんとてあり。近衛つかさは大將をかみと
 し、中少將をすけとし、將監をせう、將曹をさくわんとす。さうくわんはさく
 わんとおなじ。

○其ごは過ぎぬらん。朱買臣が妻を——是宣方の年齢をたはぶれて言ふ詞也。
 三十歳は過ぎて四十餘五十歳にもあらんとの心也。前漢の朱買臣が妻、買臣の
 貧しきを疎みて去らん事を求めしに、買臣笑曰、我年五十當富貴今已四十餘
 矣。女苦日久。待我富貴。報女功と教へいさめし事也。前漢書六十四に朱
 買臣が傳あり。其事を云ふ也。

百四十九

弘徽殿とは、閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆる。その御方に、うちふしと言ふ者の
 女、左京と言ひて侍ひけるを、源中將語らひて思ふなど人々笑ふ比、宮の職におは
 しまいに参りて、「時々は御宿直など仕うまつるべけれど、さるべき様に、女房な
 どもてなし給はねば、いと宮仕へ愚かにさぶらふ。宿直所をだに給はりたらんは、

給はり、懇にし
 給はは眞實に宮
 仕へせん也
 ハ女房連のあへ
 しらひ也
 九清少の詞也
 〇宣方の詞也
 二宣方のさま也
 三清少の詞也、
 そらおほえてい
 ふ也
 三傍輩の女房に
 も清少のいはせ
 し也
 四傍輩の詞也
 五清少のこまほ
 也
 六宣方のうらみ
 給ふこまほ也
 七清少の詞
 八左京と仲絶え
 しこ也

いみじうまめにさぶらひなん」など言ひ居給ひつれば、人人「げに」など言ふ程に、
 「誠に人はうちふし休む所のあるこそよけれ。さるあたりには、繁く参り給ふなる
 物を」とさし應へたりとて、「すべて物聞えず。方人と頼み聞ければ、人の言ひ古し
 たる様に取りなし給ふ」など、いみじうまめだちて怨み給ふ。「あな怪し。如何なる
 事をか聞えつる。更に聞きとどめ給ふ事なし」など言ふ。傍なる人を引き揺がせ
 ば、「さるべき事もなきをほとり出て給ふ。様こそあらめ」とて花やかに笑ふに、
 「是もかの言はせ給ふならん」とていと物しと思へり。「更にさやうの事をなん言ひ
 侍らぬ。人の言ふだに憎き物を」と言ひて引き入りにしかば、後にも猶「人に恥ぢ
 がましき事言ひつけたる」と怨みて、「殿上人の笑ふとて、言ひ出てたるなり」との給
 へば、「さては一人を怨み給ふべくもあらざめる。あやし」など言へば、その後は絶
 えてやみ給ひにけり。

○こきでんとは——弘徽殿、女御義子の事也。閑院太政大臣公季公の御むすめ、
 一條院の女御也。

○御とのゐなど——宿直也。御番仕る事也。中宮へ御見まひの事をかくいへる
 也。

○さるべき様に女房など——清少などのあへしらひ給はねば、物うくて疎遠に
 なりたる也。

○うちふしやすむ所の——彼うちふしがむすめ左京の事を秀句にいへる也。
○すべて物きこえずかた人とたのみ——清少は口さがなからず、我方人とたのみしにと也。

○人のいひふるしたるさまにとりなし給ふ——世の人も此事いひふるすに、それとおなじさまに清少の取りなしひなさると也。

○さるべき事もなきを——清少の詞には、更に聞きとむる事もなきにうらみ給ふは、様子こそあるらめと也。恨み腹立つをほとほりと云ふ也。

○是もかのいはせ給ふ——清少のをしへていはするとのぶかたのうらみ給ふ也。

○殿上人のわらふとて——殿上人も此事によりて笑ふ故、又清少に此うらみをいひ出でしと也。

○さてはひとりを恨み——殿上人も笑ふとならば、清少一人此うらみをふべきにもあらぬを、あやしうかこち給ふと也。

百五十

一きぬのふし出
でし也
二地摺也

昔むかし覺おぼえて不用ふようなる物 經う綱げん縁べりの疊たまの舊ふるりてふし出できたる。唐から繪えの屏風びやうぶの表おもて損そなはれたる。藤ふじの懸かりたる松まつの木き枯かれたる。地ち摺すりの物もの花はなかへりたる。繪え師しの目め暗くらき、几帳きやう

三はなだの色さ
めし也
四帽額也
五長かもしの年
へて色かはりし
也
六焼亡のさま也

の帷かたびら子の舊ふるりぬる。帽ぼう額がくのなくなりぬる。七尺しちせきの髪かみの赤あかくなりたる。蒲萄ぶどう染ぞめの織物おりものの灰はいかへりたる。色いろ好このみの老おいいくづをれたる。面おも白しろき家の木き立た焼やけたる。池いけなどはさながらあれど、浮草うきくさ水草みづくさ繁さかりて。

○むかしおぼえてふよう成る——昔の俤おぼは有りながら、不用ふように成りくだりし心也。

○うげんべりのたたみ——雲綱縁疊。

○ぢずりの物——白しろき絹きぬにはなだ色のこもんなどすりたる也。

○ゑじの目くらき——衛士ゑし、繪師ゑし、清濁せいじやく二義にぎなるべし。

○ゑびそめのはひかへり——蒲萄ぶどう染ぞめ薄紫也。紫むらさは桂けいの灰はいをさす物なれば、其色そのいろのさめたるを灰はいかへるといふ也。

○浮草水草茂りて——誰取りつくるふ物もなき心をふくめたり。

百五十一

一末のまけもあるべき心也
三イ、はやきに

頼たのもしげなき物 心短こころみじかかくて人忘れがちなる。壻むすこの夜よかれがちなる。六位ろくゐの頭かしら白しろき。虚言うそする人の、さすがに人の事なし顔かほに、大事だいじうけたる。一番いちばんに勝かつ雙すわ六む六む七八十しちやうじゅうなる人の、心地こころち悪わるしうして日頃ひごとになりぬる。風吹かぜくに帆ほあげたる船ふね。經きんは不斷ふたふた經きん。

○夜よがれがち——夜離よが也。

○六位のかしらしるき——若きは末の昇進の類もあれど、老いたるはたのもしげなき也。

○人の事なしがほに——人の事を請ひ取りて其事を成就せんとするさま也。

○經は不斷經——たゆむたゆむまじきのたのみがたき心なるべし。

百五十二

近くて遠き物 宮のほとりの祭。思はぬ兄弟親族の中。鞍馬のつづらをりと言ふ道。十二月の晦日。正月一日の程。

○宮のほとりのまつり——たとへば春日八幡など遠き所も、其儀式は宮中にてあれば、近くて遠きなるべし。

○くらまのつづらをり——九折ツヅラヨリ今鞍馬に七曲といふ道也。近き道をまがりのぼれば遠き也。

百五十三

遠くて近き物 極樂。舟の道。男女の中。

○ごくらく——阿彌陀經に西方過三十萬億佛土有世界名曰極樂と説き、又阿彌陀佛去此不遠ともとける心なるべし。

○舟の道——三四十里の道も風よき時は一日一夜にもゆく心にや。

○男女の中——男は陽、女は陰。たぐひことなる物ながら、夫婦合體の理遠くて近し。

百五十四

井は 堀兼の井。走井は逢坂なるをかかしき。山の井。さしも浅きためしになりはじめけん。飛鳥井。みもひも寒し」と譽めたるこそをかしかれ。玉の井。少將井。櫻井。后町の井。千貫の井。

○ほりかねの井——武藏也。

○山の井さしも浅き——萬葉「浅香山影さへみゆる山の井の浅き心は我おもはなくに」大和物語には浅くは人を思ふ物かはと有り。陸奥也。猶あまたあり。

○あすかみもひも寒し——催馬樂「飛鳥井に宿りはすべし陰もよしみもひも寒しみま草もよし」花鳥餘情云、あすかみのうたの陰もよしは木陰也。みもひもは寒水也。みま草は馬草也。一説飛鳥井は京にある清水也。二條萬里小路に有りと云ふ。

○せうしやうゐ——少將井と書く。烏丸の東、大炊御門の南と拾芥にあり。

○櫻井——山城水無瀬の近邊也。待宵の小侍従の舊跡ある所也。

一八雲山城云云

○きさきまちの井——后町は常寧殿にありと拾芥に見ゆ。井も有りしにや。
○千貫の井——八雲にちぬきのゐとあり。

百五十五

受領は 紀伊守。和泉。

○受領——國司の事也。

○紀伊守——上國なれば從五位下也。和泉は下國にて從六位下也。官位令に有り

百五十六

やどりのつかさの權の守は 下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

○やどりのつかさの權守——環翠軒舟橋從三位の職原抄の私抄云、宿官とは官外記などの五位したるが、頓て顯職に任じがたきを、外國等にしばし任ず。これは官を宿す義也。職原抄云、權守者近代多是遙授也。環翠軒云、遙授とははるかにさづかる也。國の守は四位五位の者先づ任じて則ち任におもむくを、權守は其國へはおもむかず、これ遙授の義也。又曰、權守は地下の五位六位これに任ず。又春の除目の時參議雲客などの兼官になる事も有り。それは別事也。
○下野。甲斐。越後——およそ諸國に大國、上國、中國、下國とてあり。大國

と上國には權守あり。中下國には權守なし。此草紙の五ヶ國は皆上國也。權守勿論有り。

百五十七

大夫は 式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人、思ひかくべき事にもあらず。かうぶりえて、何の大夫、權の守などいふ人の、板屋のせばき家持たりて、また小檜垣など新しくし、車宿りに車引き立て、前近く木多くして、牛繫がせて、草など飼はするこそ、いと憎けれ。庭いと清げにて、紫革して伊豫簾かけ渡して、布障子張りて住居たる。夜は、「門強くさせ」など事行ひたる、いみじうおひ先なく、心づきなし。親の家、舅はさらなり。をぢ、兄などの住まぬ家、其さるべき人のなからんは、おのづから、睦まじううち知りたる受領。又國へ行きていたづらなる、さらずは女院、宮腹などの屋敷多あるに、つかさ待ち出でて後、いつしかとよき所尋ね出でて住みたるこそよけれ。

○大夫——侍の叙爵せしを大夫といふ也。環翠云、八省の丞左右衛門尉など五位に成りたる時、中務大夫、式部大夫など云ふ也。侍の面目也云云。
○式部大夫——式部丞は相當六位なるを、五位に叙して、叙爵したるを式部大夫といふなり。

一叙爵する事也
二受領の權の守也、前註
三小檜垣也
四庭のひろからぬ也
五前におもひかくべきにもあらずといひし首尾也
六布障子也
七いひ付くる也
八行ききのたのみなき也
九舅の家はいふも更也と也
二伯父也
三そこにすむべき人もなき所なり也

三助字也
四それならずは
五さやうの所を
求め出でて也

○左衛門大夫——左衛門大尉は六位也。叙爵して、左衛門大夫といふ也。
○史大夫——左右大史は正六位上也。五位になりて史大夫といふべし。
○紫がはしていよす——伊豫籬をむらさきの革にてかけたる也。
○おやの家しうとは更也——是より彼門つよくさせなどいひし事の、心づきな
きに付けて、住むべき家は假初にて、少し荒れたるやうなるがよき事をいふと
て、そのしなくをさまなく書きつゞけたり。
○おのづからむつまじうち知りたる受領——自然したしく知りたる國守の
家。又は其國守の任國へ行きて、留守に住む人もなくいたづらにあるなど借り
て住むもよからんとの心也。
○宮ばらなどの屋あまた——宮達ある所を宮ばらと云也。伊勢物語にそこ成り
ける宮ばらにとあるにおなじ。源氏に宮腹の中將とあるは別の事也。
○つかさ待ち出でてのち——其家に住むべき程の官に至り、身の威勢付きて後
にすむこそよけれと也。

百五十八

女の獨り住む家などは只いたう荒れて、築土なども全からず。池などのある所は、水
草も、庭なども絲蓬茂りなどこそせねど、所々砂子の中より青き草見え、寂しげな

一これより別段
也
二不全也
三水草ある也

るこそ哀れなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いたう固め、きはくし
きは、いとうたてこそ覺ゆれ。
○所々すなごの中より青き——朗詠ニ庭増ニ氣色ニ晴砂緑、又鑽レ砂草只三分許な
どいへるさま也。
○きはくしき——急度する心也。

百五十九

宮仕へ人の里なども、親ども二人あるはよし。人繁く出て入り、奥のかたに、數多
様々の聲多く聞え、馬の音して騒がしきまであれど悲し。されど、忍びても現はれ
ても、「おのづから出て給ひけるを知らで」とも、「又いつか參り給ふ」なども、言ひ
に差覗く。心がけたる人は、いかがはと、門開けなどするを、うたて騒がしう危う
げに、夜中までなど思ひたる景色、いと憎し。大御門はさしつやなど問はすれば、
「まだ人のおはすれば」など、なまふせがしげに思ひて應ふるに、「人出て給ひなば
疾くさせ。此頃は盗人いと多かり」など言ひたる、いとむつかしう、うち聞く人た
にあり。此人の供なる者ども、この客今や出づると、絶えず差覗きて、けしき見る
者どもを笑ふべかめり。眞似うちするも聞きては、いかにいとどきびしう言ひ咎
めん。いと色に出でて言はぬも、思ふ心無き人は、必ず來などやする。されど、す

四それほごにこ
そあるまじけれ
也
五見よき事也
六修理也
七前段に門よく
させなご事行ひ
たる心付きなし
さいへる首尾な
り

一見まつる人、
女房なごつひひ
しありさま也
二思ひ人なごの
音づる也
三自然也
四逢ひ見る隙も
やごころかけ
し人のさま也
五門守の答也、
客のおはすれは
ささず也
六防の字也
七答ふる也
八家主のいひ付
くる詞也

九よそ人のうち
 きくもむづかし
 きさ也
 二句、此客人の
 供也
 二門守などのさ
 まをさしていふ
 也
 三門守などの
 ぞくさまを、供
 の人人まねし笑
 ふを、門守のき
 きたらほさ也
 三是より彼來さ
 ぶらふ人の事を
 云ふ也
 四健也、ますぐ
 なる人也
 五健なる人の詞
 也
 六イ、いぬる
 七眞實に思ふ人
 の事也
 八早歸り給へこ
 也
 九逢也、追やる
 心也
 三門守などの夜

ぐよかなるかたは、「夜更けぬ。御門も危かなる」と言ひてぬるもあり。誠に心ざし
 ことなる人は、「はや」など、數多度やはるれど、猶居明せば、度々歩くに、明け
 ぬべき景色を珍かに思ひて、「いみじき御門を、今宵らいさうとあけ廣げて」と聞え
 ごちて、味氣なく曉にぞさすなる。如何憎き。親添ひぬるは、猶こそあれ。まして
 まことならぬは、いかに思ふらんとさへつゝましうて、兄の家なども、げにきくに
 はさぞあらん。夜中曉ともなく、門いと心がしこくもなく、何の宮、内わたりの殿
 ばらなる人々の出て合ひなどして、格子などもあげながら、冬の夜を居明して、人
 の出でぬる後、見出したるこそをかしけれ。在明などは、ましていとをかし。笛
 など吹きて出でぬるを、我は急ぎても寝られず。人のうへなども言ひ、歌など語り
 聞くままに、寝入りぬるこそをかしけれ。

○宮つかへ人の里なども——是より親なき宮仕へ人の里亭の事をいふ也。宮つ
 かへする餘情にて、にぎははしきやうなれど、父母なきはたよりなく悲しとの
 心也。
 ○出で給ひけるけるもしらで——思ひ人のかの宮つかへ人に音信の詞也。退出
 をもしらで、とく見まはざりしと也。
 ○うたてさわがしう——夜中までさわがしと家主などの心もとなくおもふさま
 也。是も親なき人の里亭なれば、家守などの心に任せてつよく守るが佗しき事

行する也
 三門守の心也
 三三ひ事する也
 三門守をにくめ
 る也
 三三句
 三五まましき親の
 事也
 三六自由なるまじ
 さふくめたり
 三毛句
 三六可畏也、門さ
 すをそれもなく
 て也
 三九彼のかへる人
 の吹く也

をいふ也。
 ○なまふせがしけに思ひて——防の字也。彼とひ來てある人を防ぎていとはし
 げに門守のいふ也。
 ○このかく今や出づると——人出で給ひなばとくさせといひつけられし門守な
 どの、客は出で給へるやとのぞきうかがふを、客の供人のわらひてまねなどす
 る也。
 ○いといろに出でていはぬも——色に出でておもふよしなどいはぬとてもと
 也。
 ○夜ふけぬみかどあやふかなる——夜更けて門の用心もあやふきに、とく寝て
 門ささせんとてねたるもありと也。イいぬるもありは、早く歸りて門ささせん
 とていにし也。此本可然にや。
 ○あけぬべきけしきをめづらかに——此の客の猶歸りて夜あかさんずるけしき
 を、門守がめづらかなる人かなとおもふ也。
 ○こよひらいさうとあけひろげて——古語未勘。
 ○おやそひぬるはなほこそ——親の守る人は、門守のむつかしきより猶つつま
 しくこそあれと也。
 ○げにきくにはさぞあらん——兄などの聞くには、猶おもふ人に逢ふ事のつつ

一 女友たち也
 二人の来る音する也
 三 ふさをりく
 四 彼來たる人の詞也
 五 何さながめ給ふらんさ、思ひながらさ也
 六 女の答也
 七 圓座也
 八 女がた也
 九 來たる男也
 一〇 詞はいひたら

ましからんと也。
 ○何の宮うちわたりの——なんでふ其宮かたの殿原禁中などの殿ばらの忍びて來逢ふ心也。
 ○人の出でぬるのちも——かの忍びてきし人の歸りたりしのちも也。
 ○人のうへなどいひ歌など——ねいられぬほどに、かたへの人に人の上をかたり歌物かたりをもし、人のいふをもきくきくねいりたる也。

百六十

雪のいと高くはあらで、薄らかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。又雪のいと高く降り積みたる夕暮より、端近う同じ心なる人二三人ばかり、火桶中に据ゑて、物語などする程に、暗うなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いと白う見えたるに、火箸して灰など掻きすさびて、あはれなるもをかしきも、言ひ合するこそをかしけれ。宵も過ぎぬらんと思ふ程に、履の音近う聞ゆれば、怪しと見出したるに、時々かやうの折、覺えなく見ゆる人なりす。今日の雪をいかにと思ひ聞えながら、何てふ事にさはり、其所に暮しつるよしなど言ふ。「今日こん人を」などやうのすぢをぞいふらむかし。晝よりありつる事どもをうちはじめ、よろづの事を言ひ笑ひ、圓座さし出したれど、片つかたの足はしもながらあるに、

すも也
 二 かの男のさま也
 三 女房ばかりありてはの心也
 四 三居明
 五 かの人のきたりしは面白き也

一 是より過ぎたる事の物語也
 二 イイみじう
 三 楊器
 四 誰にや、未考

鐘の音の聞ゆるまでになりぬれど、内にも外にも言ふ事どもは飽かずぞ覺ゆる。あけくれの程に歸るとて、「雪何の山に満てり」とうち誦んじたるは、いとをかしき物也。女の限りしては、さもえ居あかさざらましを、只なるよりはいとをかしう、すぎたる有様などを言ひ合はたる。
 ○あはれなるもをかしきも——世の中の哀なる事面白き事などを也。
 ○なんでふ事にさはり——何と言ふ事の故障にて只とまゐりしと言ふ也。
 ○けふこん人を——拾遺集「山里は雪ふりつみて道もなしけふこん人を哀とはみん」兼盛のうた也。
 ○あけくれのほどに——味爽文選夜明けんとてしばしくらくなる也。
 ○雪何の山にみてる——曉入三梁王之苑、雪満三群山、謝觀が自賦の詞、朗詠にあり。梁孝王は漢文帝の御子也。竹苑をひらきて雪の朝は鄒生枚叟などを召してあそび給ひし事文選の註にあり。

百六十一

村上の御時、雪のいと高う降りたりけるを、楊器に盛らせ給ひて、梅の花をさして、月いと明きに、「是に歌よめ。いか言ふべき」と、兵衛の藏人に賜びたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。歌など詠まんに

五イ、給はせ
六村上の勅定也
七めづらしけな
しと也

は世の常なり。かう折に合ひたる事なん言ひ難き」とこそ仰せられけれ。

○村上の御時——六十二代天曆のみかど也

○雪月花の時と——朗詠、琴詩酒伴皆抛我、雪月花時最憶君。これ文集にて
樂天の殷協律をおもひて憶君とつくれりしに、今の兵衛藏人はかやうの折も
我君を思ひ奉るとの心にていへるなるべし。

○かうをりにあひたる事なん——袋双紙云、俊頼云、折ふしにかなひたる歌を
詠ずるは、讀むにはまされる也。前齋宮歸京の時、供奉の人舟中にいねずして
ある間に、郭公一聲鳴きたり。萬人新しき歌をよまばやとおもふ時分に、女房
の聲して「淀のわたりのまだ夜深きに」と吟じたり。人々感じて忘れがたかり
ける也。

同じ人を御供にて、殿上に人さぶらはざりける程、ただませおはしますに、炭櫃
の煙の立ちければ、「彼は何の煙ぞ。見て來」と仰せられければ、見て歸り参りて、

一兵衛藏人也
二村上の帝也
三見て來よと
言也
四兵衛藏人歌也
五蛙をそへたり

わたつみのおきにこがるる物見ればあまの釣してかへるなりけり
と奏しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りて焦がるるなりけり。

○わたつみのおきに——沖を爐火にそへて、蛙の火にこがれたるをいはんとて
よめるうた也。

百六十二

一人形也
二髻也、びんづ
らゆふ也
三皇后宮へなる
べし
四御鐘愛なりし
と也

御形の宣旨、五寸ばかりなる殿上童の、いとをかしげなるを作りて、みづら結ひ、
装束などうるはしくして、名書きて獻らせたりけるに、「ともあきらの大君」と書き
たりけるをこそ、いみじうせさせ給ひけれ。

○みあれのせんじ——今昔物語云、御形の宣旨といふ人は、優にやさしくかた
ちもめでたかりけり。皇太后宮の女房也。註御堂の中姫三條院の御時、皇后宮
と申したるが女房云云。愚案、後拾遺集の作者、大和宣旨と同人なるべし。作
者部類云、中納言惟仲女。三條院皇后宮女房。大和守義忠爲妻之故、號大和一

一せんかたなく
はづかしき也
二顯證あらはな
る心也
三しひておもひ
おこしてをみ
る也
四見習はぬ也
五后宮をほめ奉
る也
六清少御前をこ
く歸らんと思也
七定子の御詞也
八何さして真向
ならで、そほめ
ても見えまら
せんこの心也
九うつふしたる
也

枕草子春曙抄 卷九

百六十三

宮に初めて参りたる頃、物の差し事數知らず、涙も落ちぬべければ、よなく参りて、三尺の御几帳の後にさぶらふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手も得さし出でまじうわりなし。これはとあり、かれはかゝりなどの給はするに、高坏にまありたる大殿油なれば、髪かみの筋すぢなども、中々晝よりは顯證に見えて眩ゆけれど、念じて見などす。いと冷き頃なれば、さし出でさせ給へる御手の僅に見ゆるが、いみじう匂ひたる薄紅梅なるは、限なく目出度しと、見知らぬさとび心地には、いかかはかゝる人こそ世におはしましけれと、驚かるゝまでぞ守り参らする。曉には疾くなど急がるゝ。葛城の神も暫しなど仰せらるゝを、いかで筋かひても御覽せんとて臥したれば、御格子も参らず。女官参りて、「これはなたせ給へ」といふを、女房聞きて放つを、「待て」など仰せらるれば、笑ひて歸りぬ。物など問はせ給ひ、宣はするに、久しうなりぬれば、「下りまほしうなりぬらん。さははや」とて、「よさざりは疾く」と仰せらるゝ。ゐざり歸るや、遅きと、開け散らしたるに、雪いとをか

一〇格子をあけぬ也
二格子あけよそより申也
三女房達定子の御心をしめてあげぬ也
四三定子の御詞、清少退出したからん也
五四されば早かへれ也
六一、かへるにや
二后宮の清少をめす詞也
三后宮の詞也、宮づかへする身のさのみよるよるはかりまゐるべき事かはいさむる也
四后宮の懇に思し召すに清少のうさからんは心の心也
五清少を進め出すに也
六一急せば

し。今日は晝つ方参れ。雪に曇りてあらはにもあるまじしなど、度々召せば、此の局あるじも、さのみや籠り居給ふらんとする。いとあへなきまで、御前許されたるは、思し召す様こそあらめ。思ふに違ふは憎きものぞと、只急がしに出せば、我にもあらぬ心地すれば、参るもいとぞ苦しき。火焼屋の上に降り積みたるも、珍しうをか。御前近くは、例の炭櫃の火こちたくおこして、それには態と人も居す。宮は沈の御火櫃の梨繪したるに向ひておはします。上臈御まかなひし給ひけるまに、近くさぶらふ。次の間に、長炭櫃に間なく居たる人々、唐衣着垂れたる程也。安らかなるを見るも美しく、御ふとりつぎたちる振舞ふ様など、つゝましげならず、物言ひ多わらふ。いつの世にか、左様に交らひならんと思ふさへぞつゝましき。おうよりて、三四人集ひて、繪など見るもあり。

○宮にはじめて——これ清少の、定子の御方へまゐりし始めの物語也。
○よる／＼まゐりて——ひるも侍らぬにはあるまじけれど、御前へは夜々まゐりしなるべし。恥づる故也。
○これはとありかれはかゝり——繪のいはれを、定子の仰せきかざるゝ也。
○たかつきにまゐりたるおほとのおぶら——高坏にともせし灯也。よの常の灯臺ならでひききゆるゑ、髪などもよく見ゆる心也。
○いみじう匂ひたる——寒氣に定子の御手のあかみて、色のうつくしき事をい

三 中宮の御かたの火焼屋也
 三 事々しく也
 三 定子也
 三 長園燗裏也
 三 着垂也
 三 イ、御ふみさりつき
 三 笑咲也
 三 清少もいつさやうにつかへなれん也
 三 訓也
 三 奥へよりて也

ふ也。

○見しらぬさとびごこち——内わたりを見習はぬ里心にはと也。清少の身の事をいふ也。

○かつらぎ神もしばし——清少をしばしまてととめさせ給ふ詞也。葛城の神は形見ぐるしとて、晝の役をせでよるのみ橋をかけられし也。前註。清少のよるよるのみまわりて、晝は退出するゆゑかくたはぶれての給ふ也。

○またなどおほせらるれば——しばし格子をあけそと也。夜明けぬとならば、清少の歸るべければ、猶とどめさせ給はんとての事也。

○物などとはせ給ひ——定子清少に物問ふなど、ゆるさせ給はねば、程の久しくへたると也。

○ゐざりかへるやおそきとあけちらし——清少の御前よりゐざり歸るやいなや、格子を明けはなちし也。前に女官の是はなたせ給へなどいひし首尾也。

○此つばねあるじも——後宮の御かたにて、清少のひるはやどりゐたる局のあるじ也。誰ともなし。

○いとあへなきまで——あへなきは、あぢきなき心也。新參の清少をあまりなるまで召しまつはすは、后宮の御心こそあらめと也。

○我にもあらぬ心ち——清少はづかしさに心ならず參上する也。

○れのすびつ——后宮の御座をあたためんとて、いつもすびつをおかるゝ也。

○ぢんの御ひおけのなしゑ——沈の御火桶。梨繪は梨地のたぐひなるべし。

○上らふ御まかなひし給ひけるまゝにちかく——上藤の御かた也。御陪膳などに候し、中宮の御介錯などする人なれば、御前ちかく侍る也。

○やすらかなるを——清少のうるゝしきに、人々の宮づかへ馴れて、進退安げなるが美しきと也。

○御ふとりつき——イ本御文とりつき、此本可然にや。御ふは中宮の御封歟。

河海云、三宮各千五百戸。弄花云、戸は民戸也。民戸をよせらるゝ心也。それを封戸ともいふ也。愚按、今世の知行所の事也。

一 車の前阿のこゑ也
 二 清少也
 三 すこしのぞく心也
 三 伊周公也、后宮の御兄也
 五 映の字也
 六 伊周詞
 七 物忌なれど雪の御見まひに也
 八 后宮の御詞也

暫しありて、さき高う追ふ聲すれば、「殿參らせ給ふなり」とて、散りたる物ども、取り遣りなどするに、奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめりと、御几帳の綻びより、僅に見入れたり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雲に映えてをかし。柱のもとに居給ひて、「昨日今日物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、覺束なさに」などの給ふ。「道もなしと思ひけるに、争てか」とぞ御應へあなる。うち笑ひ給ひて、「あはれともや、御覽する」とて「などの給ふ御有様は、これより何事か勝らん。物語にいみじう口にまかせて言ひたる事ども、違はざめりと覺ゆ。宮は白き御衣どもに、紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる。御髪のかゝら

九何さしておはせしにさ也
 〇伊周公也
 二けふこん人をさいふ歌の詞也
 三伊周公にまさる人あらじさ也
 四伊周の繪物語也
 五女房のなれて御返事申也
 六イ、あらがひかへし
 七清少の恥しきより也
 八伊周の體也
 九五后宮にもまるらせ給ふ也

せ給ふるなど、繪に書きたるをこそ、かゝる事は見るに、現にはまだしらぬを、夢の心地ぞする。女房と物言ひ戯れなどし給ふを、應へいさゝかも恥かしとも思ひたらず。聞え返し、虚言などの給ひかくるをあらがひ論じなど聞ゆるは、目もあやに淺ましきまで、あいなく面ぞ赤むや。御菓物参りなどして、御前にも参らせ給ふ。

〇とのまゐらせ給ふなりとて——實は伊周公なれども、まづ道隆公のおはせしとて、おち散りたる物を、とりおきなどつくらふ也。

〇さすがにゆかしきなめりと——清少引き入りながら又見まゐらせまほしきは、我心ながらさすがに殿の御ありさまのゆかしきにやとて、御几帳よりのぞきしと也。めづらしき文體也。

〇道もなしとおもひけるに——拾遺、「山里は雪ふりつみて道もなしけふこん人を哀とは見ん」

〇物がたりにいみじう——伊周公のさまをほめていふ也。榮花物語五云、御年は只今廿二三ばかりにて、御形のとゝのほりふとり清げにて、色あひまことにめでたし。かの光源氏もかくやありけんと思奉る云云。是伊周公の事をいへるなり。枕双紙より後の物語なれども、しばらく引き用ゐる。

〇たがはざめりとおぼゆ——此伊周の御さまの見事なるにて、昔物語に色々人のうへをほめし事もたがはずと思ふと也。

〇うつつにはまだ——現在にはかやうの御ありさまのみぬゆゑ、夢かとおもふと也。

〇めもあやに淺ましきまで——目綾也。源氏總角、卷に、めもあやに心づきなうなりてとあり。細流云、おどろかるゝ心也。孟津抄云、目も及ばぬなどの心也云云。こゝも目も及ばず、おどろかるゝ心なるべし。

一清少をみつけ伊周のさひ給ひし也
 二伊周の清少のかたへおはす也
 三よそへかさおもへはさ也
 四かねて清少の事ききおよびし也
 五さきに几帳のほころびより、わづかに見いれし時の事也
 六いたくはづかしき心也
 七顔を見えじの心也
 八簾のすき間の影も見えんこ

「御几帳の後なるは、誰ぞ」と問ひ給ふなるべし。「さぞ」と申すにこそあらめ。立ちておはするを、外へにやあらんと思ふに、いと近う居給ひて、物などの給ふ。まだ参らざりし時、聞き置き給ひける事などの給ふ。「誠にさ有りし」などの給ふに、御几帳隔てて、餘所に見やり奉るだに恥かしがりつるを、いと淺ましう、さし向ひ聞えたる心地、現とも覺えず。行幸など見るに、車のかたに、聊か見おこせ給ふは、下簾ひき繕ひ、透影もやと扇をさし隠す。猶いと我心ながらもおほけなく、いかで立ち出てしぞと、汗あえていみじきに、何事をか聞えん。かしこき蔭とさゝげたる扇をさへ取り給へるに、振りかくべき髪の毛の怪しささへ思ふに、すべてまことに、さるけしきやつきてこそ見ゆらめ。とく立ち給へなど思へど、扇をしまさぐりにして、「繪は誰か書きたるぞ」などの給ひて、頼にも立ち給はねば、袖を押しあててうつ俯し居たるも、唐衣に白い物移りて、まだらにならんかし。久しう居給ひたりつるを、ろんなう苦しと思ふらんと、心得させ給へるにや。「これ見給へ。是は誰か書き